
～ 生徒会長が愛死天流 ～

ねこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長が愛死天流

【Nコード】

N4235D

【作者名】

ねこたん

【あらすじ】

超優等生な生徒会長、山内雛菊。そんな彼女の悩みは友達も彼氏もないこと。でもある日からそんな、日々は終わりをつけて、爆走天使も予想できないような日々に。不良を愛した、生徒会長の暴走ラブコメです！

第1話：ほほ笑むのは、罰體か天使！（前書き）

下手ですけど、ご了承ください！

第1話：ほほ笑むのは、髑髏か天使！

キンコーンカーンコーン！

4時間めの授業終了のベルがなり、みんながワイワイお弁当を食べ始める。机をつなげて語らいながら弁当を食べていかにもたのしそうだ。

そんななか、ポツリと1人だけで弁当を食べている女子がいる。

形のよい顔立ちをしており、肩より少し下まで伸びた栗色の髪を教室の開けっ放しの窓から入るまだ春の面影を残した風になびかせ、

澄んだ茶色の目はどこか寂しそうであった。

やまうちひなぐ
山内雛菊

彼女はここ青海高校の生徒会長で、成績優秀、スポーツ万能で顔も美人という絵に書いたような優等生。そんな彼女には欠点があった。彼女の欠点は、友達が皆無だということ。もちろん、彼氏もない。ドラマもアニメもタレントもよく知らないからわからないし、話についていけない。おまけにあまりにも能力がすご過ぎるために、みんなは近寄ろうとしないのである。浮いてる存在。彼女のことを一言で言うところになってしまう。

1人の弁当がどれだけ寂しいか。雛菊はガツガツと弁当を口に押し込む。ガヤガヤとうるさい教室のなかなぜか自分の周りだけとはとても静かに感じるのである。弁当を食べ終わると、自分の居るべきじゃない世界と感じてしまう教室からスタスタと出て行ってしまった。

そんな、彼女がこれからとんでもない恋に落ちる！爆走天使だつてそんなこと予想もしなかっただろうに！

生徒会長 が 愛死天流

> i 2 2 2 2 2 — 3 5 5 <

はじまり〜はじまり〜

何の意味もなく廊下をコツコツあるいていると、1人の女子生徒が学校でも有名な不良グループに絡まれていた。全

「おーい 姉ちゃん、人にぶつかつといてワビもいれんのんかい？ ああ？」

気が弱そうなそのこは、ビクビクと振るえていて今にも泣き出しそうだった……。

「あつ……その……す……すみませんで……した……」
力の限りを尽くして言ったようなその言葉に、グループの頭はこう言った。

「はあ？ きこえねえなあ！ つーか、謝るだけで許すとかおもってんのぉ？ 甘いんだよ！ 許してほしけりや金だしな！」

「いくら……です……か？」

「1万でどうだ？」

血も涙もないような、冷淡な言い方で頭は言ってその子の財布をひったくった！

「か……かえしてください……」

そのこは力の限りの勇気をだして言ったに違いない、しかし

「ああ？ なんだと？ いい度胸してんじゃねーかあ！」

その子の胸倉をしつかりつかんだ頭は、そのこにこぶしを振り下ろそうとしていた。

目の前でその様子を、みていた雛菊だつて怖かった、いくら生徒会長だといっても、不良を注意なんかしたらどんなことをされるかわからないからだ。しかし、会長の威厳をもって注意しざるおえなか

った。ここで引き下がっては一生罵られるとでもおもったのだろうか？

「ちょ……ちょっとそこ！やめなさい！そのこ嫌がつてるじゃない！」

グループの何人かの男が、雛菊にギロリと振り向き、怖い目でらんでくる……。頭は顔をあげて、雛菊をみるとニヤニヤしながら

「これは、これは生徒会長さん。正義の味方ご苦労さまです。」と嫌味をはいたと思ったらツカツカと近づいてきて頬に強烈なパンチをいきなりくらわせた。

くっ……

激痛が走る、床に倒れそうになったと思ったならみぞうちにキックをくらい鈍い効果音とともに床に頭をぶつけた。

目に涙が浮かぶ、乱れた髪が顔にかかり、殴られた場所がズキズキと痛む。そして、頭はニヤニヤした表情を浮かべて、雛菊の襟を鍛えられた太い腕でガツチリとつかみ、引き上げて

「なんか文句ある？」

と聞く。それを聞いて雛菊の真っ赤な血の色をした唇、いや血が流れ出している唇が開いたとおもうと

「あるに……。きまってんじゃない……」

と小さな声で、しかし威厳のこもった声が頭の耳にとどくやいなや、またもや雛菊を殴り倒した。

「いーかげんにしとけよ。バカ女……！」

不良なんかに絡むんじゃないかった。後悔の涙が雛菊に浮ぶ。不良達は、それぞれ攻撃態勢を身構えて雛菊に近寄ってくる。恐怖でいっぱいになりとつさに目をつぶる雛菊。

殴られる、殴られる、真っ暗なら目蓋を見つめながらそう思った。パーン！

大きな音が響きわたり、あたりでヒソヒソ話しをしてたやつらの声が消える。

しかし、痛みはない。どうしたんだろう？雛菊がおそろおそろ目を開いてみると、グループの頭は数メートル先でうつぶせの体勢でのびていた。頭の手下は青い顔で、雛菊の横にいる男に目をやっていたが数秒後には後ずさりをはじめた。

青に染めた髪、学ランのボタンを全部あけていて、倒れている雛菊の横で立っていた少年は一言だけ不良たちに言った。

「じゃま」

第1話：ほほ笑むのは、髑髏か天使！（後書き）

いやぁー初書きです。下手ですがカンベンしてください。

あ！そうそう、キャラの名前ですがとある漫画の会長さんとかぶってしまいました。ご了承を。設定は違うのでそれで勘弁してください。

1人でもたくさんの方が呼んでくれたなら、僕は幸せ者です。これから連載していくと思うので、夜露死苦おねがいます。

第2話・保健室には先生がい・・・ない!?(前書き)

続

第2話：保健室には先生がい・・・ない！？

雛菊はあっけにとられた。いや、みていたものすべてがあっけに取られたに違いない。

不良たちすらびびって身動きできない様子だ。どうやら、グループの頭はこの男にぶん殴られたに違いない。

この男、赤城あかぎいくと幾斗は、この学校No.1の不良・・・とまで言われている不良である。喧嘩が強く、彼の機嫌を損ねると女でも地獄送りだとか・・・。そんな彼が不良グループの頭を1発で倒してしまっただから・・・いろいろな意味で驚く。なぜ、驚くかはご想像におまかせします。

「ん・・・んにやる！」

多少声はびびってるものの、勇氣？ある不良グループの下っ端1人が幾斗に飛びかかる。

・・・

きつと、とても怖かったろうに・・・

パーン！

また、あの音が聞こえたと思ったら、手下は床でうずくまっていた。みていた手下は、仲間を助けようと、幾斗に飛び掛るが20秒もたたないうちに、5人がやられてしまった。

頭がようやく立ち上がって、手下に撤収の合図をする。実に不幸な連中だ。いや、自業自得かもね・・・。雛菊はそこまで観ると、恐怖から逃れた安堵感と床で打った頭がガンガンするのとで、急に眠気が来たと思ったら、意識が遠くなってしまった。

夢をみた、なんの夢だったのかは忘れたが、なにかとても楽しいよ
うな夢をみた

パチリ

目が覚めたら、そこは保健室のベットの^上だった。そうだ、自分は不良たちとのイザコザに巻き込まれて、いや突入してって気を失ったのだと思い出す。保健室に誰が運んでくれたのか？^かと思い、周りを見てみるとベッドの横に反対側を向いて誰かが座っていた。肩までのびた髪が美しい青色に染められていた。ビクリと身体が反応した。

「赤城くん？」

無意識のうちに声が出ていた、彼は振り返って雛菊をみるやいなや。

「あれ？起きた？保健室のセンコーいなかったからとりあえずベツドにねかせといたよ。」

「……………どんな反応をみせればいいのか一瞬戸惑ってから、

「あ……………ありがとう。」

と少し恐怖を混ぜたような顔で言った。幾斗はそれを観て、無雑作に頭をかくと黙り込んで何かを考えるような顔をしていた。雛菊は聞いた

「なんで、私を助けてくれたの？」

？マークが幾斗の頭の上に浮かぶ……………その後、わかったような顔をして。

「保健室に運んだ理由？倒れてたから。」

……………そうじゃなくて

「じゃあ何だよ？俺なんかしたか？」

「ほら、不良グループを倒してくれたじゃない！」

へ？という顔をする幾斗……………

「覚えてないの？」

「覚えてるけど、あれはあいつらが通行の邪魔だったから……………」

「じゃあ、私のこと気づかなかったの？」

「ゴメ、俺ぼけっとしてったからさあ……………」

それを聞いた雛菊は自然に笑っていた。

「なっ！なにがおかしんだよぉ！」

「ごめん、ごめん。つつい・・・赤城くんって面白い人だなあ
と思うて。」

高校入って、はじめて人と話して笑った。中学以来でとても嬉しかった。

「・・・あつそ・・・俺は帰るぜ。疲れたし、眠いからな。」

少し照れたように顔を赤くした幾斗は、頭をボリボリとかいて立ち上がった。

そして、保健室を出ようとする幾斗に雛菊はあわてて駆け寄り、

「まって。今日一緒に帰らない？今日のお礼にラーメンでもおごるからさあ」

幾斗は一瞬ためらったが、すぐに「いいぜ」と反応した。

ラーメンを無料で、しかも極上の美人と食えるのだから不良の幾斗は心躍らせる気分だったに違いない！

クッソ羨ましいぜ！！（作者談）

幾斗は自転車通学で、徒歩通学の雛菊も自転車置き場についていく、

「会長ーチャリ通じゃないの？」

「違うよ。」

ふーん と言うと幾斗は自分の改造自転車にまたがると、荷台を指差し「乗れ！」と言った。

「だ、だめだよ！法律違反じゃない！」

「？そうなん？しらなかったゝってことで乗れ！俺は、腹減ってんだよ！！はやくいこーぜ」

会長と不良は数秒睨み合ったが、幾斗のこわあゝい目つきに負けて雛菊はしぶしぶ荷台に乗ると、

「ゆっくり・・・走ってね」

おう と返事はしたものの、実行はしてくれなかった。自転車はも

のすごいスピードで走り、雛菊は軽く悲鳴をあげながら幾斗の背中にしがみついていた。

人生初めての2人乗り・・・まさかそれが不良なんて雛菊は思ってもみなかった。

学校の近くにある古びたラーメン屋についた。まるで大正からの古い歴史があるかのような古い古いラーメン屋だった…。中に入るとおきまりのラーメン屋のおっさんがいた。

おたがい注文をとる。2人の趣味が一致したのか、気分なのか知らないが2人とも醤油ラーメンを注文した・・・

ズルズルとラーメンを食べながら雛菊は幾斗の顔をうかがった・・・まるでラーメンを睨むように真剣な目でラーメンを食べる姿は、そのへんの雑魚なチンピラがみれば裸足で逃げ出しそうなほど怖かったが雛菊の視線に気付くと、顔をあげて薄ら微笑んだ・・・

「何みてんだよ？」

そう言うとき幾斗はゆっくりと雛菊の額に手を近づけてデコピンを食らわす。このデコピンに何の意味があつたのだろう・・・とにかく額が痛い・・・

その後、なにかと話が盛り上がった。不良と初めて話した雛菊、優等生とはじめて会話した幾斗。。。。

どちらもそれなりに初体験を行った。まあ、悪い体験ではなかったのだろう・・・

「会長って身長わりによく食べるなあー身長なんぼ？」

「え・・・157cmだけど・・・」

幾斗の質問に少し頬を赤く染めながら答える雛菊。私ってそんなに食べてるかなあ・・・

「ちっせえ！！わははっは」

「え・・・そうかなあ・・・」

てか、なんで私バカにされてるんだろう？

少し話したところで幾斗は雛菊に言った。

「今日はありがとな。」

笑顔で言う幾斗。不良も笑うんだ・・・じゃなくて！

「なにが？」

その質問に幾斗はニヤニヤしながら、

「会長のおかげで、午後の授業さぼれた。」

保健室でずっと雛菊に付き添っていたのだ。付き添った？いや、隣のソファで寝てたが正解である。結果授業をサボれた・・・。
自然にため息が漏れた。

まあ・・・ね・・・不良だから・・・

しょうがないか・・・

そして、ラーメンを完食後。

「あっ・・・お財布無いんだった。」

雛菊は自分の鞆をのぞきながら言った。

「はあ？マジ勘弁してくれえ・・・」

No1と言われる不良はひどく青ざめた顔をしたとき。

う
う
く

第3話：学校ダッシュ。ゴールなし！

朝、学校に行き席につく。自然とあくびがでる、それは昨日の夜あまり寝付けなかったからである。不良とはいえ、学校ではじめて笑いあつて話ができただのだ。嬉しくて嬉しくて・・・

昨日のラーメン代を返さなくてはと、先生にクラスを聞くと、なんと自分と同じクラスしかも、後ろの席。いつも、後ろの席が空いてると思つたら・・・

授業開始チャイムが鳴つても、幾斗はあらわれず雛菊は心のどこかで、彼を待っていた。

なぜ？心に問うが答えは解りきつていた。 「彼に会いたい。」

チャイムが鳴り響き、4時間目の授業の終わりを告げると同時に、お昼休みの合図でもある。

また、1人で食べる弁当……。さつきもで、あんなに嬉しさでいっぱいだった胸が急に寂しさでいっぱいになった気分だ。ガツガツと弁当を食べたあと、またブラブラと校内を歩いていた。

すると、昨日の奴らがまたやってきた。昨日の倍、3倍？の人数の不良がどつとでてきたと思つたら、ぐるりと雛菊を囲んでしまった。

「あれえー昨日の生徒会長さんじゃんか？」

わざとらしく口を開く不良たち。

「昨日、あんなふうになっちゃったからって、女子相手にこの人数で仕返しに来るの？」

強気な口調で、雛菊は言った。でも、本心は怖かった。また、昨日

みたいになるんじゃないかって。

「仕返し？人聞きわりーなあ！ちげーよ！あんたと遊んでやろうと思ってるだけだよ」

あれ？さっきに言葉からは偶然みつけたみたいな言い方だったのに？不良ってバカなのかしら

「さあ、来てもらおうか。」

「いや！」

否定の声をあげる雛菊を不良たちはじつと眺めていた。

「いい加減にしるよ、ちよつと話があるだけだからさあ！じゃないと、力づくでつれてかないといけなくなるからよお！」

ニヤニヤ笑しながら不良たちは雛菊に近づいてくる。さすがに、ヤバイと思ったのか雛菊はとっさに逃げる。不良たちの円のなかにできていたかすかな隙間、そこからスルリと逃げ出した。

「まで！コラあ！！」

雛菊も不良達も全力疾走で走り、周囲の人々に迷惑をかけていた。

雛菊は自慢の足で学校中を駆け回り、不良たちも必死で追いかけてくる。体育もまともに出たことの無い不良たちが雛菊においつけるわけも無く、不良達は雛菊を見失った。

「クっソ！」

雛菊はそつと物陰からその様子をみていたが、不良達が消えたのを見てホッため息をついて教室に帰ろうとした。

HR終了のチャイムが鳴った。1日の終わりのチャイムが。今日は、生徒会の会議もないし早めに帰ろう。そう思って、荷物をまとめ校門の前に行く不良達がまっていた。

えっ？

予想もしなかったことに雛菊はおどろいてしばらく、呆然と立ち尽くしていたら、不良の1人が雛菊に気付いて

「おい、いたぞー！」

と声を上げると不良達は雛菊目指して猛ダッシュ！雛菊も走って、

校舎の中に逃げ込む。階段をかけ上がり必死で逃げる！

「逃がすかあ！」

不良達は今度こそという気迫で追いかける。

いつのまにか、雛菊は屋上に追い詰められていた。

ヤバイ その言葉が頭をよぎる。不良達も屋上にあがつてくると、じりじりと近づいてきた。雛菊もじりじりと後ずさりしている。

途中、足になにかが引つかかって床にしりもちをつく。しかし、床の感触とはちがう柔らかな感触が尻に伝わってきた。

「いつてーな！」

そう言ったのは今日、1日中雛菊が待っていた男性。すなわち赤城幾斗だった……。

第4話：校門を出る時間です

今日1日、待っていた彼が今、目の前にいる。

「いつてーな」

赤城幾斗は、怒鳴って雛菊に言った。いい気持ちで寝てたのに起こされて不機嫌なのだろう……。

「てつめ！喧嘩売ってんのか！？ってあれ？会長じゃん。どったの？」

と聞いて、雛菊を見下ろすと雛菊は涙をいっばいためた目で幾斗を見上げていた。

「え？ええ？あれ？んだよ。俺なんかしたか……」

安堵の涙がこみ上げてきて、幾斗はそれにおどおどしていた。

「ああ？オイ、コラ！会長こっち来い！」

そういいながら、不良達が雛菊に近づいてきた。幾斗は雛菊が何で今にも泣き出しそうな顔をしてるのがわからずに、とりあえず雛菊に

「おい、誰に泣かされた？俺か？俺なのか？」

そう聞かれて、雛菊は首を横に振って口を開こうとした。しかし、その瞬間1人の不良が雛菊に飛び掛った。

ゲキ

鈍い音が響き、幾斗の声が聞こえた。

「会長を泣かしたのテメーラか！？ぶっ殺すぞ？」

この学校の不良が何人束になってかかっても、幾斗の相手にはならないだろう。彼が一步、歩くたびに不良達は後ずさりしていた。

「ビビリが！」

幾斗が今度は飛び蹴りをくらわせたあと、アッパー、回し蹴り、スリートなど数多くの技をくりだして不良達をフルボッコにしてしまった。不良達が屋上でのびてるのをあとに幾斗と雛菊は学校を出

た。

無言で歩く二人、何か話さなくては、なにか話したい、そう、雛菊は思つて。

「学校来てたの？」

「ん？ ああ。」

「なんで、教室来なかったの？」

「だって、寝坊しちゃってさ。遅刻した。途中から教室とか入りたくないじゃん」

そう言って、笑ってた。

「その生活毎日つづけてるの？」

「うん」

「じゃあ、明日から起こしに行つてあげるわ」

冗談のつもりで言った言葉だった、きつと「えっ！いいよ」とか「タリ！」とか言われて終わるんだと思ったら、

「えっ？マジ？じゃあヨロウ」

え！！！！！！！意外な反応驚きでいっぱいだ。

「俺んちあつこだから。」

指差した先には、おんぼろのマンションがあり、幾斗の家は2階の202号室だそうだ。

「じゃーね。」

そう言つて幾斗は歸つていった。雛菊はそれを見送つたあと、自分の家に帰ろうとした。

家に帰り着いて気が付いた。

ラーメン代返すの忘れてた。

0 円玉 1 枚が入っていた。

ポケットには 1 0 0 円玉 1 枚と、
5 0

第5話：友と想い人は一緒にやってくる。

ピンポン

雛菊は今、幾斗の家の前にいる。緊張しながら、チャイムを鳴らした。

「はい」

出てきたのは幾斗くんじゃなくて、髪の毛を2つに結んだ小さくて可愛い女の子だった。たぶん小学生くらい……。

「どなたですか？」

そうきかれて雛菊はどう答えるべきかなやんだ。正直に言うべきか。

「あ・・あの」「ああ！兄ちゃんの彼女か。待ってて、にいちやん起こしてくるよ。」

「か・・彼女じゃ・・・」

言い終わる前にその子は家の中に引つ込むとなにやら声がして、髪がぼっさばさの幾斗がでてきた。

「あつ。会長。おはよう」

のんきな声が聞こえる。この人本当に不良なのか？

「あつ・・その・・む・・迎えにきた。」

「もう、そんな時間？」

「うん」

幾斗は、部屋に引つ込むと、パンを1枚くわえて出てきた。もちろん制服は着てた。着崩してるけどね・・・。

学校へ向かう道、一人の女子が2人に声をかけてきた。

「赤城くん。おはよう。あつ！会長さんだ。おはよう」

そのこは同じクラスの系河安曇^{いとかわあつみ}である。雛菊の斜め前の席に座っている人である。

「よお！」「おはよう」

とりあえず答えといた。幾斗くんと、安曇さんの関係ってなんだろう

う？

3人で学校に登校。ちょっと前の私からは、想像できないことである。とりあえず、数ある疑問を解き明かそうとする。

「ねえ、幾斗くん。あの時家にいた女の子だれ？」

「ああ・・・妹。」

疑問解決。

学校について、席にすわり系河さんに聞いてみた。

「ねえねえ 系河さんと、幾斗くんってどんな関係なの？」

「私？幾斗くんの舎弟だけど？」

「えっ？なんで？」

「自分で、立候補したの。だって、幾斗くん強いし。私、前いじめられてただけど、幾斗くんの舎弟になってからなくなったから感謝してるんだ。」

幾斗くんて・・・本当に不良？

「ねえ。会長さんは、幾斗くんとどんな関係？恋人？友達？舎弟？」

「えっ・・・と。どうなんだろう？友達かな？」

実のところ、友達かどうかも怪しい・・・

「会長さんは赤城くんのこと好きなんじゃないの？」

「えっ？なんで？」

やけに、焦ってた。雛菊はわかってた。これは、ヒミツの話だが、自分が第2話目くらいから幾斗のことがすきなことを・・・

それから弁当の時間になった。また1人か。そう思うと悲しくなる・・・弁当箱を開こうとしたら、安曇が近寄ってきた。

「会長さん。一緒にお弁当食べない？屋上で。」

「えっ？いいの？」

「もちろん。いこうよ」

すごく嬉しかった。屋上に行くと、幾斗がいてコンビニ弁当をむし

やむしやと食べていた。

「おう」

軽く、返事をする幾斗。

3人で円を書いて食べる弁当。最近、いいことづくしかな……。
あの不良グループの人たちにお礼の手紙でも書こうかしら。

そんな、冗談を脳内で作成しながら、雛菊は弁当をゆっくり食べていた。

「ああー疲れた。」

そう言つて、弁当を食べ終わった幾斗は、屋上でゴロリとよこになった。寝ちゃった……。

幾斗がねてから、安曇と雛菊は少し話をした。

「会長さん、明日も一緒にお弁当食べませんか？私、はずかしいことに友達がゼロでして……。」

はずかしそうに、安曇が言った。雛菊は笑いながら。

「じゃあ、今日から友達ゼロじゃないわね。明日も一緒に食べよう^^。」

雛菊の言葉、安曇の笑い声、幾斗の寝言……3人の世界が1つにつながったような一瞬だった。

「眠くなっちゃった……」

そういつて、安曇も床に寝転がると、空を見上げていた。雛菊も隣で横になる。

青く澄んだ空、白い雲 その下で3人はスヤスヤと昼寝をしていた……。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る。授業開始のチャイムか？腕時計をみると、すでに授業が終わっていた。

「私……生徒会長なのに……」

会長はひどく、おちこんだとき。

第6話：恐怖のダークとピンクの鯉

うう……

昨日、昼からの授業をサボってしまった。どうしよう……。

これは、さすがにヤバかった。下手すれば生徒会長クビになるかもという不安があつたからだ。教室に入ると先生がいた。HRが始まったが、先生はなにも昨日のことを言わないし授業が普通どおり開始された。

「セーファーだったな会長!!」

後ろの席からニヤニヤした幾斗の声が聞こえる。コクリと無言でうなずくと、前を向いて安堵のため息をもらした。

授業中に寝息が聞こえる……前から……後ろからも。

「ちよつと。赤城くん。起きなよ。」

とりあえず起こしてはみるが反応がない……。

「系河さんも起きてよ。」

なんとか起きたみたいだが、その数秒後にはまたいびきをかいていた……。

やれやれ

さて、屋上で今日は幾斗くんはいなかった。いたけど、弁当食べすぎてどこかに行ってしまったからだ。彼女にでも会いに行ったのかしら……？

そこで、しばらく雛菊と安曇はとある話をしていた。

「会長さんに相談があるんです。」

「な．．．なに？」

「私．．．好きな人がいるんだけど．．．」

一瞬ドキツとした、もし．．．もしその好きな人が幾斗くんならば．．．そう考えるとなんだか怖かった．．．

「へ．．．へえー．．．だ．．．誰？」

「は．．．恥ずかしくて言えないよお．．．．．」

「言ってくれないと相談のれないよ？」

本心は違った。好きな人が幾斗くんではないか、それだけが気になっていた。それだけを聞きたかった．．．。それが、恋する乙女ってもんよお（江戸っ子ふう．．．）

「じゃあヒントね」

と安曇が言った。安曇のヒントは

「私の近くにいる人で、あんまり不良には見えないけど、不良な人」

というものだった．．．安曇さんは舎弟だと言ってたから、幾斗くんが近くにいる人だ。しかも、不良だという．．．。

なにか、重いものがのしかかってきたように雛菊はズシリと倒れた。

午後の授業中、ずっと考えていた。つまり、安曇さんの相談は「好きな人がいるんだけど、どうやっても告白できない。」というわけである。つまり、安曇さんが幾斗くん？に告白できればいいのだ．．．。

どうする私．．．．。

もし、安曇さんの告白を手伝ったとして、もし幾斗くんがOKしちやったら？怖い．．．でも、もし拒否したらせつかくできた友達

を失う事になりかねない。

どちらにしろ何かを失うのだ……

そう、下に下に考えてる雛菊は授業中、あきらかに暗いオーラをだしていた。

授業終了後、雛菊と安曇は廊下を歩いていた。みんなもう校舎からでていて人はあまりいないようだ……。すると……

「おっ！生徒会長さんだ」

そう言つて、またまたいつぞや幾斗にボコられた不良グループのやつらがあらわれた。なにかと絡んでくるのがこいつらであった。

「ねえ！会長こつちきてよお」

そういつて近づいてくる。安曇は雛菊の前にでて、

「私の友達をいじめないで」

堂々とした態度で不良達の前にでた。しかし、雛菊はみのがさなかった。安曇の後ろに回されていた手は確実に震えていた。

ああ？と不機嫌そうな声をあげる不良達これは、ヤバイのでは？そんなことを、本能的に感じていると、1人の不良が他の不良達を黙らせた。そしてなにやらヒソヒソと話し始め。

「失礼しました。」

と軽く礼をすると立ち去つて行つた……。

この子、いったい何をしてそんなに恐れられてんだらうか？幾斗くんの舎弟だから？

「だいじょうぶだった？」

そう言つて、笑顔で答える安曇さん。雛菊はドキつとした。

どうして、こんなに悩んでたんだらう？私のことをこんなによ

くしてくれる友達がいるのに……それなのに……私は自分のことしかみてなかった……。

雛菊は決意した。安曇の手伝いをしようと。そのことを安曇に言うとき安曇は笑いながら「ありがとーっ」って言って抱き付いていた。

作戦はこうである、”明日の放課後に幾斗くんを屋上に連れ出し、2人きりになったところで、安曇が告白をする”

まあ極めて単純な作戦ではあるがそれには目をつぶっていただきたい。

ぴ
ぴ
ぴ
ぴ
ぴ

目覚ましの音が鳴り響く。運命の1日がここに刻まれる事になる。

第6話：恐怖のダークとピンクの鯉（後書き）

作者に感想ください。どんなことでもいいのでお願いします。

第7話：真面目な質問、不真面目な答え

今日はなんだか天気がいい。お日様も元気いっぱいって感じた。

いつものように幾斗を起こしに行った。今日の告白が成功してしまえば、私はもう幾斗くんを起こしに行けないのでは？もしかして、一緒に登校できるのもこれで最後かも……

そんなことを思っていると、決心が鈍りそうになる。

決心したことは、決心したこと……。絶対に曲げない。

それは、生徒会長としての威厳と誇りを持ってこそ、出来る事なのだろう。

学校につき、授業がはじまり、あつという間に昼休み。弁当を食べながら安曇は雛菊に「ありがとう」とか感謝の言葉を言ってた。雛菊はそれを耳には通すが、流してしまっていた。

わざとではない。すべては幾斗を想う気持ちだった。

放課後、こんなに1日が早く感じることは……。雛菊はそう思った。できるだけ永くあつてほしいと願った授業もあつさり終わってしまいもう時間である。心臓が自然とドキドキしている。とりあえず、幾斗を捕まえなくては……

「赤城くん、ちょっといいかなあ？」

「んだよ？」

「ちょっと屋上いかない？」

「なんで？」

「お・・・面白いものやってるんだよ・・・観に行こうよ」

幾斗は不思議そうな顔をした、

「屋上で？」

「う・・・うん」

「面白くなかったらぶつ殺すぞ？」

「う・・・うん」

そうやって、なんとか幾斗をさそうことに成功した。

雛菊は、屋上へつづく階段をのぼりながら幾斗に話しかけた。

「赤城くんには、好きな人とかいる？」

さりげなく、聞いてみると

「うん。・・・いるよ」

さりげなく答えられた・・・

「誰？」

心臓がバクバクする、なんでだろう？ 答えが怖くて怖くてたまらないようだっただ・・・しかし、幾斗は

「教えねーよ。バーカ」

舌をぺろつとだして、雛菊を笑うと走って屋上にかけて行っただ。

私の役目は終わった・・・そう思い屋上の1個下の階の階段に座っていた。自然に涙がこぼれていた。まだ、失恋したわけじゃないのに・・・そう自分に言い聞かせていたが、あふれ出す涙を止めることが出来なかった・・・。

第7話：真面目な質問、不真面目な答え（後書き）

この前、お手紙、コメントありがとうございました。うれしくおもいます。ありがとうございました。

第8話：そんなことですか・・・？

待っている時間が、随分永く感じられたのはなぜだろう・・・。
その時間、膝を抱えてうずくまっていた。

雛菊のもとにかけよる足音がしたのは、それから少したつてからである。雛菊もその音に気付き、顔をあげると幸せ100%みたいな顔で安曇が近づいてきた・・・。そして、

「会長さん、本当にありがとう。会長さんのおかげで告白できたよ」

「そ・・・それは・・・よかったわね・・・そうだ、で？返事は？返事はとうだったの？」

最後の希望をすべてそこに注ぎ込んだと言っても過言ではない。お願い、お願い

すると、安曇はゆっくり口を開いた。

「OKだつて。私、すつごく嬉しいよ」

最後の希望の手綱な切れた・・・。

「そう・・・よかったじゃない」

そう言つて、祝福の言葉を送るしかなかった・・・。

しばらくして、安曇はさつさと立ち去ってしまった。雛菊はショックで胸が締め付けられるような痛みを襲われ、もはや泣く事も出来ないくらい気持ちが逝つてた・・・トボトボと廊下を歩き、やつとのことで靴箱にたどりついた・・・。

「おい、会長！」

どこからともなく幾斗があらわれ、歩く屍のような雛菊に話しかけた。

「まあ・・・おもしろいと言えばおもしろかったな・・・まさかあの系河が告白するだなんて・・・」

「そう・・・よかったね・・・」

そう言って雛菊は学校を出た。

朝がやって来る、まさかこんなに早く失恋するだなんて誰が予想しよう。

雛菊は家を出ると、そのまま学校に行った。もはや、彼女ができた幾斗くんを起こすしつようがどこにある？

昨日は、あまり眠れなかった。自分の気持ちを安曇にも幾斗にも伝えれなかった悔しさが雛菊の脳内でグルグル回転している。

後ろの席に目を見てみたが、幾斗はなぜか学校に来ていないのか席にはいなかった・・・。

昼、安曇と弁当を食べていた雛菊は、安曇に聞いてみた。

「赤城くん、なんで今日休みなの？」

「寝坊でもしたんじゃないかな？ 起こしに行かなかったの？」

「なんで？ あなたが彼女になったんだから彼氏の面倒くらいみてもいいんじゃない？」

ちよつと嫌味に聞こえたかもしれない、自分のせいでこうなったのに人にあたるなんて・・・私って最低かも・・・

安曇は不思議そうな顔をして、

「ちよ・・・ちよつとまってよ・・・私の彼氏は赤城くんじゃないよ？」

「へ？ だって昨日、幾斗君をつれてったら告白できたって言うてたじゃない？」

どうも、話が組み合わない？ なんでだろう・・・そこへ

「会長！ なんで起こしにきてくんなかったんだよ！ 寝坊しちまつたじゃねーか！」

そう言つて、幾斗が2人の近くに腰を下ろし、聞いてくる。

「ね・・・ねえ。昨日、糸河さんは、誰に告白したの？」

幾斗に聞くのが一番早いだろうと思つた雛菊はさっそく幾斗に聞いてみた。

「はあ？ 武藤にだろ？ たしかそうだったよな、糸河！」

「う・・・うん」

少し、赤い顔をして、安曇は言つた。

つ・・・つまり すべて私の勘違い？

身体の上すべての力が抜けたかのように、雛菊の身体はへなへなと床に倒れた。

「か・・・会長さん！ だいじょうぶ？」

安曇の声がするが、すべての悩みが一瞬でたち消されたという安心感で、もう燃え尽きていた……

少したつて雛菊が聞いた話だが、武藤勇気くん（糸河の好きな人）があの日、偶然屋上に来たため安曇は雛菊が呼んでくれたと勘違いしたのであった。

幾斗はというと、それを影でみていたらしい。

昼休憩が終わりに近づいてきたので、安曇と雛菊は弁当を片付け、教室にもどろうとした……。

「会長さん。武藤くんがね、明日から一緒に屋上で弁当食べていい？って言うてきたんだけど……幾斗くんはいいつて言うてたけ

ど会長さんは？」

「も・もちろんいいわよ。」

その、武藤くんって人とも仲良くなれるかしら？そう思っていた
雛菊に安曇は言った

「会長さん。私、今回の一件でわかったんだけど・・・」

「なにが？」

「会長さんて、幾斗くんのこと、好きでしょ？」

生徒会長はひどく、赤面したとき。

第8話・そんなことですか・・・？（後書き）

コメントありがとうございます。これからも、コメント、お手紙お待ちしております。よろしく、お願いします。

第9話：ことごとく、暑くてタリ〜ぜ

時間的なことがまだ、はつきりしていなかったみたいなので紹介します。

現在、7月の中旬。もう少しで、高校初めての夏がやってくるころあいです。

「あつー」

ズボンの裾をめくりあげて、ヤンキースタイルになっている幾斗が今にも枯れそうな声で言った。季節は夏！何年も土の中で育ってきたセミたちが、初めての地上で大合唱をおこなっている季節である。

ここ、青海高校はまあ、普通の高校なのでクーラーもないし、水泳の授業が無い！昔はあったらしいが、学校の事情で無くなった・・・。

時は昼。屋上で4人の人影が弁当を食べている。雛菊、幾斗、安曇、そして新メンバーの武藤だった。武藤は、前回の話をみてたらわかるように、安曇の彼氏である。まあ、不良で髪は金で耳にピアスつけて感じのかっこうである。教室では、安曇の隣の席・・・。

「赤城くんは、夏休みなんか用事ある？」

安曇が幾斗に質問した。幾斗は

「バイトがあっけど、ずっとじゃねーから暇な日もあんじゃね？」

「会長さんは？」

「わ・・私は、生徒会の仕事があるけど、たぶん大丈夫よ」

それを聞いて、安曇は満足そうな顔をする

「じゃあ夏休み、4人でどこか行こうよ」

「ちょ・・武藤君はだいじょうぶなの？」

とりあえず、武藤にもと思い雛菊は質問すると・・・

「僕ですか？だいじょうぶですよ。」

みなりに似合わず、言葉が丁寧なのが特徴だ。なるほど、だから

安曇が不良ぽくないと言ったのか？

「武藤君には、あらかじめ聞いたの」

そう安曇が説明すると、

「で？いつ？どこに行くんだ？山？海？川？映画館？それともデパートか？」

幾斗の質問に安曇は「ふっふっふ」得意げに笑いながら。

「夏といたら、祭りでしょ？」

まあそういうわけで、8月に夏祭りに行く事が決定した。

夏祭りと言えば、浴衣！安曇と雛菊は7月の終わりに2人で浴衣を買いにショッピングに行き、高校生が買える値段の浴衣を買った。雛菊はピンクに花、安曇は青に蝶の模様が描いてある浴衣だ。しかし、着かたがまったく解らなかったので、浴衣屋の店員さんに丹念に教えてもらい、それから3日後にやっと着こなせるようになった・・・。

祭りは、8月4日。つまり明日である。雛菊はドキドキしていた。友達と遊びに行くなど初めてだし、しかも幾斗と一緒にいるのだ……。変な妄想が頭をよぎってもおかしくない。胸の高鳴りがピークに達したのと同時に携帯電話の着信音が鳴った。

ダダダ、ダン！ダダダ、ダン！ダダダ、ダアーン！

ベートーベンの運命の着信音が鳴ると、雛菊は携帯電話を持ち上げ電話にでた。

「はい、もしもし？」

「あ、会長さん？私」 明日の集合時間は5時だったけど、私と武藤くんちよつと遅れるから、先に祭りに行つててくれない？」と安曇からの電話であつた……

まさに、妄想がピークに達する？瞬間だった。

これは、運命かもしれない。

ねえ？ルートビツヒ・ヴァン・ベートーベンさん？

第9話・ことごとく、暑くてタリ〜ぜ（後書き）

作者に感想、手紙をよかつたらください。おまちしております。

第10話：祭り会場って・・・茶碗の中の米粒の気持ちがよくわかる。

現時刻は4時55分！雛菊はすべての準備を整え、家を出るところだった。自然と胸が高鳴り、顔がニヤけてしまう・・・

私としたことが・・・

集合場所は、青海公園の前であった。いそいそと玄関を飛び出し、雛菊は5時ぴったりに公園についた。幾斗は雛菊より前に公園に来ていたらしく、公園のベンチに座ってコーヒーを飲んでいた。雛菊はあわてて近づいて・・・

「ごめん、待った？」

雛菊の質問に幾斗は、

「うん」

と答えた。遠慮の無いやつなのである。

「でも、集合時間ぴったりだからいいんじゃない？」

そう付け加えると、幾斗は「はやく行こうぜ！」と言って、ベンチから立ち上がった。

ついでに書いとくけど、幾斗のファッションはGパンに黒Tシャツって感じでまあ普通だった。雛菊は言うまでも無く、浴衣である。

祭りがおこなわれるのは、隣町である。電車にのって2人は隣町へ行こうとした。

ガタンゴトンガタンゴトン

あ…暑苦しい　まあ、誰が乗ってもそう思うだろう。仕事帰りのおっさんや祭りに行こうとする若者などで電車の中はあふれかえっていたからだ。

なんとか、隣町までやってくると駅前の大広場で盛大なお祭りがやっていた。

「うおーはじめて来たけど、すげー規模だなこりゃあ」
幾斗が感激の声を上げている。

とりあえず、広場に入ってみると・・・やっぱりすごい人の数・・・
。屋台は何個もありどれから行こうか迷うほどだ。

「たこ焼き！たこ焼き食べようぜ！」
「う・・・うん」

幾斗の提案に雛菊は賛同すると・・・

「次は、焼きそば食おうぜ」
「・・・」

「会長！次は、りんご飴！その次は、お好み焼きで・・・次は・・・」
「」

「・・・って・・・食べ物ばっかじゃない！！と突っ込みたくなる！いったい何個食べるんだろ・・・食べすぎじゃないかなあ？」

雛菊は、たこ焼きだけにしといた・・・。

それから少したってからである・・・雛菊は広場内を右往左往していた・・・幾斗とはぐれてしまったからである。幾斗が「牛串買ってくる」といってどこか行ってしまったきり帰ってこない・・・

「はぁ・・・」

ため息が漏れた・・・トボトボと広場内を歩いていたが、最後には疲れて近くのベンチにチヨコンと座った。

なんだか、おなかすいてきた気がする・・・さつき幾斗くんと食べとけばよかった。考えてみれば、たこ焼きしか食べてない・・・。たくさんの人が楽しそうに歩いてる、私は一人で寂しそうにしてる・・・。ただはぐれちゃっただけなのに、とても寂しく感じた。なぜだろう・・・。

孤独って・・・

すると、誰かが後ろから肩をたたいてきた。ビクツと肩が反射的に動いた。誰？

「会長！どこ行ってたんだよ！探したんだぜ！」

そう言って幾斗が牛串を1本雛菊に差し出した・・・

「はいよ。俺のおごり・・・。たく、会長がいなくなっちゃったからさめちゃったけどな・・・」

すごく嬉しかった・・・

「ごめん・・・ありがとう。」

私をいつも孤独から救ってくれるのは、幾斗くんだけだあ・・・

。

あつくてあたたかい何かが心の中をくすぶった。

「会長、そいやあ糸河たち来てたぜ！あっちで待ってるぜ！」

まあ、そんな感じで全員集合！てなわけでもいっきし祭りを楽しんだ！

「赤城くん。私、金魚すくいしたい」

雛菊がそう言うと、

「ええー金魚って食べねーじゃん！」

食い物のことしか考えてなかった・・・

とりあえず金魚すくいをしてみた、安曇は1匹もとれなかったみたいだし、武藤も1〜2匹だった。雛菊も2匹だけだった・・・しかし！

「赤城くん、何匹とれた？」

雛菊が聞くと

「あ？こんなに・・・」

たらいいっぱい金魚をみせる・・・1、2、3・・・軽く100匹はいる

「赤城くん、こういうの得意なの？」

「はじめてやったんだけど・・・」

その後、幾斗は射的、ヨーヨーすくい等で脅威の特技を発揮していた。まあ、商品の山つてわけである。

「大量！大量！」

4人が喜びながら歩いていると、雛菊が真っ白な服に身をつつんだ

男の人にぶつかってしまった。

「す．．．すみません」

雛菊が男の顔をみると、グラサン、リーゼントといかにもヤンキー
って感じの男が立っていた。

アワワワワワ これは、まずいんじゃない？

そう思いまわりを見ると、安曇も、武藤も幾斗も白い服を着た男た
ちに囲まれていた。

白い服、それは間違いなく特攻服だった．．．。

すると、1人のリーダっぽい男が4人に近づいてきた．．．そ
して、

「久しぶりだな、武藤！」

そう言って、雛菊たちを睨んだ．．

第10話：祭り会場って・・・茶碗の中の米粒の気持ちがよくわかる。(後書

作者に感想ください。おねがいします〜なんでもいいので、

ブログです〜キャラクターについて詳しく載ってます。

<http://star.ap.teacup.com/nekotan/>

見てみてください・・・

第11話：猫はコタツでまるくなる

白い特攻服の男たちは武藤に目をやり、

「今日は？なんの用ですか？まさか、また遠征ですか？ごくろうさまです。」

そう嫌味に言うとなたちをぐるりと眺めると、

「俺たちをなめてんですか？こんな、女、下っ端ばつかつれてきて……。」

幾斗、安曇、雛菊は何のことだかまったく理解できない……。遠征？下っ端？

すると、幾斗がわかったぞ！って感じで腕をポンとならすと、

「あんたら白龍の人たちだろ？」

そう質問した……。

「いかにも、白龍爆走連合のものだ！」

「やっぱり、縄張りについて口うるさい族があるとは聞いてたが、その縄張りに入っちゃったとはねえ〜でも、勘違いしないでくれなかな？俺たちは族じゃないし、遠征しに来たわけじゃないんだけど？」

幾斗の言葉に白龍とよばれる族の総長らしき人物が言った。

「そうか、それは悪かった……。でもな、この男ははなしちゃおけねえ！」

そう言って、武藤を指差す……。武藤くんってなにしたんだろう？

「白龍さん、ぼくはもう爆鬼天は抜けましたよ？だから、別にいいじゃないですか……」

そう武藤は言う……

「えっ……武藤って、もとゾッキかよ？あはははっははマジ？あはっはは」

そう言っただけが笑っていた……。武藤君はもと、暴走族なんだ……まあ不思議は無いけど……

ここで説明

それは1年前の夏のことである、ここ青海町と宝美町（隣町の名前）に2つの暴走族チームが生まれた。青海に爆鬼天、宝美に白龍爆走連合。仲がよかったかと言えば、そんなことはまったく無かった。2チームは激しく競い合い、時には争い、喧嘩した……

爆鬼天に所属していた武藤は、とある喧嘩で白龍のチームの頭をボコボコにしまったわけである。その後も戦いは続いたが、武藤は高校に入学すると同時に爆鬼天を脱退したのであった……

「抜けたとか関係ない！あの時の恨み、きっちり払わせる！」

そう言っただけで、白龍のやつらは、鉄パイプやら木刀やらバットやらを持ってゾロゾロ集まってきた。軽く20人はいら……こっちは5倍……

「あの時攻撃してきたのはあなたの方でしょう？返り討ちにされたくせにこの人数で仕返しをしようとするなんて聞いたことありませんか？」

武藤が余裕そうな表情で言った、

「うるせえー！と言わんばかりに数人の族が4人に飛び掛る、もち

ろん安曇や雛菊であつても問答無用！

ゴキッ

なにか鈍い音がした・・・敵の奇襲に目をつぶっていた雛菊がそつと目を開くと、自分をかばって背中を木刀で殴られた幾斗がいた・・・。

続けて鉄パイプがくる・・・

バン！バン！バン！

鉄パイプの猛攻を受けた幾斗は唇から血をたらしながらヨロヨロと立っていた・・・武藤も同じようにボコボコにされてるみたいだった・・・

「んにやる！」

そう言つて武藤が特攻！しかし、袋叩きにされている・・・やはり人数差がある・・・

「ゆるして欲しけりや土下座しな！バーカ！」
そう言つてくる！

「誰がするかよ！」

幾斗が言い返す！そして、チュルリと唇についた血を手でぬぐうと「せっかく楽しく祭り来たのに、お前らのせいであつかりだよ！クソが！真面目に殺すぞお前ら！」

と言い放つ。どこまでも強気だ！

しかし次の瞬間、バットで殴られ地面に倒れてしまった。

雛菊はヤバイと思った。このままだと確実に病院送りだ・・・。そして決心した。

「どうぞ、ゆるしてください。お願いします。」
そう言って白龍のやつらの前にひれ伏した・・・ようするに土下座したのだ。

パシヤア

携帯のカメラのシャッター音がした・・・。雛菊が顔を上げると白龍の奴らはニヤニヤしながら

「これ、青海高のやつらにこれ、おくつとく」
そう言った。

「かまわないわ！そのかわりゆるしてくれるんでしょうね？」

「ゆるすわけないじゃん。」

パーン

聞いたことあるような音が響く、グシャ！ さっきシャメが撮られた携帯が誰かに踏み潰される。

「調子のんなよ？」

幾斗がゆっくり言うところ3人の白龍の人が地面でのびていた・・・この光景どっかでみたような・・・

パーン

少し離れたところでも同じ音がした、武藤の前に2人の男が倒れている。

「な・・・なんだ、お前ら！」

なんだかお決まりの言葉だ・・・

すると、幾斗が白龍の総長の襟をつかみ言った。

「さあ、誰でしょうね？」

総長が腕に目をやると、黒猫がニヤリとわらった入れ墨がしてある。
・
・
・

「ひい……い……幾斗さん？幾斗さんですか？」

「ああ、そうだ。」

それを聞いて族の奴等は、ビビッテ動けなくなり最後には

「ひ……ひくぞ！幾斗と武藤じゃ勝てるわけねえ！」

そう言って消えていった。

私の友達および好きな人って、とんでもない人なんじゃないかなあ？

あらためてそう思う雛菊だったが、いまさらである。

第11話：猫はコタツでまるくなる（後書き）

アクセス数が少なくて寂しいです。おもしろくないならコメントください・・・なおします・・・

番外編をつくりました

爆音卍戦争

<http://ncode.syosetu.com/n5350d/>

武藤や幾斗がかかわった、中学時代の族。爆鬼天と白龍爆走連合の勢力争いの最終決戦を書いたものです。暇でしたら読んでみてください。さらに暇でしたらコメントください。夜露死苦お願いします。

第12話：フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・（前書き）

テスト終了しました・・・

第12話：フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・

「それでは、みなさん、これからも青海高校の生徒だという自覚をもって行動してください。以上です。」

そう言うのと雛菊はぺこりと礼をすると朝礼台から降りた。

永かった夏休みが終わり、青海にも秋が訪れようとしているのである。まだただけど・・・

その後、教師による永いグダグダ話が続き、退屈な時間が過ぎた・・・大げさに言うともみんな目が死んでた。（教師以外・・・）

青い色一色の空の下グラウンドで全校生徒が集合して、現在朝会中だ・・・

夏休みにはイロイロあったが、それも今では楽しい思い出・・・それは安曇にも武藤にも、もちろん幾斗にも同じであった・・・

「会長、よくあんな人前で堂々とものが言えるねえ・・・たいしたもんだなあ・・・」

幾斗が感心の声を上げる・・・

やっと朝会が終わったところ、教室に向かう廊下での話である。

「ぼくも、感心ですよ・・・さすが生徒会長さんですね」

武藤が冷やかしのかわからないような言葉をかけてく

る。

「そ．．．そんなことないわよ．．．」

多少照れくさそうに雛菊はつぶやいた．．．安曇もニコニコしながら雛菊にちよっかいをだす．．．。

今日から、また楽しい学校生活が後れるんだ．．．

雛菊の胸はうきうきしていた．．．

すると．．．

「あつ！おい、赤城！武藤！ちよつとこつち来なさい！」

教師の中の１人、生徒指導の日向野ひがのが武藤と幾斗を呼び止めた．．

「ああ？」

態度の悪い返事をする、日向野は．．．

「２人はちよつと生徒指導室に来なさい」

「はあ？タリーなあゝ」

そう言いながら２人は生徒指導室に連行された．．．

なにかしたのかなあ？心配そうに２人を眺める雛菊と安曇．．．

「まあ、あの２人なら生徒指導なんて御茶の子さいさいだろうけど．．．」

安曇の言葉に雛菊は納得しながら教室に帰った。

授業が開始された。

「えーと、ここの問題は正弦定理を使ってだな．．．

前の席の安曇はというとスーピーというかわい寝息をたてながら深い眠りについていた・・・やれやれ

「よし、じゃあ山内！この問題はどうやって解くんだ？」

数学教師の柳原やなぎはらが雛菊に質問する、こんな問題雛菊にとっては簡単であつた・・・

「えーと 余弦定理です・・・」

「それはどうして？」

「三角形の辺がすべてわかっていているため、余弦定理のほうが簡単に行えます」

「その通りだ」

まあ、雛菊が頭のいい事を証明しただけです・・・雛菊なら20世紀最大の難問（フェルマーの最終定理）を1日で証明しそうだ・・・（ようするに頭がめっちゃめっちゃいいってこと・・・）

この後も $\sin A$ がなんちゃら $\cos B$ がどうしたこうしたと授業が進んでいった

4時間目の授業が終了して、チャイムが鳴る・・・

安曇と雛菊は屋上に上がろうと廊下を歩いていて、ちょうど生徒指導室にさしかかった瞬間、生徒指導室のドアがガラァーと開いたと思うと、めっちゃめっちゃ怖い顔の幾斗とそれと同時に怖い顔の武藤が出てきた・・・

雛菊と安曇は一瞬退いてしまった、まあ誰でも震え上がってしまったような怖い顔であつた・・・もしこの顔を泣いている子供が見たら、無理してでも泣くのを止めるだろうという顔である・・・とにかく2人はキレていたのである・・・

「で何があつたの？」

屋上で弁当を食べながら、雛菊が幾斗に聞くと不機嫌そうに

「別に！」

ただそれだけである・・・武藤のほうも

「何でもありませんよ・・・」

キレていても敬語なのがこいつらしい・・・

いったい何があつたのだろうか・・・この顔からみて絶対なにかあつたに違いない、いつもなら生徒指導されたってまったく動じない2人である・・・

いったい何があつたのだろうか？雛菊の疑問が頭の中をグルグルまわっている間に、空には暗黒の雲が支配する場所となっていた・・・ようするにてんき悪いってことである・・・

ポツンポツンと雨が降りはじめた・・・これから始まる大波乱の予言のように・・・

フェルマーさん・・・オイラー・・・ド・モルガンさんでもいいや、

こんなことにはならないって定理をだしてくれない？
そう、後々後悔するはめになるのであった・・・

第12話：フェルマーの最終定理より深刻な問題・・・（後書き）

久々に投稿します。

第13話・運命の鳴る頃に（前書き）

お久しぶりですww

第13話：運命の鳴る頃に

「ちょっとまで幾斗・・・これ以上やったら承知せんからな！武藤もだぞ！絶対禁止だ！」

「ふざけんな！このクソ教師！」

「な・・・誰がクソだ！」

生徒指導室での会話が幾斗の脳裏によみがえる・・・
「クソがあ！」

自然とが身体が動き、近くにあったゴミ箱を蹴っ飛ばしていた。

ガコーン！

ゴミ箱がガラんと倒れ、中のゴミが散らばる。まるで幾斗の心の心のように・・・

なんで・・・なんで俺が・・・

不安と悔しさで思いがいつぱいになる・・・

「畜生・・・」

考え込む幾斗の背中を武藤がポンポンとたたくと

「気にする事ないですよ、あんなのシカトすればいいじゃないですか？」

「そうだな。」

キンコーンカーンコーン

5 時間目の授業がはじまるチャイムが聞こえる。

2 人の不良は雨の中、校門を出た。

後姿が雨にぼやけて消えていった。

午後、雨が降り始めた・・・

5 時間目が始まったころには大雨となり、教室からみる窓から水がバケツをひっくり返したような勢いで滴れている。今、後ろの席に幾斗はいない・・・・。もちろん武藤もいなかった。

静かな教室に教師の声と雨音が響き渡った・・・・

安曇はなんだか寂しそうな顔をして授業を流していた・・・・

雛菊はため息ついた・・・なんだか面倒なことになったのかもつしれないと思ったのだろう・・・。

学校も終わり、すでに雨も小降りになっていた。幾斗と武藤の靴箱には靴が無かった・・・

「帰ったんだ・・・」

「そうだね・・・」

2人でそういうと、別れを言って帰っていった・・・

バシャバシャと水溜りを踏んづけた時に水が飛び散る音がする。靴がドロドロになりながら雛菊も安曇も家に走って帰った。

誰もいない家に帰ってきた雛菊は部屋に上がってすぐにベットに倒れこんでしまった。

雛菊の母親は、有名なヴァイオリニストで父親は大会社の社長。父の会社は大型電気チェーンで日本でも有名な店である。最近では、海外にも進出した。2人は仕事でほとんど家にはいないのでいつも雛菊は家で1人である。

友達も、彼氏も、家族もない。孤独の中で生きてきた少女。それが、彼女だった・・・

今は違う！ちゃんと友達がいて、相談相手がいって・・・そして・・・好きな人がいる。

彼女にはそれが幸せでしかたなかった・・・だから、幾斗や安曇や武藤はかけがえの無い存在だったのだ・・・

学校に行きたくなくなった。

はじめてそんな気持ちを抱いた雛菊だった……

学校に行く前に毎日ちゃんと幾斗を起こしに行く。それが毎日の習慣になっていた。

いつも、ひどい寝癖で出てくる幾斗がおもしろかったし、幾斗の妹さんも可愛かった。毎日の楽しみである。

「かいちゅーお。オッハ」

寝ぼけて言う幾斗……というかそのネタ古くないですか？

いったん顔を見せた後、すぐ部屋に引込み、2分後には学校での幾斗が出来上がっている。いったいどんな作業を……見てみたい気もする……。

「よお！行こうか。」

「う……うん」

マンションを出て、幾斗と並んで歩く……

最近、幾斗は自転車通学から徒歩通学に変わった。実際、徒歩通学だったのだが許可を取らずに勝手に自転車通学になったのだった……

・それがもとに戻ったただけだった・・・

「赤城くん。会長さん」

ニコニコしながら元気に走ってくる安曇とそれに続く武藤。

「会長、おはようございます。」

敬語で挨拶する武藤にあいさつして4人で登校する。

風が髪をなびかせる。暑かった夏にそろそろ終わりが来るのだろう・・・セミも鳴かなくなった。

校舎の中は生徒達のしゃべり声や叫び声、歌声が響き渡り実に青春っぽい・・・

幾斗や武藤はツカツカと校舎をのし歩き、その後を雛菊と安曇はついて行く。教室までさほど遠くない。階段を上がったらすぐだ・・・

教室に4人が入ると、いままでしゃべっていた人たちがいきなり静まり返った・・・

いつものことであつた・・・

なぜなら、幾斗と武藤は超不良、安曇はそのパシリにして彼女、雛菊は生徒会長である・・・当然と言つては当然であつた・・・

しかし、なぜかいつも以上にだんまりとした空気がする。なぜだろう？

4人が席に座って話し始めるといつしかその空気も元のガヤガヤした空気に戻っていった・・・

HRが終わり、授業開始までの休憩中に教室に慌てて入ってきた教師がいた。年齢は34歳で髪はロング・・・少し美形？のその教師は教室になにやら入ってくるなり、

「ちょ・・・ちよつと・・・武藤と幾斗は生徒指導室に来なさい」
「はあ？日向野！また昨日のクダンねー話じゃねえだろうなあ？
？」

「昨日のことだ！注意したのにまるでわかってないじゃないか！
来い！」

そう言つて2人は生徒指導の日向野にまた、連行された・・・

昼休憩、2人は屋上に顔を見せることも無く、午後の授業にも出ていない・・・

武藤と幾斗は不良なので、生徒指導室はあたりまえなのかもしれなかったが、雛菊にとってはそれは嫌だった。なんせ学校で会える時間が短縮するのだ・・・

結局、その日幾斗と武藤には会えなかった・・・

日が暮れて、雛菊が家に帰り着いた。手を洗い終わると、自分の部屋に行き一休みする。その後雛菊は机にかじりついて勉強をする・・・

今日の数学・・・今日の英語・・・予習に復習、頭のいい雛菊はそれなりに努力をしているのだ。

その時、携帯電話の着信音が鳴った・・・ベートーベンの運命の音が鳴る・・・

「はい・・・もしもし雛菊ですけど・・・」
「あ・・・俺、幾斗だけど・・・」

幾斗だった。雛菊は少し胸を躍らせた・・・用事はなんだろう？

少し期待がこもり、自然と携帯電話を強く握ってしまう・・・すると幾斗は少し間をあけて

「明日から、起こしにこなくていいから・・・」
「や」

プツ 電話が切れた・・・切れたのただただボー然と立ちすくむ
しかない雛菊だった・・・

世界が止まったように感じられた一瞬だった・・・

第13話：運命の鳴る頃に（後書き）

まだまだ下手な小説ですが、読んでくれれば光栄です。出来れば、コメントください・・・まっけます。

第14話：トイレの花子さんならぬトイレの会長！

え？

まったく意味がわからない。突然の電話で突然の言葉で……あまりにも突然すぎる出来事に雛菊は混乱していた……

Why? なぜ? ど……どうして急にそんなこと言われたのだろうか……
……まったく検討がつかない。

幾斗くん、ついに私のことが嫌いになっちゃたんじゃ……それ以前に好かれてもいなかったとしたら？

脳内で”嫌い”という言葉がグルグル回っている……

自然と涙がこぼれてきた……枕が涙でぐしょぐしょになった。きつとなめたらしょっぱいのだろう……毛布にもぐりこむ、不安や恐怖とは違うなにかとても寂しいものが心の中でうごめいている感じだった……

幾斗に電話しようと思った。そしてなぜかを聞きたかった。しかし、携帯電話を握ると指が動かなくなる……手が振るえてまるで金縛りにあっているようだ……いや、実際にあっているのかもしれない。

その後、何度も電話をかけようと試みたが失敗に終わった。

次の日、悲しみと寂しさとショックで朝まで一睡もしないまま雛菊は学校に出かけた。

トボトボと通学路を歩きながら、登校する雛菊に安曇が声をかけた。

「会長さ〜ん。おはよ〜！」

「うん．．．おはよう．．．」

安曇のあいさつに雛菊は海底の深海魚のうなり声のような返事を返す．．．

「ど．．．どしたの？」

雛菊のあまりの暗さに驚いたのか、スットンキョンな声を上げる．．．

「．．．糸河さん．．．ちよつとね．．．」

どう答えていい河から無いのでとりあえずそう答えておく．．．

雛菊のあまりの暗さに安曇も黙ってられずに

「な．．．なんなの？教えてよ〜私、友達でしょ？会長さんそう言ったよね？だったら相談のからさあ．．．」

そんな安曇の優しい言葉に雛菊は涙ぐみながら．．．

「い．．．い．．．糸河さあ〜ん うわあ〜ん」

「うっうわあああ」

泣きついて来た雛菊に驚きの声をあげる安曇．．．

「え？赤城君がそんなこと言ったの？いつもあんなに仲良かった

のに……」

学校についてから安曇はHRが始まるまでの間、雛菊の相談にのっていた。

「なんでだろう？私、なにか嫌われるようなことしたかなあ？」

「なにか心当たりは？」

顔を下にして心当たりがないかを頭の中で検索するが、雛菊はすぐに顔をあげて

「わかんない。」

「……」

さすがの安曇もまいっているようだ。なんせ、手がかりがまったくと言ってよいほど無いのだ。そして最後の手段に出ることにした。

「じゃあ私が赤城くんに聞いてこようか？」

安曇の提案を雛菊はじめは嫌がっていたものの、少したってから考え直して、その仕事をお願いすることにした。

今日、雛菊が起こしに行ったわけでもないのに幾斗は武藤とともに学校に来ていた……。教室にはいなかったけど……。昼休憩、安曇は幾斗に聞きに行くのだ！

キンコーン……。午前の授業終了チャイムが鳴り、つ

いに昼休憩が来てしまった……

「じゃあ、きいてくるねえ」

昼休憩、そう言い残して安曇は教室を出て、足取り軽く、テテテテと廊下をかけて行った……

久しぶりに一人で弁当を食べていた、だれも食べる人がいないの

だからしょうがない・・・だまって弁当を食べながら安曇の帰りを待っていた。

きつと、なにかの誤解があつたんだ・・・

そう心に言い聞かせて、自作の卵焼きを口に放り込む・・・口のなかで最初は力強く噛んでいたものの、だんだん力が入らなくなってきた。

ゴクン

なんとか飲み下すと、次のオカズに箸を伸ばそうとした・・・その時

「あ・・・あの・・・会長さん・・・その・・・」

安曇の声がした、雛菊は一瞬ビクリとしたが安曇だと気づき、どうだったか尋ねる・・・

「えつつと・・・その」

「答えてくれたの？」

雛菊の間に安曇はコクリとうなずき、ゆつくりと口を開いた・・・

「迷惑だからだって・・・」

「えっ？」

「だから、迷惑だからだって言ってたよ・・・」

安曇の言葉で、雛菊は上空4000mを飛ぶ飛行機から突き落とされた気分になった・・・そしてやっと口を開いた・・・

「そうなん・・・だ・・・幾斗くんにごめenneって伝えといて、もう二度と迷惑かけないからって・・・」

それが雛菊の精一杯の言葉だった・・・

私の存在は、赤城くんにとって邪魔だったんだ・・・そんなこ

とも気付かなかつたなんて……私、最低！

自然と、教室を飛び出していた……

「かいちゃん　かい　ちゃん　かい　ちゃん

安曇の声がはるか後ろから聞こえてきた気がした……でも、雛菊は気付かなかった……

トイレに駆け込み個室に閉じこもった……鍵を閉めた瞬間、涙がどつとこぼれ出た……

ごめん……ごめんね、幾斗くん……私、二度と幾斗くんに迷惑かけないから……私、二度と幾斗くんに近寄らないから……

う……グス……ぐすつ　う、グス、ヒック　ぐすつ　ひっくつ

誰も居ない女子トイレで生徒会長の鳴き声がこだましていた……

第14話：トイレの花子さんならぬトイレの会長！（後書き）

久しぶりの投稿です。いつも見てくださるかた、感謝しています。
なにぶん経験が少ないもので、コメント、感想を出来ればいただきたいです。お願いします。

第15話：Black day 消せないロウソク（前書き）

少し、変態になってきたような・・・すみません。

第15話：Black day 消せない口ウソク

今日、9月6日は山内雛菊の誕生日である・・・世間一般の高校生の誕生日というと友達や彼氏、親などからプレゼントをもらい、祝ってくれるというのが普通だろう・・・

そんな中、普通の誕生日をおくれない女子高生がいた。誰かはわかると思いますが・・・そう、山内雛菊である・・・

キンコンカン・・・

朝、雛菊は学校に来るのが苦痛でしやうがなかった・・・昨日、幾斗が言ったことがあまりにもショックでしやうがなかったからだ・・・

登校中、足が重くて何度も立ち止まった・・・学校に行ったらまた迷惑かけるんじゃないだろうか・・・そう思ったからであつた。しかし、行かないわけにもいかず、結局学校に到着した・・・

学校では、幾斗は言うまでも無く、武藤と安曇が今日はやけに冷たかつた・・・なにか話そうと声をかけると生返事が返ってくる・・・

とうとう友達も無くしかけているんじゃないだろうか？

雛菊の心の傷は深くなるばかりだった・・・

そして、授業が始まった……

先生の話なんか耳に入らないまま午前の授業が終了してしまった・
……今日も静かに1人で弁当を食べるはめになった……。

私は、友達ができたからってすこし調子に乗りすぎていたんじゃないだろうか……。だから、みんな……

雛菊は心の中で深く反省していた……。別に彼女が悪いわけでもなんでもないのに……。

3人は今頃なにをしているのだろうか……。屋上で楽しそうに弁当を食べているのだろう……

涙をこらえながら、雛菊は弁当を口に押し込んだ……

1日の授業が終わるのがすごく永く感じられた……時計壊れてるのかも（違います）

しかし、時というのはちゃんとたつもので、永く感じられても時は流れているのだ……

授業が終了し、生徒は各自、部活に行くなり帰るなりしている。雛菊にはまだやるべき事があった……もうすぐはじまる文化祭の資料をまとめなくてはいけないのだ。

誰もいない生徒会室に入り、会長専用の机に座ると1人黙々と仕事を始めた。

すると、突然携帯電話の着信音がなった…

「はい、山内ですけど？」

電話に出るとそれは実の母からであった…

「雛菊？私よく元気にしてる？」

「あ・お母さん。うんしてるけど？」

母の問いに雛菊は何もなかったような口調で返事をする…

今日、雛菊の母と父は家に帰ってくる予定なのだ、そりゃあ実の娘が16歳の誕生日をむかえると言うのに、ほっとくわけにもいかない。今日、両親が家に帰ってくるのだ。雛菊は心の奥では心底楽しみにしていた…

すると、母は

「あのね、雛菊…今日、私もお父さんも家に帰れなくなっちゃたのよ…ごめんね」

「え？そ・そんなあ…」

「本当にごめんね…いまの仕事が一段落したらすぐ帰るから…」

雛菊は内心、本当にガツクリきていた。久しぶりに両親に会えると思ったら帰ってこれないと言われたのだ。

誰だってガツクリするのが普通。そしてダダをこねるのが普通かもしれない…

しかし雛菊はまったく声を変えず

「いや、いいの。予想はしてたから。じゃあお仕事頑張ってるね。じゃあ」

プツリと電話を切ると雛菊は机にうつぶせになってしまった…

こうも不幸が続くと誰しもそうなるだろう…まして、雛菊は今日誕

生日なのだ…

5分ほどうつぶせになっていたがまた顔を上げてまた黙々と仕事を再開した…

そこへ

「お誕生日おめでとう。ぼくの雛菊」
そんなキモイことを言いながら誰かが突然生徒会室に入ってきた…

「だ…だれ？」

雛菊の問に入ってきた男は

「ぼくだよ」

そう言つて、顔をみせる

そこには、雛菊が予想もしていなかった人物がいた…

え？せ…せんせい？

「先生・・・？どうしてんですか？ていうか、ぼくの雛菊って・・・あの・・・なんの冗談でしょうか？」

そう、そこに立っていたのはまさしく生徒指導の先生。日向野だった・・・

「じょうだんなんかじゃないよ。君はぼくのものじゃないか」

何気ない口調でとんでもない事を言い出す。さすがの雛菊も

「え・・・その。先生！そういう冗談、本当にやめてください。」と拒絶の態度をとった。しかし、日向野は雛菊の話をまったく聞いていない様子だった。ニヤニヤしながら雛菊を眺めている。それはとてもいやらしい目つきだった。

雛菊は危険を感じ、外に出ようとするがドアの前に日向野が立っているため出れない・・・逃げ道が無いか周りを見るがそんなものどこにもない。 ヤバイ・・・

そうしている間に、日向野はジリジリと雛菊に近寄ってきていた・・・何がどうなっているのかまったくわからない・・・なぜ私はこの先生にねらわれているの？雛菊は日向野に精一杯の拒絶の言葉を言った

「先生、やめてください。本当に・・・」

言っている途中、日向野がいきなり前進してきて雛菊の腕をガシッと捕らえた。

「イタっ！や・・・やめて!!」

「そんなこと言っちゃって・・・本当は嬉しいくせに」

そんな妄想じみたことを言いながら自分の腕を雛菊の背中にまわしていく・・・そして雛菊の身体を自分に引き寄せようとする・・・

「い・・・いや！やっ！やめて!」

雛菊は抵抗しようとするがまだ16歳の少女が男のしかも大人に力で勝てるわけ無く、無理やり抱かれてしまった。

目には涙が浮かんだ。もちろん嬉しさではない。恐怖ゆえだった。
・・肩に日向野の臭い息がかかる・・これからどんなことをされるのか・・想像するだけで気分が悪くなった。

この人、狂ってる。

雛菊はそれだけはわかった・・・。気持ち悪い。そう思った。そんな雛菊などおかまいなく日向野は

「雛菊、いい臭いだねえ」

と変態的なことを言った。

「っこの！変態！はなしてよ！」

雛菊は必死に叫ぶが日向野は聞き入れない。むしろ雛菊が叫ぶ姿をみるのが嬉しいようだった。そして、

「ねえ、そろそろ自分に素直になれよ。ぼくのが好きでたまらないくせに。」

そして、顔を強引に近づけてきた。

「いつ嫌あ！いやあ！」

泣きながら叫ぶ雛菊に日向野の唇が重なるうとした瞬間・・・

雛菊をつかんでいた腕はずれ、さっきまで目の前にあった日向野の顔も目の前から消えた・・・

力が抜けたように雛菊は床にヘナヘナと座り込んだ・・・

日向野は頭を生徒会室にあった机で強打していて うつつと うなっていた・・・。

「そーゆことか！おかしいと思っただぜ！」

そう言葉を発した人を見て雛菊は絶句した・・・

あ・・・あかぎくん？

「会長、だいじょうぶかよ！」

まさしくそれは幾斗だった、雛菊が日向野とキスする1秒前に幾斗は日向野の頭に強烈な跳び蹴りをくらわしたのだった。

「ど・・・どうして？助けてくれたの・・・？」

助けてくれた幾斗に雛菊は涙をポロポロと流しながら質問する。そんな雛菊をみて幾斗は手で雛菊の涙をぬぐってやり、

「俺の大事な人だからな。会長は！」

そう、照れくさそうに言った。

その言葉を聞いて、雛菊は幾斗に抱きついた。幾斗も抱き返してくれた。

あったかくていい臭い・・・

幾斗の胸に顔をうずくめて雛菊はうれし泣きをしていた。幾斗も雛菊の自分より小さな身体を優しく抱いていた・・・そして

「かいちよー。誕生日おめでとう」

幾斗がささやいた言葉に雛菊は胸が熱くなるのを感じた・・・

第15話：Black day 消せない口ウソク（後書き）

なんとか書き終わりました。正直、書くのがはずかしかったです・・・orz

コメント、感想くれたら嬉しいです。

まだまだ疑問がじゅまんしていると思いますが・・・それはまた次回ノシ

第16話：のぼーんでアッハーな秋（前書き）

今回は真相の大公開です。

第16話：のぼーんでアッハーな秋

「会長さん、大丈夫？」

「会長、無事ですか？」

そう言いながら2人の男女が入ってきた。まさしくそれは武藤勇気と糸河安曇だった……

2人とも頭に三角のパーティー帽子をかぶっていた……
「う・うん」

幾斗に抱かれたまま雛菊は答えた……

「2人ともどうしたのその頭の……えっと……帽子……？」

当然の疑問に武藤、安曇、幾斗はニヤニヤしながら

「いやあ、本当は会長が生徒会室で1人になった時にクラッカーを鳴らしながら誕生日会を決行してビックリさせる予定だったんだけどよ……」

幾斗が残念そうに呟く……

「日向野先生が生徒会室にいて、会長さんとあんなことやってるんだもん」

安曇も続いて言った。

「困っちゃいましたよ。正直、かなり驚きました。」

武藤が感想を述べ……

雛菊は少し前に事を思い浮かべる……かなり恥ずかしくなる……

私、あんなとこみられてたんだ……

「まあ、でも会長が無事ならいいつか！」
幾斗がそう言つと3人はニツコリ笑いながら

「かいちよー誕生日おめでとぉ！」
クラッカーが鳴る、今年は最高の誕生日になりそう。雛菊はそう思った……

「うううううう うん？つておい！コラア！」
突然、日向野が復活した……立ち上がると雛菊に近寄ってくる……
・またかぁ！

パーーン パーーン スーパーン

まあ、当然のオチで日向野が床に倒れた……顔面に幾斗が最初に、
武藤が2回目に、最後に安曇が強烈なビンタをくらわした……

正直、可愛そうだ…… まあ自業自得だけど……

ウーウン

パトカーのサイレンの音が外です。

そう、パトカーはここに近づいてきているのだ……

「会長さん、わたしが呼んどいたよう、ポリスさん」

安曇がニコニコしながら答えた。

その後どうなったかというと

青海高校の体育教師、および生徒指導担当の日向野正行氏はひがのまさゆき婦女暴行、変態罪で警察に逮捕された。その後の調べで麻薬を乱用し、極度な幻覚、妄想症状に襲われていた事がわかった。

雛菊も、被害者として警察にイロイロ聞かれたが、何事もなく終わった。あったことと言えば、そのニュースを聞いた雛菊の両親は遠い遠い外国からすっ飛んで帰ってきた。まあ、少し遅れた誕生日会もしたらしい。

幾斗の迷惑発言の件の真相は実にアホらしいものであった……日向野によって、幾斗、武藤は雛菊に近づくなと指導を受けたらしい。日向野は

「お前らが雛菊に近寄るから、雛菊は勉強にも集中できないと言っていたぞ！もうちかよるな！」

こんな感じの指導をしていた。まあ、わかると思うが、日向野が幾斗たちを雛菊に近寄らせないための嘘だ……

雛菊に近寄らなくなった幾斗に理由を聞きに行った安曇……
幾斗は

「俺が雛菊に迷惑かけてるから……」の意味で「迷惑だからだよ！」

と言ったが、安曇は聞き間違えて、というか意味を確認せず雛菊に伝えたのだ……

やれやれ

日向野の事件が終わったあと、誤解はとけて一件落着いた……。

まだ、カップル成立とまでは行っていないもの、前よりは比べ物にならないほど幾斗と雛菊の距離は縮まった……

今日もまた屋上で弁当を食べている。こんなに学校が楽しいなんて……

雛菊は、深く幾斗、安曇、武藤に感謝していた。

この人たちがいなかったら私、どうなっていたんだろう……
そんなことを思いながら、今日も1日が終わる。

ココが私の居場所！今は胸をはって言える。それは雛菊だけではなかった。

今、生徒会の会議の時間だ、生徒会室で各委員会の委員長が集い、会議している。

そんな、生徒会室のドアの前に2人の不良がヤンキー座りしていた。武藤と幾斗だ！

あの事件以来、生徒会室に雛菊が居る時は2人がドアの前で番を張る事になった。

その恐ろしいほどの守護の力に、青海高校内では「生徒会守護隊」または「生徒会親衛隊」とよばれるようになった。

後に雛菊たちが卒業した後、正式に委員会として発足するほどだった・・・

どんな高校だよ！

学校の帰り道、幾斗と雛菊は商店街を歩いていた。あまり人がいなくなってしまうた商店街をコシパンと優等生が並んで歩いていた。

「ねえ、赤城くん……」

雛菊が幾斗に話しかけると

「会長、もうつるみ始めて結構立つぜ、幾斗でよくね？」

幾斗の言葉に雛菊は少し頬を赤らめながら

「えっ……あ……うん……じゃあ幾斗くん」

少し照れくさかった、下の名前で呼ぶだけでこんなに照れくさいとは……

「んだよ？」

幾斗になにげない返事に雛菊は

「じゃあ私のことも雛菊って呼んで……」

ドキドキの瞬間……

「いいぜ！」

雛菊は立ち止まってしまった、その言葉が嬉しすぎて……何気ない日常がこんなに楽しいなんて……

「はやく〜行くぞ雛菊〜」
「あっ〜ごめん〜」

幾斗の背中を追うように雛菊はかけていった……。

次回、新メンバー登場……

第16話：のほーんでアッハーな秋（後書き）

いやあ、これからが大変です・・・コメント、感想くれたら嬉しいです。どうぞよろしくお願いします。

第17話：番外編1、オタクとギャルのラブストーリー（前書き）

今回は少し、番外編です。新メンバー登場

第17話：番外編1、オタクとギャルのラブストーリー

秋、そろそろ夏の猛暑も終わり、食欲だとか、読書だとか、スポーツだのの秋がやって来る……

ここ、青海高校も本格的に秋に染まってきていた。そんな、普通の高校の1年B組6班のことである。

1人は優等生、2人は超不良、1人は不良の舎弟にして彼女……そして、もう1人居るはずなのだが高校が始まって夏休みも終わったというのに未だに顔をみせないやつがいる。ようするに引きこもりである。

その引きこもりの少年は、さすがに夏休みが終わったのに学校に1度も行かないというのはマズイと思い、今日、高校生活初めて、学校に登校したのだ……

その少年、さやまゆういち佐山友一は学校に来て思った。

来なければよかった……

学校に登校し、教室に入ったら「お前だれ？」って目で見られる。そりゃあ登校したこともないのに誰かが知っていたらおかしい……

自分の机に着席すると、隣はスゴイ美人……後ろは……髪を青に染めた不良……前は普通？の女の子でその横は金髪、ピア

スの不良だ……

「おい、お前誰？」

幾斗が突然、友一に話しかけた。

「ひっ！ あの……その……佐山友一と言います……あの……その」

「ふーん、みかけねえ顔だなあ？」

幾斗がジロジロと友一を見回した。友一は怖くなって、

「ア……あの……すみません。その……」

「はあ？」

普通に言っただつもりなのだろうが怖い……幾斗は不思議そうな顔で友一を見た。睨んだとも言っ……

「幾斗くん。そんな怖い顔で言わなくても……」

雛菊が幾斗に言った。

「俺、そんなに怖い顔してっか？」

「うん」

雛菊と幾斗は普通にしゃべっていた。

友一は思った、なんでこの人、こんな不良と話せるんだろう……？

授業が始まり、先生が話し始める。武藤も幾斗も安曇も寝息をたてながら寝ている。

この班でまともに授業を受けているのは雛菊と友一だけだ……

授業中友一は思った、どうせ学校に来てもぼくは1人だ、友達もいない。なんのために学校に来ているんだろう……。やっぱ俺には引きこもりがお似合いだな。明日はまた部屋から出るのをやめよう。明日はどのゲームをして遊ぼうか？

別にゲームが好きなわけではない。友達がいらないから学校に行っても楽しくない。だから、学校なんて行きたくないのだ。

なんだかんだで昼休憩、さつさと弁当食べてしまおう。そう思った。一緒に食べる相手なんかいない……。そう思って弁当箱を開けた瞬間。

「おい、ユーチつつたか？お前も一緒に飯くわねえ？」

幾斗が急に声をかけてきた……

「え？あつのお……そ……」

「ああ？どうなんだよ！はつきりしろよ！」

幾斗が怖い顔をし始め、友一は断ろうと思ったが、安曇が隣で「ユーチ君も行こう行こう」とはやし立てたので結局ついてしまった……

幾斗たちについて屋上行くと、屋上にはあの金髪、ピアスの不良と隣の席の美人の女の子がまっていた。

「わりいゝおくれた。」

「新入り連れてきたよ」

幾斗と安曇が軽くあいさつすると友一を紹介した。

「ユーチつつらしい」

幾斗が言った……

ぼくの名前は友一だけだなあ……。こわいなあ

友一は弁当を食べながらそんなことを思っていた。

それから、毎日、学校に来た日はこの4人組と弁当を食べる事になった・・・

この4人が、悪い人たちではない事はわかったが・・・そんなに好きにはなれない。こんなうつつらだけの集団なんか・・・こんな暴走族みたいな集団なんか・・・好きになれるはずない。

そんなことを思いながら毎日が過ぎていった・・・学校に友一が行かなくなると、行かなかった日にならず友一の家には4人が尋ねてくるようになり、学校にいくしなくなってしまうのだ・・・

・

はあーめんどくさい！

それからしばらくしてのことであつた。いつしか雛菊を殴った青海高校の不良集団が廊下をのし歩いていた。最近、また調子に乗り出した彼らは学校の西側トイレを本拠にして学校を荒らしまわって

いた。

今日も、廊下に落書きをしている真っ最中である。

そこに、1人のギャルが歩いていた。化粧にパーマ、マニキュアといった具合に顔黒以外ちゃんとやつてるギャルであった。彼女はこの学校でも有名なギャルで、なぜ有名かは簡単。

1匹狼だからである。つまり、友達がいないうこと……。

友達がいないギャル、初めて聞いたという人もいるのでは？

なぜか、この話には孤独を生きる人たちが多いのはなぜ？（作者談）

そんな、ギャルの少女が廊下を歩いていた。当然、不良集団は彼女を絡んだ。

「おい！ねえーちゃん。ココを通りたきゃ金だしな！」

「そうだ！金だせこらあ！」

威しをくらい、ギャルの少女もさすがにビビッていた。しかし、彼女には彼女なりのプライドがあるようで

「嫌です！」

とすっぱりこと断った……

「はあ？調子乗ってんのか！」

不良が叫ぶが、恐怖を顔に出すことなく、

「お前らがな！」

つまらん意地張って、怪我するのはたいてい弱いもの……どうして、こんなやつらがいるんだろ……

「今なら、まだ許してやるぜ？」

不良の最終警告を彼女は完璧に無視した

「お前に許されなくてもいい！」

そう言い放ったと思ったら、当然のごとく殴られた。

彼女は床に倒れた、不良達はマジでキレていた。彼女は半殺しにあつのは間違えなかった。そう、間違えなかったのだ・・・そしてその綺麗な顔が傷物にされてしまうのだろう。誰もがそう思った。

「や・・・やめろよ」

そこに、虫の鳴くような声がした。つまり小さな声が・・・

「ああ？」

不良達がいつせいに振り向いた。

「や・・・やめろって言ってたんだろ。」

そう言い放つのは、引きこもりだった友一だった。

不良達はいつせいに笑って、友一を見た、そして・・・

ここ、保健室で、傷まみれになった友一をギャル少女、やまなか山中美貴が手当みきでしていた。

「あんたさあーなんであたし助けたわけ？」

美貴が友一に質問した・・・友一は当然のように言った。

「君が・・・いじめられてたから・・・」

本心は違う、美貴が友一の好きな恋愛ゲームの主人公の似てて可愛かったからであつた・・・（単純）

「そうなん・・・あんがと、でもむちゃすんなよ。」

ギヤルはひきこもりに向かつて微笑んだ・・・

「まさか、あんたみたいなのが助けてくれるとは思わなかったかな！感謝してるぜ」

美貴はそう言つて、保健室を出て行つた。

残された友一は胸がキュンと来るのを感じた・・・

これって、鯉？（変換間違いじゃないですよ
ww）

第17話：番外編1、オタクとギャルのラブストーリー（後書き）

感想、コメントくれたら嬉しいです。よろしくお願いします。

第18話・番外編2、オタクとギャルのラブストーリー（前書き）

ふ
ふ
ふ

第18話：番外編2、オタクとギャルのラブストーリー

屋上での昼ご飯。僕、佐山友一は不良少年2人と弁当を食べていた。

今日はなぜか女子2人はいない…。たぶん生徒会の仕事か何かでいそがしいのだろう。少し前の僕ならこの2人をものすごくこわがっていた…。でも最近気を許してる気がする。

引きこもりだった僕を、初対面のぼくを急に誘ってくれたような人たちだ…。悪い人じゃないんだろうなあ…。

そこで、思い切って聞いてみた。

「あの、赤城さん。」

そう呼びかけると、幾斗は友一に顔を向け、動かしていた箸をとめた。

「赤城さんはどうやって会長さんと恋人どうしになったんですか？」

その質問で幾斗は口の中でモグモグと食べていたおかずを吹き出してしまった。そして、少し赤い顔をしながら。

「はあああ？」

と返答した。友一はとまどいながらもう一度質問する。

「俺は！と…とくに雛菊との関係ねえぜ？」

「えっ？そうなんですか？ぼくはてつきり付き合ってるのかと…

…」

「んなわけねえーだろがつあああ！あんな美人で優秀で完璧天才少女と、俺みてえーなダサイ、貧乏不良が付き合えるわけねえだろうがつああああ？」

怒ってるのか照れてるのかわからないような幾斗の顔をみながら。

「す…すみませえ〜ん」

と謝る友一。

そんな2人の会話に武藤が首を突っ込んだ。

「まあまあ、ユーチくん。恋の相談なら僕がのりますよ」

ニコやかスマイルで友一に武藤が話し掛けた。

「じゃ…じゃあお願いします。」

恋では、友一や幾斗より1歩大人な武藤が友一の恋について聞いた。友一は、助けたギャルの事、そのギャルに惚れてしまったことなどを実に正直に打ち明けた…

「おめえーよく頑張ったな。」

幾斗が感心の声をあげる。そりゃあ、たくさんの不良相手に元引きこもりがケンカを売ったのだ…武藤も幾斗もおどろいた。そんな根性座ってるのは、筋金入り不良と、その舎弟と、誇り高い生徒会長様と、友一ぐらいだろう…

みなさんならやりますか？おっかない不良十数人にケンカを売るなんてこと…（注：作者ならやりますが、みなさんは危ないのでやめた方がいいかと…）

「ぼくも感心です。あなたは優しいですね。」

「そこまでできるんだったら、告白なんて余裕だな」

幾斗が友一にそう言うと、友一は顔を真っ赤にして

「直接は…ちよつと…無理です…」

不良2人は大きなため息をつくと、

「じゃあ、手紙でどうですか？手紙なら面とむかって言わなくていいじゃないですか？」

武藤の提案で、友一はラブレターを書くことになったのであった…

「あ…あの内容はどんなのがいいですかねえ？」

そんな友一の素朴な質問に…幾斗は

「うーん。こんなのでどうだ？好きです。付き合ってください。」

と答えた

それ、シンプルすぎ…

「じゃあこんなのでどうですか？」

次に、武藤が口を開いた。

「I want you. I need you. I love you. by You-ti.」

武藤の提案に友一も幾斗も啞然としてしまった…

キモすぎだろ？それ… てか、外国人かあ？

「じゃ…こ…こんなのどうだ…

そうして2人の不良に手伝ってもらって…結局は自分でラブレターの内容を決めた。(つまり、不良2人はあんまり役に立ってないという事…)

出来上がったラブレターをもう一度読み直す。

よし、完璧だ！そして友一のラブレター大作戦(大乱闘とも言
う…)がはじまったのだ…

時は放課後、安曇の情報だと彼女、山中美貴は放課後必ず音楽室でピアノを弾いて帰るそうだ…

つまり、音楽室に居るって事…

友一は、胸を高鳴らせながら音楽室にむかった…

音楽室に近づくたびに、バッハの曲らしきピアノの曲が流れてくる…

音楽室までもうすぐ！そう思い、足取りが速くなった。

そして、音楽室まで残り10mを切ったところぐらいでピアノの曲が急に止まった…ゴトンという鈍い音がする…友一は焦った…なにがどうなっているのか？なにかあったんじゃないだろうか？

いそいで、音楽室の中へ飛び込むと中で美貴が前回、美貴を絡んでいた不良たちに暴行を加えられていた。仕返しなのだろう…不良達はなにげない顔で、美貴を攻撃していた。徹底的なのがこいつらだ！

不良たちは最初は気付かなかったものの、数秒ほどボー然と立ち尽くしている友一を見て、

「おいおい、カモがねぎしょってやってきたぜ」
と友一のほうを振り向いた。が、友一はまったくビビってはいなかった…むしろ、怒ってる。

最愛の人が目の前で倒れているのだ、そんな酷いことするやつを許しておくようなやつじゃなかった…

キレた友一は不良たちにきつい睨みを利かせたために不良たちも友一に攻撃態勢を取りはじめた。

しかし、不良達が攻撃するのよりワテンボ早く、友一は1人の不良を殴り倒していた。

「彼女に手をだすなあ！！！」

続いて、2人目に飛び蹴りを食らわせた。引きこもりとは思えない動きである…

しかし、3人目にいこうと身構えた瞬間に顔面に強烈なパンチを食らった。

不良たちのリーダーは、友一が先ほどのパンチでよろめいている隙に回し蹴りを友一に与えた…

派手な音をたてながら、友一は床に倒れた。

不良達は友一をぐるりと囲むと、

「かつこつけてんじゃねえーよ！オタク野郎！」

ゲラゲラ笑いながら、不良達は友一に蹴りを食らわしまくった。

ドカ グキ ドス バッス

音楽室中に鈍い音が響き渡る……

友一は痛みでなにも感じなくなっていた…

もう、終わりか… そう諦めようとした瞬間、美貴が不良達に

「いい加減にしろや！あんたらの相手はアタシだろ？かかってこいよ！」

と言い放った、不良達は

「そうだったなあ」

と、言いながら友一から離れ美貴に近寄っていった…美貴は後ずさりしながら不良達が近づいてくるのを眺めていた。

「やめろお！」

友一は血だらけの身体で、美貴の前に立ちふさがった・・・

「おいおい、クイーンを護る、ナイト様だぜ？」

そういいながら。不良達は友一に近寄っていった・・・。

「バーカ」

そう言うと、不良はこぶしを振り上げた。友一は恐れもないかのように瞬きすらしない、ただ不良を睨みつけ、美貴の前に立ちふさがっているだけだった。

ゴーン

派手に鈍い音がした。友一も、不良達も、美貴も一瞬思考が停止してしまった・・・

な・・・なんだ？友一が自分を見る、

殴られてない・・・

次に不良をみると、壁に頭を打って苦しそうにもがいていた。

そして、その横で金色の髪を揺らしている男がいた・・・

武藤さん・・・

遅れて、もう1人登場した・・・

赤城さん．．．

「よお！大丈夫か？」

幾斗が友一に問うがすぐ訂正して

「大丈夫じゃなさそうだな．．．」

と言った．．．

幾斗と武藤は数人の不良を2分で始末すると、美貴と友一を保健室に連れて行った。

保健室まで来ると、武藤と幾斗は帰ってしまった．．．

しばらく沈黙が続く、保健室には先生がいないようなので、美貴の手当てを友一がしてあげた．．．

美貴は、自分より傷が多い友一を眺めながら．．．

「な．．．なんで。なんで助けてくれたんだ？首、つつこまなかつたら、こんなことにならなかったのに」

自分のせいで怪我をした友一をみながら美貴は心配そうに言った。

友一は思った．．．チャンスだと、手紙を渡す．．．チャンスだと．．．

無雑作にポケットに手を突っ込むと、手紙を持った．．．しかし、持ち上げようとした手紙を友一は持ち上げなかった．．．

「山中美貴さん。ぼくは、あなたに始めてあったときに一目ぼれしてしまいました。だから、だから。」

美貴は友一を拒否する姿勢なんかちつとも見せず、ただただ友一を

見つめていた。

「そんな、好きな人が・・・あなたが目の前でやられている姿なんか、みたくなかったんです。山中さん、ぼくは頼りないですが、必死であなたを守っていく覚悟です。だから、ぼくと付き合ってください。」

言った瞬間、ポケットの中の手紙を握りつぶしていた・・・

風がヒュ〜と通った・・・（シケタわけではありません・・・）

やわらかい、秋の風が・・・2人は少しの間、みつめあっていたが、美貴がクスツと笑うと

「必死で守ってくれよ、ナイトさん」

そう美貴は呟いた・・・

その後の話だが・・・

みごとにカップル樹立をはたした友一は幾斗と武藤に深くお礼を言った。

美貴は実は1年B組の2班だったので、席替えの時、6班に移ってきた。(席替えは自由、ついでに美貴は幾斗の隣になった・・・)

屋上で弁当を食べる仲間がまた増えたが、誰1人嫌がる人はいない。

逆に嬉しがつてるのが現状だ・・・

「ねえ、赤城さん。なんで、あの時助けてくれたんですか？」

友一は幾斗に質問した……すると、幾斗は

「お前は、俺の友達で俺らは仲間だろ？仲間たすけねえ奴がどこにいんだよ！」

その言葉で、友一は完璧に幾斗たちの仲間に入ったのだった……

ぼくは幸せものだ……。あなた方が
いて、本当に良かった。

友一は心の中で、幾斗たちに感謝の言葉を述べた……

第18話：番外編2、オタクとギャルのラブストーリー（後書き）

いやぁ・・・やっぱ疲れました。新キャラの登場ってあんがい難しいです・・・。

次回から、雛菊が主人公にもどります。武藤、安曇、幾斗、雛菊、そして新キャラの美貴と友一を加えた、学園ラブコメに・・・もどります。

感想、コメント、よければお願いします。

第19話：夜鷹の夢／鬼殺し編！（前書き）

サブタイトルは、内容とあんま関係ありません。

第19話：夜鷹の夢　鬼殺し編！

時は10月17日……

雛菊は今日、学校の帰りに、安曇、美貴と近くにあるデパートに来ていた。

去年オープンしたそのデパートはかなりの規模で、電気屋、本屋、食品売り場、プラモ屋、おもちゃ屋、数々の服屋、その他雑貨屋など数多くの店の集合体であった……

なぜ、3人がそんなところをうろついているかと言うと3人とも目的があるのだ。

美貴の目的は極めて簡単。買いたい服があったらしい……

安曇はというと……安曇の妹、糸河龍子いとかわりゅうこの誕生日プレゼントを買いに来ていた。

雛菊は……最愛の人、赤城幾斗に誕生日のプレゼントを買いにきていたのだ……

実は幾斗と安曇の妹の龍子は誕生日が10月20日で同じなのである。

まあ、そんなこんなで買い物我真つ最中なのでした。

雑貨店で……

「ねえ、龍子にはどっちがいいと思う？」

ちいさなくまのぬいぐるみを2つ手に持って、安曇は雛菊に聞く

「え……と……うーん わ……わかんない。」

当然の返答である……。なぜって？雛菊は龍子を一度もみた事がないし、しゃべったこともないのである。それに、安曇が持ってきた2ひきにくまのぬいぐるみあまり変わりがない……。ようするにどっちでも同じなのである。

「お……。おなじじゃないよ！ほら、耳の長さが違う！」

こまけえ！そんなところまでわかるかあ！つか、そんなに変わってねえだろうがぁ！！（作者の突っ込みです。お気になさらず……）

「じゃあくまと猫のぬいぐるみどっちがいいと思う？」

今度の質問は簡単だ……。雛菊は

「ね……。猫のほうがかわいいと思うけど……。？」

と答えた、安曇が参考にしてくれたら何よりである。しかし、安曇は

「えー 絶対くまのほうがいいよ。よしっ！くまにする。」
と結論を出していた。

じゃあ聞かないでほしい……

当然の思想である。

レジに安曇はくまのぬいぐるみを持って行って、お金を出していった……

雛菊は迷っていた。幾斗になにをあげれば喜ぶか・・・そういう経験が少ない雛菊は、年頃の男子が（しかも不良が）なにをあげれば喜ぶのかまったくわからなかった・・・

人に聞くのが一番かと思い、雛菊は安曇より頼りになりそうな美貴に聞いた。

「ねえ、幾斗くんにプレゼントしようと思うんだけど、なにがいいかなあ？」

美貴はそれを聞いて、腕を組み考えるポーズをしていた・・・かれこれ3分ぐらい・・・そして

「会長の・・・」

「わ・・・わたしの？」

「身体！」

顔が真っ赤になっていたに違いない、雛菊は美貴をポカポカ殴りながら

「バカー！」

「冗談だっツーの！ちよ、おちつけえ」

美貴はだめだったので、安曇に聞くことに・・・

「ねえ、幾斗くんにプレゼントあげようと思うんだけど、なにがいいかなあ？」

「うーん、わからないかなあ？」

さ・・・さすが・・・私より経験あるからすぐわかるんだあ

雛菊は期待した。

「だから、やっぱり年頃の男子が喜ぶのは・・・」

「よ・・・よろこぶのは？」

「身体！」

ガツクリきた。それじゃあ美貴と一緒にじゃない！まったくもって参考にならない！ いや・・・さてよ、安曇や美貴が本気で言うてるんだとしたら・・・？

て、ダメダメダメー

これ以上このネタで書くとR指定しなくてはいけなくなってしまう
すww

「もお！2人とも冗談言つてえ！」

頬を赤らめながら、雛菊はプンスカ怒っていた。

「だって、かいちよーイジメたらムキになるから可愛いんだもん。」

「そうだよそうだよ。」

美貴と安曇が声をそろえて言つてた……

そんなこと言われても嬉しくない！

「じゃあ、真面目な話！赤城くんは不良だから、やっぱりアクセサリーとかいいんじゃない？」

安曇にしてはまともな意見だ……

「アクセサリー？つて言ってもいろいろあるじゃない……」
雛菊がそう言う

「例えば、ネックレスとかさ……どーよ」

美貴はネックレスを提案……

「ほかにもいっぱいあるよぉーチェーン、ブレスレット、ピアス、イヤリング、ピアカバー、Mピアス、ベロピアス、ネイルピアス、リング……」

ベラベラ喋りまくる安曇をみながら立ち尽くす、雛菊と美貴であった。

なんで、そんなに詳しいんだろ？そんな疑問は後にして雛菊は

「あ、あのさあ、やつばよくわからないから、ネックレスにする」
雛菊がそう言うと、なぜか残念そうな顔をしながら安曇は

「そう・・・」

と返事をしていた・・・

ネックレスにきまつたのはいいが、ネックレスにだって何種類もあるのだ・・・この雑貨店だけでも軽く100種類はある・・・形、色、質、大きさなどもそれぞれ違う・・・

他人のプレゼントを選ぶのは、これが楽しいと思う人も世の中にはたくさんいるのだろうが、俺はあまり好きになれない・・・（作者談）

「かいちよーこれなんかどうよあ？」

美貴がネックレスの1つを指差して言った。そのネックレスは、銀で作られた女の人の裸？のような形のネックレスだった。

「それ・・・幾斗くん。怒ると思うなあ」

はつきり言って、そのネックレスはキモかった・・・

「じゃあーこれは？」

安曇がでつかいハートのついたネックレスを指差す・・・

「えっとそれは・・・変じゃない？というか、ハートがでかすぎでしょ？」

チエーンに似合わず、ついているハートはかなりの大きさだった・・・

こんなふうに、あーだ、こーだ言っている間に、2時間も時間が

たつてしまった・・・

2時間、3人が頭をよせて考えた結果（真面目に考えたのは雛菊1人・・・）幾斗へのプレゼントは縦長の銀板に小さなハートの石がはめ込まれているものに決定した・・・

3人は、暗い夜道を通って家に帰らなくてはいけなかった・・・自分らが悪いのだからしかたがないが・・・

家に帰って、ネックレスを包みに入れる。キレイなりボン。キレイな袋。

全部自分で買ったものだ・・・

問題は、どうやってわたすかである。

とりあえず練習をしてみる

「幾斗くん。いつもありがとう。これは、誕生日のプレゼント」
うーん、ノーマルすぎ・・・

「別に幾斗くんのために買ったわけじゃないけど、あまっていたからあげる！」

うーん　なんかツンデレみたいでやだなあ・・・

「幾斗くん、このネックレスを私だと思って、つ・け・て」
キモイな・・・それは・・・

「これ・・・やる・・・」

それは、冷たすぎでしょ・・・

そんなこんなで悩んで、結局決まらなかった・・・

ラブストーリーなら当然のようなネタなわけでした……

そんな悩みの多い生徒会長はついに本番の日を迎えてしまう。

10月20日の朝。

安曇の計画では、龍子（安曇の妹）の誕生日会を安曇の家でやるので、それに幾斗をよんで、一緒に祝う……

そんな、すごく単純なアイデアに生徒会長、美貴、武藤、友一は大賛成していたのだ……

学校にて、安曇が5人に、誕生日会に出席する人数を発表した

出席するのは

安曇、武藤、友一、美貴、雛菊、幾斗、龍子、露子（幾斗の妹……第5話参照）の8人である。

実は、龍子と露子は幼いころから仲がよく、現在も同じ小学校に通う親友同士だ。

糸河家と赤城家はそんなふうな関りがあったのだ……

「もちろん、全員出席だよな？」
と安曇が5人に聞くと

「ああ、・・・俺はいけねえーや・・・」

そう、幾斗が呟いた・・・

第19話：夜鷹の夢／鬼殺し編！（後書き）

久しぶりの投稿です。呼んでくれたかた、ありがとうございます。

できたら、コメント、感想、お手紙、評価、どれでもいいのでやってください。お願いします。

第20話・夜鷹の夢・妹殺し編（精神的に）（前書き）

あはっは

第20話：夜鷹の夢／妹殺し編（精神的に）

「な．．．なんで？」

安曇がとっさに幾斗に聞いた。幾斗は一瞬考えて、から

「別に、理由なんてないけど？」

そう平然と答えた、

「なんで？せつかくみんな赤城くんの誕生日を祝おうって言うてるのに！」

安曇は幾斗の言葉に納得できなくて反論する！

「誕生日、誕生日って、ピーピーうるせえんだって！誕生日くらい静かにさせろや！バーカ」

「なっ！なにがピーピーよお！じゃあ、赤城君はわたしたちが迷惑だっって言いたいのか？」

幾斗と安曇が猛烈なケンカを繰り広げた。安曇の言葉に少し幾斗は退いたが

「ああーそうだと、迷惑だよ。誕生日会は俺がいなくなたって龍子つつう主役がちゃんというだろうが！」

幾斗がそう言うのと、安曇は少しこわばった表情をしたがすぐもとの顔に戻って

「2人ともが主役なんですう！」

安曇が幾斗を睨んだ、幾斗も安曇を睨んでいたが数秒が過ぎたとき雛菊が

「幾斗くん、それはちょっと酷いんじゃない？みんな、幾斗くんのためにしてるのに！」

雛菊が、そう言うのと幾斗は、少しがっかりしたような顔で

「マジ！うぜえー、勝手にしろや！」

と、一声あげると、スタスタと帰って行ってしまった。

雛菊たちははいつもと様子が違う幾斗の背中を心配そうに見送るしかできなかった……。

しかし、その後どうすることもできなくて、幾斗を除いた5人は安曇の家でパーティーを開いた。主役はもちろん安曇の妹の龍子だった。パーマのかかった髪を膝まで伸ばしたかわいい女の子。それが龍子だった。みかけに似合わず、安曇よりしっかり者だ……

雛菊や武藤は、何度も幾斗に電話してみるものが出ない。

今回で12回目になる、幾斗への電話をかけようと雛菊は携帯電話を開く、そしてボタンを押そうとした瞬間。

「お兄ちゃんは？」

そう誰かが後ろから問いかけてくる、雛菊が後ろを振り向くと、いつも幾斗を迎えにいった時に出てくる幾斗の妹、赤城露子あかぎろこが立っていた。2つに結んだ髪がクルンとカールしていてかわいらしい。

「幾斗くん、誕生日会いきたくないって言ってたんだけど、なんでかな？」

雛菊が逆に露子に問う……すると

「やっぱり……今日は誕生日だから……」

そう、小さく呟く。

「ど……どうゆうこと？」

雛菊は露子の顔をのぞきながら尋ねた。露子は丸い目でしっかりと

雛菊を見ながら

「じつは……………」

「幾斗、お前に守るべきものはあるか？あるなら、強くなれよ、そして死ぬ気で守れよ。わかったな 幾斗……………」

自宅のコタツの中で幾斗はぐったりと横になって過去の夢をみてい

だが、どうやら夢から覚めたようだ……

「親父……」

幾斗はそう呟くと、のっそりと起き上がり上着を羽織ると家を後にした。

幾斗は1人夕暮れの川べりを、コツコツと歩いていた。いつものように、胸を張ってヤンキー歩きをしていない。まるで、ヒロインの女に捨てられた後の、真っ赤なスーツを着た大怪盗の3代目のように背中を丸めて歩いていた……

どこか、悲しそうな表情の幾斗は数十分ほど川べりを歩いていたが、川べりの道の交差点の場所で、交差点を横切り、川に背を向けて歩いた。

時折、幾斗は口にたまった唾を地面に吐いては、なにかやりきれない気持ちを抱えているかのように顔をしかめていた。何を考えているのかはわからないが、ただならぬ気持ちを抱えているのは間違えなかった……

歩いて、歩いて、幾斗が行き着いた場所は、小さな囲いに囲まれたお墓だった。その中にある、ひときわ大きな墓の前に幾斗はたえずんだ……

赤城家と書かれている墓を、幾斗はいつまでも見つめていた。

「露子たちのお父さんは、とある会社のサラリーマンをやっていました。人柄がよく、優しくったお父さんは、上司にも大変したわれていたんです。当然のようにお父さんは出世しました。お父さんの成績は会社でトップと言っても過言ではなかったからです。そのころ、お父さんには古い友人がいたんです。その友人のことをお父さんは大層、信頼していました。きっとその友人もお父さんのことを信頼してくれていたと思います。」

しかし、お父さんが出世するたびにその友人はお父さんに嫉妬を抱いていたんです。お父さんのことが、死ぬほど妬ましくて、その友人は・・・お父さんを、殺したんです。ちょうど、今日の今頃です。私の家では、お兄ちゃんのための誕生日パーティーが開かれました。その時、その友人も家に来たんです。よくやるじゃないですか、ケーキの上のロウソクの火を電気を消して暗くしてから吹き消すっていうのが・・・その時もやっただんですよ・・・お父さんが電気を消して、お兄ちゃんがロウソクの火を消そうとした瞬間、幸せが膨らむ瞬間・・・その友人は、ロウソクになにかわからなけれど、ガスか何かを吹きかけたんです。家中に、火が回り・・・幸せな家庭は吹き飛びました・・・お父さんは、私とお兄ちゃんとお母さん、そして自分を殺そうとした友人までを外に逃がしたために、逃げ遅れて死んでしまいました・・・。

だから、お兄ちゃんは・・・お兄ちゃんは・・・自分の誕生日が大嫌いなんですよ。露子は小さかったからあんまり知らないけ

ど……お兄ちゃんは今、結構大きかったの……たしか、小学5年生の頃です。お兄ちゃんは、誕生日になるといつもその時のこと思い出して……」

露子は、幾斗の過去を簡潔に雛菊に伝えた。

雛菊は深く後悔した、なんにも事情をしらなかったくせに、幾斗にあんなことを言ってしまったのだから。

幾斗くんに謝らなくちゃ……

そう思ったら、もうすでに雛菊は安曇の家を飛び出していた。雛菊が急に飛び出してしまったので、武藤や安曇、龍子たちは驚いて雛菊を呼ぶ

「山内さんあーん

「かいちょーさーん

「ひなぎく……さ……ん……ひ……

遠くのほうでみんなが雛菊の名前を呼んでいた……。でも、雛菊は振り向かない。

ものすごいスピードで走っていった雛菊を、龍子は見送りながら

「さすが、お兄ちゃんが必死になる女の子だなあ」

そう呟いて、いつまでも雛菊の背中を見送った……

幾斗くん、どこにいるだろう？家にいるかなあ？

雛菊は、走った。自慢の足で走った。　　はやく、幾斗にあいたくて……。はやく幾斗にあつて、謝りたくて……

午後１０時の街中を女子高生が全力疾走していた。

そして、幾斗の家があるマンションの階段を駆け上がり、幾斗の家のベルを鳴らす……。が　応答がない。

「幾斗くん……。私だよ、雛菊だよ。お願い。いるんだったら開けて」

ドアをノックしながら、雛菊は幾斗を呼んだが、出てこない……

そんなことを続けていたが、なにも食べてない上に走った後なので体が疲れきっていて、雛菊はドアの前にペタリと座り込んでしまった。

数十分という時が流れた……。雛菊はドアの横にちょこんと座って、膝に顔をうずくめていた。眠さと空腹が雛菊を襲った。

そこへ

「う？え？雛菊？」

午後１１時、幾斗はやつと、家に帰宅したのだった。

「あ．．い．．幾斗くん。そ．．その．．．」

雛菊がしゃべろうとしたら

「とりあえず、家中はいれよ．．．」

そう言つて、幾斗は雛菊を招き入れるとコタツにすすめた。

１０月にしては、今日は冷えた日だった．．．

「あ．．の．．幾斗くん、露子ちゃんから．．話きいて．．今日は、学校であんなこと言つて．．ごめん」

雛菊は頭を下げた．．すると

「ああ．．俺こそワリイ。ちよつとイライラしてたからさ。」

そう幾斗が言い終わると、２人の間に沈黙の時間が流れた。コタツのファンの回転音だけが鳴り響く．．

雛菊は、プレゼントを渡す事を思い出し、渡そうとするが．．．どう渡せばいいのか．．

なんかイロイロ考えたのになあ、ツンデレじゃなくて、冷たいやつじゃなくて．．えつと、その

脳内が混乱していた、心臓の心拍数が速くなり、手が震えてきた．．

私．．緊張してる？

「あ．．あの幾斗くん．．その．．」

幾斗は、「なに？」と答え雛菊をみつめていた。

混乱した頭で雛菊は言ってしまった。

「こ・・・これ、プレゼントのネックレス。幾斗くん、このネックレスを私だと思って、つ・け・て」

チーン

一瞬、世界の空気が凍った気がした。雛菊は我に返って自分の言ってしまったことを考え、体から蒸気が上がりそうなほど恥ずかしくなった。

「なあっあああなはっはははっはははっはははっはははっはははっはあ」

幾斗は大爆笑！

「おいおい、雛菊。冗談ウマスギ！！わああっあはははっははは」

まあ、冗談で片付けられた・・・幾斗は思いっきり笑った後・・・雛菊と冷凍食品の夕飯を食べてコタツで横になった。

電気を消して、暗闇の中、幾斗の声がした。

「なあ、雛菊。俺の親父さあ、この日に死んだんだ・・・」

「うん……」

雛菊は、どんな声をかけてあげればいいのかわからなかった。

声に詰まった雛菊に幾斗は

「親父さあ、死ぬ時、自分を殺した男まで助けて死んだんだ……その時親父、なんて言っただけで死んでいったと思う？」

暗いから、幾斗の表情はみえない。悲しそうな顔をしてるのかな？

雛菊は、みえない幾斗の表情を思い浮かべた。そして、心配になつた。すると

「親父のやつ、炎の中で俺に
俺って、ヒーロみたいじゃねえ
か？幾斗？わあっはっはっはっはぁー
って言って、笑いながら死んでいきやがったよ。」

そして、やけに楽しそうな口調で、

「変な、親父だろ？でも、自慢の親父なんだ」

「うん……」

せまいコタツ・・・雛菊は幾斗の背中にしがみついた。今だけは、コタツのぬくもりと、闇で幾斗との密着を許してくれる。

優しい、シャンプーの香りが幾斗からする……。柔らかい臭いと、幾斗の体温を感じながら雛菊は幾斗にしがみついたままスヤスヤと眠ってしまった。

親父、俺の守るべきものは、こいつかもしれないや。

星だか、空だか、幽霊だかになった親父、今の俺をみてるか？めっちゃめっちゃうらやましいだろう？

幾斗はそう父に心の中で報告すると・・・クスッと笑って、雛菊の寝言を聞きながら眠りについた・・・

「たっだいまぁーお兄ちゃん、昨日龍子ちゃんの家泊まって来たから」

そう言いながら、妹、露子が帰ってきた。そして、リビングに入る
「お兄ちゃん？」

露子がみたのは、コタツで雛菊と抱き合って寝る実の兄であった。

「あっ……露子……」

「ご……ごゆっくり……!!!!!!!!!!」

妹は、焦って立ち去った。

これ、やべえんじゃねーのか？

第20話：夜鷹の夢／妹殺し編（精神的に）（後書き）

いやあ、書くの大変でした。次回は、安曇の物語になるかも？ コメント、感想ください。あと、好きなキャラ教えてください。

キャラ人気投票所でございます。みなさん、ご協力お願いします。

<http://vote2.ziyou.net/html/netto.html>

第21話：鋼鉄のキルマーク

まあ、ラブコメだからベタラブの話もあっていいんだろが。

今回は、高校生の現実的な悩みの話です。

10月、ここ青海高校はそろそろ期末試験の時期に突入していた。クラスでも、ピリピリした空気がただよい、みんな机にかじりついて勉強をしている。

一部の人を除いて……

「期末試験だなんて、タリィー」

グダグダと文句を言いながら、幾斗はしかめっ面をしていた。

「そんなこと言っても……しかたないでしょ？」

雛菊が平然と答える。

「そりゃあ会長さんは頭いいから余裕だろうけど……私なんか・

……」

そう言うつと暗くなる安曇。

「試験？流しとけばだいじょうぶつしょ！」

能天気発言をするのは美貴

「はあー。試験だなんて気が重くなりますね。」

不良の発言には思えない武藤の言葉

「では、僕は帰ってゲームするんで。」

試験に興味なしな、友一の発言

「俺は……サボる！」

サボリ宣言を堂々とする幾斗

5人の言葉を聞いて、雛菊は

「はあー。しょうがないんだから。」

と少しあきれた声を出す。まあ、このメンバーでまともといえるまともな人種はただの1人もいないのだからしょうがないといったらしょうがないのかもしれないが。。。。それでも学生の本分は勉強！それをよく熟知している生徒会長、山内雛菊は不良、ヤンキー、ギャル、舎弟、オタクどもに大声で言った

「今日！勉強会するわよ！」

雛菊の提案により、今日は勉強会をすることになった。場所は私立図書館である。めずらしい図書館で、24時間営業という異様な営業時間を誇る青海の勉強熱心家のメッカである。つまり徹夜OKという場所……

本数は県内トップの3億7千万冊で日本だけではなく、アメリカ、ドイツ、デンマーク等の普段見れないような本もかなりの数おいてある。

読書の秋だ何だ言われるこの季節にはもってこいの勉強場所なのかもしれない。

そんな、巨大かつ広大な図書館の中のすみの机に6人は腰掛けると勉強を開始した。

カリカリカリカリ

ゴリゴリ

ケシケシ

カリカリカリ

最初はみんなノートや問題集にペンを走らせていたが、数分後には雛菊を除いた5人がノートや教科書、問題集を投げ出していた・

集中力がまったくもたないようだ・・・今までろくに勉強した事の無いような人種なので、やっぱり慣れていないのだろう・・・

「ぜっんぜんわかんない・・・」

幾斗が机にうつ伏せに顔をうずくめた。どうたら、脳みそがパンクしたようだ・・・情報量の限界のなのかもしれない。って、幾斗の頭っていったい何キロバイト入るのだろうか・・・いや、バイト？まさか、ビット？

安曇や美貴もグダグダし始めた。

前に、「乱れた浴槽」という成人向けの本を読んではないがみたことがある、この場合は浴槽ではなく「乱れた勉強会」だなあ（作者談）

雛菊は、そんなみんなをみながら、ため息をつく。あきらめのよ
うな、情けなさのような、そんなため息を・・・

しかし、雛菊はそんなふうに勉強会が乱れていくのを黙って見過ごすようなあきらめの早い女でも、生徒会長でもなかった。

スツツと静かに立ち上がると、まず安曇のもとに駆け寄った。安曇は数学の問題集を開いてはいるが全然出来ていない。ようするに解

答欄が真っ白ということである。

雛菊はその問題集の問1と書かれた図形の問題を指差し、安曇に答えが解るか尋ねるが、当然のごとく安曇は解らないと意思表示をした。

「ここは、この定理を使えば簡単よ。」

雛菊は安曇にヒントを出した。安曇は問題の図形を5分ばかりにらんでいたが、雛菊のヒントを活用してスラスラとまではいかないがペンを走らせはじめ、3分後には解答欄に答えを記入した。満面の笑みで安曇は

「かいちよーさんーできた！この問題できたよー」

とまるで新しいおもちゃにスゴイ機能がついていてそれを、母親に見せる子供のような顔で安曇は雛菊に言った。

雛菊はその問題を除きこみ数分考えていると、

「ねえ、これ間違ってるよ・・・」

世界が凍りついたような一瞬だった・・・安曇の頭の上にガーンと大きく書いてあるのが見えそうである。

「じゃ。。。じゃあどうやるの？」

安曇が雛菊に教えるこう。

教えてくれと言われたからには、引き下がるわけにはいかない。

ましては、教えてあげなくてはいけない。なので、雛菊はバカな安曇に一から十まですべて丁寧に教えた。やりかとも、とき方も。。。。

その後、なんとか理解した安曇に雛菊のお手製応用問題をやらせ、結果がボロボロだったので出来るようになるまで徹底的に叩き込んだ。

「こ・・・これでいいの？」

安曇は雛菊に48回目の再回答をみせる。

「これ、ここ間違ってるでしょ！計算でミスしてたらもったいないじゃない！」

それは、それは、本当のスパルタ教育であつた。それは、虎の穴（店じゃないよw）のごとく、修練の門（アームじゃないよw）のごとくその時の安曇にとって、人生で一番つらくくるしかつた出来事であつたらしい（安曇談）

安曇は78回目の再回答を雛菊にみせると、ようやく合格がもらえた。雛菊はホツとため息をつくと安曇以外の人をみまわした。

すると、さつきまで寝ていた幾斗もP Pのゲームをやっていた友一も、マニキュアをつめに塗っていた美貴も、音楽プレイヤーで平然と音楽を聞いていた武藤もノートやら問題集やらに真剣な眼差しでペンを走らせていた。

あんな、スパルタされてはたまらないとも思つたのだろう・・・

いらん話になるが、スパルタ教育のはじまりは、古代ギリシャのスパルタつてところではじまったんだ。古代ギリシアのポリス・スパルタでは、子どもは国の財産として大事にされていたんだよ。スパルタの子どもは12歳になると厳しい軍事的な訓練をやらされ、その過程で体に障害を生じた子ども等を殺害していき、残つたものだけをスパルタの市民として育てた。アテナイ（今のアテネ）の、自由で芸術や弁論を尊重した教育の対極がはじまりなんだ。

昔にくらべたら、今のスパルタなんて・・・ふむ、歴史とはよく勉強してみるものだなあ。

実は勉強した経験があまり無いとは言え、実はこの5人にもちゃんと得意教科があったのであるw

赤城幾斗は数学が得意。実は幾斗のお父さんはパソコン関係の会社に勤めていた。(死んじやったけど・・・) そのお父さんにPCの技術と知恵を叩き込まれている。そのため、PCによるハッキングや不正ダウンロード、プログラミングなどはおての物なのである。知つてのとおり、ヴェージックにしろCCEにしろ、パールにしろ、C言語にしろ計算が必需である。そのため、幾斗の計算スピードは半端ではない。

武藤勇氣は生物が得意。両親とも生物学者で、世界を飛び回っている。幼いころから、本を読むのが好きで周りにある本(両親の本)ばかりよんでいたので、生物や物理はお手の物。

糸河安曇は国語が得意。実は将来の夢が小説家!そのため、何千何万という本を読んできているため、国語の読解力は最強。昔から幾斗と仲がよく、よく漢文と一緒に書いていたため漢字も得意。(漢文って言っても、夜露死苦、とか、爆走天使、とか鬼魔愚零きまぐれとかそういうヤンキー文字である。けして、春眠暁を覚えず、などと高度な漢詩なんかをかけたわけではない。)

山中美貴は英語が得意。日本だけではなく、アメリカやイギリスのファッション誌や通販を読んだりするので英語は大の得意。そのほか、フランス、イタリア、ドイツ語などが話せるということでも国際的なギャル・・・

佐山友一は社会が得意。戦争ゲームや三国志、歴史を背景にした

ゲームを数多くこなしてきているためである。それに、戦闘機や戦車、戦艦などのプラモデルを作ったりと歴史には興味があるらしい。そのほか、桃太 電鉄等の地理的ゲームもかなりの数やっているの。で地理も得意。じつは、外国のゲームをやったりするので英語もなかなか出来るという、つわもの。

得意な教科は人それぞれなのですが、この5人を総合してそれに無駄な知識まで付け加えた脳みそをもつのが山内雛菊となるわけである。

勉強会開始から3時間が経過した。明日の歴史のテストにそなえてみんな、年代の暗記に励んでいた。

「えーっと1939年が第2次世界大戦、1940年にドイツ軍がベルギー、オランダ、フランスを降伏させた。」

友一がとてもマニアックな暗記をしていた。そんな問題でるのか？

「なあ、大日本帝国憲法発布のゴロあわせてってどんなん？」

幾斗が雛菊に問う

「えーと、1889年だから、1889（ひとはやく）覚えよ憲法、じゃないかしら？」

雛菊がこたえる。

「じゃあ、日清戦争は？」

今度の間に雛菊は少しつまってから

「1894（ひとはくつし）の戦争 っのでどつ？」

と自作のゴロを言う。

「なんか、覚えにくくない？それ・・・」

友一が口を挟む。

「覚えにくいんだったら、自分で作ればいいんじゃない？」

安曇が言う。

「こんなのどうです？1894（ひとはくし）つき肉大好きとか・

・・」

武藤のしょぼいゴロ。

「いやいや1894（ひとばくし）しちゃった、なんてどうよ！」

美貴のひどいゴロ

「いや、1894（ひとはくるし）いのほうがいいです」

安曇の提案

「！！！！！！」

！！！！！！

その後、数分間みんな好き勝手にぎゃーぎゃーわーわー言っていたが、幾斗が

「1889（いつぱつきゅうしょ）にケリを入れる！でいいだろーが！」

なんで、ケリ入れるんだろう。なんで急所なんだろう？ さ

まざまな疑問をのこしてそれに決定してしまった。

その後、3時間も勉強し結局帰る時間は10時半・・・ 教える雛菊も教えられる5人もクタクタであった。

帰り道の同じ雛菊と幾斗は、一緒に帰っていた。

「ああーあ。今日はマジだった。勉強なんてよー」

不良だもの思うのは当然だろう。でも、雛菊は疲れたけど、今日が楽しかった。そりゃあ、幾斗にとっちゃあダルかっただろうけど雛菊にとってはそんなことなかった。

その、幾斗の言葉を聞いて雛菊は少しうつむいた。そして

「ごっ．．．でも、今まで一番楽しい、勉強だったぜ」

雛菊は謝ろうとした、しかし幾斗にさいぎられたのか、偶然かぶったのかはわからないがその思いは届かなかった。

でも、雛菊はうれしかった。同じ思いだったことが、楽しかったって言うてくれた事が。。

「明日のテストがんばろうね」

「ああ、たまには悪くねえ」

月明かりが2人分の影を優しく映し出していた。

「それにしても、急所にケリは清がかわいそうだなあ」
「・・・・・・・・問題そこですか？」

第21話：鋼鉄のキルマーク（後書き）

いやあ。本当に久しぶりの投稿になります。みなさんもうしわけありません。リアルは忙しくて・・・

みなさんの感想、コメント、手紙を心からお待ちしております。

第22話：雪結晶と紅い薔薇（前書き）

お久しぶりです

第22話：雪結晶と紅い薔薇

期末テストも、全員無事に終わった。（赤点をとらなかった。）

あとは、ながれ行く平和な高校生活を満喫するだけとなった青海高校の6人。

みんながみんな個性的で共通的な不思議な6人。不良、ヤンキー、ギャル、優等生、オタク、舎弟。。。。

みんな、孤独を味わって、みんな周囲に追われて・・・

孤独、死、仕事、いじめ、差別、チクリ、無愛。。。彼らを孤独にくくり付けていたものはそれぞれ違うが、彼らは自らその孤独の鎖を断ち切った。

きっと、今は幸せなのだろう・・・

「やべえー学校遅刻するうー」

猛ダツシュで走る青髪の不良。

「幾斗君がなかなか起きないからじゃない。」

隣では、超美人な女の子が不良に文句を言っていた。どこにでもあるような青春の光景。走る二人の学生を周囲の人は、温かく、また懐かしそうに眺めていた。誰にでもあつた青春。それは人によっては悲しかったり、楽しかったりとさまざまだが、それは自分が生き

てきた証なのである。

もう冬である。今年はまだ雪は降っていないが、だいぶ寒くなってきた。まあ、いつ雪が降ってもおかしくない状況というわけである。北風がビューと音を立てながら空を通りぬけて行く。

雪は降っていないが、すでにこの時もう、本当の冬がやってきていた。心が凍りつくような、冷たい冷たい冬が。。。。

「あつ！雛菊！！わりい。先に学校行っててくれ。」

校門を目の前にして幾斗が急に言い出した。

「え？あつ？学校目の前だよ？」

「ちゃんと行くつて。でも用事すませたあと・・・昼飯までに行くからさあ！！」

そう言つて幾斗は学校と逆の方向へ走り出していった。雛菊はその後ろ姿を見送ったあとに、学校に入った。ギリギリ授業も始まっていなかった。それどころか、担任の先生の急用で1時間目が自習になっている。ラッキーだ。

いつもの生活がはじまる。”普通が一番”そう誰だったか忘れたが歴史上有名な偉人も言った。

そう、普通の生活が今日も始まると思つた。そして、席にっこうと思ひ、自分の机に近づき椅子を引っ張り出す。なにげない、普通の出来事をはじめようとしたその瞬間。

ガターン

「ふざけんなよ!!」

かん高い女子の声が前の席の方で聞こえる。雛菊が目を見ると、机にうつぶせになった安曇の姿があった。そして、それを取り囲む怖い顔をした女子達がいた。

「いい加減にしろよ!マジきもいんですけど?」

「くさいんだよ!害虫女!寄生虫!」

「おい、これどうする?マジでシメちゃう?」

安曇を囲んだ女達は、安曇に口々に暴言を吐いた。聞くにたりない汚い言葉を安曇に吐いていた。

「わ・・・わたしが・・・なに・・・を・・・したって。。。。」
「はあ?わかってないの?」

泣き声で質問をしようとする安曇を怒鳴り声で押しつぶす。雛菊は混乱した。なんで安曇があんな状況か・・・どうしてそうなったのか・・・

でも1つだけはつきり解っていた。これは”いじめ”なのだと。

床には安曇のカンペンケースが落ちていて、鉛筆、消しゴムがみるも無残な姿になっていた。カンペンケースはボコボコに凹んでいるし、安曇の机には”死ね”や”害虫女”など数多くの暴言、中傷的な言葉が書き込まれていた。

雛菊はかなり混乱した。友達・・・友達がいじめられている。雛菊が混乱するのは無理も無い。相手が相手だったのだ。

彼女に逆らったらどうなるか、みんな知っていた。彼女は、この青海高校でも1部の女子のボス格であるが、その力は強力で逆

らったものは女子の”群れ”に酷い、残虐な仕打ちを受けることになる。

しかし、そんなことを見て見ぬふりをする雛菊ではなかった。いじめを受けている生徒が目の前にいてそれは親友・・・自分は生徒会長。安曇が何をしたのか知らないけど、そこまでやる必要などあるはずがない。手が少々痙攣しているが、そんなのを気にしていたら安曇が大変なことになる。

雛菊は席を立つと安曇の席の横に立って。

「やめなさいよ」

と、やや小さめの声で集団の中に割って入った。女子集団の目がいっせいに雛菊に向けられる。冷たい視線が雛菊に集中砲火をあびせるが、雛菊も負けじと睨み返す。喧嘩の得意な幾斗ならまだしも、そうでない雛菊が睨んでも怖くない。ましては、可愛いほどである。。。

「会長さん、いいとこにきましたねえ。ちょっと聞いてくださいよ」

茶髪にショートヘアの女子が雛菊に言った。

「こいつ、あたしのものを盗もうとしてたんですよー！こうなつて当然じゃないですかあ？」

そっぴい終わると、女子達が一斉に

「私もやられたあ・・・私なんか・・・」

「私も・・・私は彼氏を・・・」

「私は・・・私は・・・私は・・・私は・・・私は・・・」

と口々に被害起訴を行う、無論安曇がそんなことするはずが無い。しかし、ここで反論すれば生徒会が危うくなる。生徒を疑ってばかりで、友達をヒイキする会長とか言われそうであるのは、確かだった。

雛菊はまたもや混乱した。 答えは明白である、いじめはいじめである。ここは制裁を加えるべきだ。

震えながら、机に顔を押し付けている安曇をみるともう制裁を加えなくては、気がすまない気がした。

飛び掛ろうとした瞬間、

「さつきからみてたら調子のとてんじゃねーぞ、こらあ!!」いきなり美貴が乱入した。女子達も一瞬引いたが、すぐ体勢を変えると美貴に対して攻撃態勢を構える。

その乱闘にまぎれて雛菊が乱入し、ギャーギャーワーワーと騒ぎが始まった。第1次でも第2次世界大戦でも同盟国側は圧倒的に数が少なく、連合国側に物資量で大敗したように、雛菊たちはたったの3人、といっても安曇はふせているだけなので事実上2人である。・・・敵は10人前後・・・

男子のように殴りあったりはしないが、口などで相手を攻撃していく・・・女子の喧嘩である。

そこに、1人の女子が声を張り上げた

「安曇なんて、しねやあ!!」

ガッシャーン

その女子の言葉がおわる少し前に、大きな音がした。みると、机が派手にひっくり返っており足を振り上げた赤Tシャツの不良と髪を綺麗に整えた男子が立っていた。いずれも敵つそうな顔をして女子達をにらみつけていた。

まぎれもなく、我らがむっちゃん（武藤）と友一であった。

「お前ら、死ぬか？」

武藤の唇がすこしばかり開いた。

第22話：雪結晶と紅い薔薇（後書き）

いやあ、今回短くてすみません。イロイロ忙しくてなかなか書けませんでした……

感想、コメント、心よりお待ちしております……

第23話：ゴージャは食べられたくないから苦いのに、それを人間は・・・（前書き）

どうも、お久しぶりです。

第23話：ゴーヤは食べられたくないから苦いの、それを人間は・

武藤と友一が怖い顔で立っているのにもかわらず、女子達は安曇を罵った。

安曇と雛菊と美貴が武藤に視線を向けると、武藤はいつものサワヤカ微笑スマイルではなく、言葉敬語ではなくなっていた。

「聞こえてねえーのかあ？ああ？」

どこぞの不良、まあ不良なんだが・・・そのへんの不良と同じような声をだした。

しかし、女子はまったくの無視。武藤に顔も向けやしない・・・ただ安曇を攻撃していた。

武藤は女どものボス格につかみかかった、するとそいつはまるで木の枝でも引つかかっていたかのような華麗なしぐさで、武藤の手を掃うと、まるで雑草でもみるような目つきで武藤を見た。そして自分より背の高い雑草にすまし顔で

「なに？」

と答える、

ヤバイ 雛菊は思った。武藤は完全に怒ったらしい。マンガなら頭に黒十字に似たイラマーク？が出てきそうなほどだ。今にも殴りそうだ。

雛菊は内心少し思った・・・ やっちゃえ！ もちろん美貴もそう思った。

「お前、自分がなにしてんのかわかってんの？ああ？」

「あら、かっこいい事。」

女はクスリと笑うと、武藤の目を見てはつきりと

「悪いことしたやつを懲らしめてなにが悪いのかしら？ゴミの味方はゴミ虫だけです。あなたもゴミ虫なのかなあ？」

そこまで言い終わると、女は武藤の顔から目をそらしてその他諸々の女を引き連れてその場を立ち去った。

クソ！ 雛菊も武藤も友一も美貴も胸糞悪い。すぐにでも追って行ってあいつらをボコボコにしてやりたいと思っていた。

女どもが出て行ったのと同時に、先生が入ってきた。

「だいじょうぶですか？」

昼休憩、武藤は安曇の擦傷を見ながら言った。ただの傷だが、女の子にとって肌の傷は大敵なのだ。そのことをよく知っている武藤と美貴は安曇をとても気にしていた。友一はというと。。。心のそこでは「たいしたことーねーじゃん」とは思っているものの、口では大丈夫？などと聞いている。空気の読める男なのだ。

「うん。このくらいの傷。。。なんとも」

実際、安曇は肌の傷などたいして気にしていなかった。昔から幾斗と悪い事してきたので、かすり傷なんてへっちゃらである。しかし、傷ついたのは肌ではなく心だ。心の傷は当分癒えないのと同じにいじめも当分続きそうだ。ことに、武藤や友一、幾斗が女子のいじめに関わるのは実はものすごく難しいことだ。理由は簡単。コは共学とはいえ体育、保健などの授業、そして着替えなどは女子と男子がバラバラになる。（まあ当然か？）今日のような特殊な日は少なく、だいたい女子だけに、そして安曇が一人になるときに攻撃される。

その後、安曇はいじめがじまった日、理由、内容を話しあ・たまのいい雛菊がそれをまとめた。

「つまり？こういうこと？」

ある日、安曇が歩いていると1人の女の子がおりました。そのこは

大そう困っている様子でした。安曇がどうしたのか尋ねると、その女の子は先日、男子更衣室に彼氏が大事なものを間違えてもって入ってしまった、それが今日無ければこまるそう。彼氏にとってもらったら？それか、ほかの男子に取って来てもらったら？と言うと。そのこは、今日は彼氏が学校を休んでしまったの。あんなもののほかの男子には絶対に見られたくない。というのである。困りはたそのこをみて、安曇は決心した。そして、私が取ってきますといい、男子更衣室へ。クサイ更衣室の中をシャツだとかパンツだとかをかきわけ探していたら。。。。。

さっきの女の彼氏にみつかつて、シャメを撮られて、ばらされなくなったら金出せって言われて拒絶したらああなったと？」

安曇がコツクリとうなずくと、まわりのみんながため息をはく

「いやあ、安曇はまったく悪くないんじゃない？その話聞く限りでは？」

美貴の言葉に全員がうなずく。まったくである。

「そういえば、幾斗くんは？」

「ああ、幾斗さんなら生徒指導室ですよ。」

遅刻したことで、柳原先生（数学教師および担任）に説教されてるらしい。今日は1日、そこで勉強だそうだ・・・しないだろうけど・・・

「じゃあ、対策というわけで、友一君と僕と幾斗さんで代わりばんこに安曇さんを見ておく。相手が来たら応援を呼ぶつのでそうでしょう？」

「いいんじゃないですか？武藤大佐。」

武藤の計画に、友一は戦争ゲーム風に言う。

「バカ野郎！そういう時はなあ、相手のところ行ってボコボコにしてやるのがいいに決まってるんだろ？」

そういいながら屋上に入ってきた単純思考の青髪不良は、妙に機嫌悪そうな顔をしてた。

「しかし、幾斗さん。相手がどのくらいの人数かとかまだわかってないんですよ？もし、ボコして生き残りがいれば、安曇さんが男子のパス等をあさっている写真が全校に……」

武藤の言葉に顔を蒼くする安曇。

「ちょ……ちょっとまって、その安曇にお願いした女の子に誤解を解いてもらったら？」

おおーと武藤達から歓声があがるが、安曇は静かに首を振った。

安曇の顔がさつきより少しだけ暗くなると、小さく口を開けて。

「さっきの子たちの中に、あの子……まじってた……」

え？

「ちょ……ちょっとまってよ、それどういうことだ？」

美貴が目丸くして問う。いや、確認を取ろうとしているのだ。美貴だってわかってる、その女は安曇を裏切ったと言う事を……

「けっ、気に食わない女だなあ！」

幾斗が心のそこからの気持ちと言つと、安曇は申し訳なさそうな顔でみんなを見上げた。

「そんな顔しないでいいんですよ？あなたは、なんにも悪くないんですから。」

武藤がサワヤカ微笑スマイルで安曇をはげます。

「じゃあ、マズその女をとっ捕まえようぜ！」

美貴がこぶしをグツと上に上げる。雛菊も軽くつなずくと屋上をおりようとした。そのとき

「コラあ！幾斗！どこ行ってたあ！トイレに行くっていったじゃないかあ！」

柳原が屋上にやってきて、幾斗を捕獲にかかる。

「うお！ヤベ！じゃーなお前ら！」

幾斗は屋上を走りまわりながら、雛菊たちにお別れを言いかけ、階段を降りていった。はあ・・・

午後の授業が終わり、HRも終わって後は帰るだけとなったとき、安曇を呼ぶ声がした。隣の組の知らない女子である。安曇がその女子のところへ行くと、その女子は

「先生が、多目的室に来るようになって言ってたよ。」

と教えてくれた。安曇はお礼を言うと、雛菊たちに先に帰ってくれと伝える。多目的室は案外近いところにある。なのでよく先生達も、生徒指導室のかわりや進路指導室としてもつかわれる

ていうか、読者のみなさんは怪しい二オイがするなあと思っている？でしょうが、実は安曇には先生に怒られる理由がたくさんありすぎるので、別に呼ばれても不自然じゃないんですね。武藤たちもそれを理解していたし。。。 （作者談）

私、成績悪いからなあ。今日から、放課後補習とかかなあ？

別の意味の不安を抱きながら、安曇は多目的室のドアを開けて中に入った。

夕日が落ちかけ、多目的室の机をオレンジ色に染めていた。そして、数人の女子達の影を真っ黒に染めていた。

安曇は自分の足に力が入らなくなるのを感じた。

しまった、だまされた。

女子達の真ん中で、やけにニヤニヤした女が一輪の薔薇を片手に添えていた。

薔薇は、夕日に染まって鮮血を浴びたように輝いていた。

第23話：ゴーヤは食べられたくないから苦いの、それを人間は・・・（後書き）

どうも、ものすごくお久しぶりです。実はオレも、イロイロ忙しくて。気付けば、かなりの時間更新してませんでした。その期間中、コメント、手紙をくれました読者のみなさま、まことにありがとうございます。これからも、頑張って書いていきますのでどうか感想、コメントお願いします。

さて、今回はいじめについて書いてみました。やっぱり難しいですね。ベタになって申し訳ありません。

では、

第24話：Born in dei．（前書き）

お久しぶりです？そうですね？長いけど、読んでみてください。
マヂすみません。

第24話：Born in dei.

ガシャン

「きゃあ！」

安曇は女子集団から逃げようとドアに駆け寄るが急に足に激痛が走り歩けなくなっていた。女の1人が安曇の足めがけて椅子を投げたのだ。教室専用の椅子はそれなりに重量があり、安曇のような足の細い女の子が食らえば堪ったもんじゃない。すぐに足は赤く膨れ上がってしまった。

「どこに行くの？」

またあの女だ。そいつは、ニヤニヤと人の悪い笑顔で近づいてくると、目に涙を貯めた安曇の美しいというより可愛らしい顔に薔薇の花を茎ごと押し当てた。

顔に無数の傷ができる。まるで、猫にでもひつかかれたようだ。血が染み出し、頬をつたる。薔薇の棘とは恐ろしいものだ。

「まだ、わからないの？」

女は言うが安曇には解らない。解るはずない。なんで自分はこんなことをされなくちゃならないのか。安曇が静かに首をふると女子達は安曇を囲むと、、、

「お前、どしたんだよ？」

次の日、安曇が学校に来ると突然幾斗の質問を浴びさせられた。無理も無い、足にはシップ、顔には無数のバンドエード、手等にも軽い包帯が巻いてある。怪我を見ても暴力を振るわれた事が一目瞭然だし、もともと女子達に狙われていたのだから安曇を怪我^やったのはあいつらに間違いはない。

心配そうな友達の視線を感じ、安曇は辛かった。

ごめんなさい

心なしか、謝っていた。

安曇はその後、幾斗達にどんなことを聞かれようと何も答えなかった。ただ机にうつぶして、かすかに感じる女子の冷たい視線^{てき}を身をもって受け止めていた。何度質問しても、なにも答えない安曇に不安を抱く5人だったが今のところ何かをしてあげることが、できなさそうだった。

しかし、これ以上安曇に手を出させるわけにもいかないので授業の合間の10分休憩時に安曇を除く5人が集まりどうするか話し合った。

「私は、先生に相談したほうがいいとおもう。そうしないと、高校生活中、ずっと安曇が狙われると思うの」

「でもさあー女子のほとんどがあの女を恐れてるですよ？口封じされて、都合悪くなるのは目に見えてます。」

先生に言うべきか言わないべきか、雛菊と友一が話し合っていると「今はまだ、言うべきタイミングじゃないとおもいますけど？それに、教師に相談しても相手が裏で口を合わせれば一貫の終わり」

武藤が残念そうに口を挟む。美貴も考えはするが何も浮かんでこない様子だ。

結局、なにも考え付かなかった5人は安曇をみはって不振な女子（または男子）が近づいてきたらブロックするということになった。

実は、この結論はものつすごく珍しい結果である。この5人が頭を寄り合わせるのに、なにも考え付かないで常識的な戦法で相手を

迎え撃つなど前代未聞とまでは行かずともマレなのは、間違いない。

それから、1週間。雛菊はものすごい勢いで忙しい日々を送るようになり生徒会室から出るのも困難なほど仕事が発生してしまった。そろそろ秋の大イベント、文化祭がやってくるので予算割り、集計イベント、執行部の選抜など雛菊には多すぎる量の仕事舞い込んでくる。それでも雛菊は、暇があつたら安曇と行動をとみにして女子の攻撃をブロックしている。普段は美貴や武藤、友一や幾斗が安曇の親衛隊をやっているが3人は男子であり、いつも一緒に居れるわけではないのでほとんどの場合、美貴が安曇をさりげなく護つて

余談になるが、安曇をかばったせいでここんこの雛菊の支持もあまりいいものではなくなってきた。今月の生徒会支持率調査によると、前回92%だった雛菊の支持率は51%まで減少。約半減するという事態になっている。あの女のおどしでほとんどの女子が怖気づいたに違いない。学校の半分の生徒つまり女子の支持率が低下したことから見ても圧力が何かをかけたのは間違いない。

あつ書くの忘れたけど、あの女は3年生である。つまり、並大抵の女子が反抗できる相手ではないと言うことである。

それでも、美貴や雛菊があいつに反抗したのは友情とか仲間とかそんな”簡単”に言葉に出来るものではない。熱く、熱く熱せられた鉄の鎖が身体を縛りあげるような苦しみかなにかが、胸を締め付け口から鮮血が流れ出しそうになる。辛さと痛みが自分のものではないのになにか伝わってくるからだ。もちろんそれは安曇の苦しみであり、武藤たちの苦しみであることは当然の如く雛菊や美貴は解っていた。

時は10月後半、今年は何故か寒い秋が訪れていた。今日、雛菊たちは毎年行われる文化祭の準備の真っ最中で校庭にテントを張る作業をしなくては、いけなかった。飲食店関係のテント等を立てている。テントといっても、学校行事用のテントで（あたりまえかww）かなりの広さがある。そのテントを校庭だけに20個・・・大変な作業なのである。

「会長、これはどこに張るんすか？」

「校舎横に張って、たぶん相談室のテントだから！」

「りょーかい」

文化祭実行委員と生徒会役員が校庭を忙しく走りまわる。回天の日差しの中、もうすぐ訪れるであろう冬の使い魔”北風”が校庭の中を悠々と駆け巡り小さな砂嵐を作ると、また悠々と通りぬけていく。紅葉が落ちて裸の木が山の半数をしめている。

冬と秋のはざま。動物達はいっせいに土にもぐるか南に逃げるかしてこの厳しい季節が過ぎ去るのを待とうとする。

タラララータラララータラララータラララッタラ

現場の監督をやっていた県立青海高等学校生徒会会長山内雛菊の携帯電話が激しくチャクメロを鳴らしながら電話受信の合図を送った。「はい、山内ですけど」

雛菊が携帯をひろげて、耳に押し当てると読者の80%が予想しているはず・・・の内容が聴こえてきた。

「雛菊、私。美貴。今、本館校舎4階の女子トイレで安曇がつかまっただみたい。助けに行くから一緒に来て！」

大きな声が電話から漏れ出し、雛菊の半径1m以内ではその声が容易に聞き取れる。それは、美貴からの安曇が拉致られたという緊急報告であった。いつかこの日が来るだろうと予想していたとはいえ、こんなクソ忙しいときだなんて・・・

雛菊が電話を切る。助けに行くべきか？しかし、公共事業を捨てて個人を助けにしなければ確実に生徒に迷惑がかかる。人の上に立つ物は私情を権力に持ち込んではいけないと雛菊は充分承知していた。胸糞悪くてもしょうがなく、現場の指揮に帰ろうとする。

すると、青海高校の副会長である平本彩がニコニコしながら雛菊の横に立っていた。

「雛菊さん、なんてあなたはバカなんですか。こんなところでこんなことしてる場合じゃないでしょう？」

「へっ？」

突然の話しかけに、戸惑う生徒会長をよそに副会長はとどめの言葉を刺す。

「現時点より校庭テント張りは、副会長平本彩が指揮をとる。部外者はすぐに立ち去りなさい。」

マイクを通して校庭中に響き渡る声。無口な女の子である平本彩の貴重な大声であった。

普段無口で、無表情な副会長は普段の数百倍分の言葉と、普段絶対に見せない微笑を雛菊会長に送ると。なにも無かったように後ろを向き、テント張りの指揮に戻った。雛菊はあつけにとられたが、彼女の背中にはしっかりと「早く行け！」と書いてある・・・気がした

数十人の3年生の女子生徒が安曇と美貴を囲むと、厳しい顔立ちで2人を睨みつける。美貴は平然と立っていたが安曇は動揺を隠せない様子で、ガクガクと震えている。本館4階女子トイレ。ここは今、別の名を修羅場または戦場である。男子の援軍を呼ぶわけにもいかないこの場所で2人は孤独な戦いを強いられていた。囲まれた二人は身動きがとれなくなっていた。トイレ掃除用のモップ、ほうき、カッポカッポ（つまったの取るやつ）を向けられて一歩動けば汚れた水のついた掃除道具の餌食になってしまう。そこえまたあの女が出てきた。

「どう、土下座して謝って、感謝料払えばゆるしてあげるよ」

かわいく言ってくるの逆に美貴の堪忍袋の緒を切らす原因となりそうだ・・・

「土下座ならいいけど、金はねえ・・・あんたにはもったいないじゃないん」

もっさもっさの髪を美貴は掻き揚げながら、明るくまで強気の姿勢で言う。

「土下座は出来るって言うのかい？」

「上っ面だけの行動なら誰にだって出来るしね。」

美貴とその女は睨み合い、互いに火花を散らしていたが痺れを切ら

したその女は美貴を殴ろうとする。

「あんた、名前は？」

突然美貴が名前を聞く。女は一瞬ためらったが

「佐々木友美ささきともみだけど？」

と不機嫌そうにこたえる。その答えを聞いて、美貴も大そう不機嫌そうになる。

「あんたみたいな女の名前の漢字とあたしの大事な人の名前が2文字も一緒なんてきにくわなあーい」

注 佐山友一 佐々木友美 佐友

美貴のその言葉を聞いて、友美（さっきの女）はほとんど眉毛を吊り上げていく。ようやく爆弾ボーンといったところで友美の合図で掃除道具がいつせいに2人を襲った。2人の服に汚れがつきまくり、掃除道具攻撃の後にバケツに汲んできた水を2人にドバツとかぶせ、2人の制服は取り返しのつかないものになっていた。紺色の制服とスカートがグチャグチャになり、黒いネクタイがブラウスに張り付く。前髪がおでこに張り付き水滴が頬をつたって流れていく。美貴が必死に反抗を試みるがホースから放出される水を顔に受けて、身動きできなくなっている。いつももっさもっさに膨らんでいる美貴の頭は今、頼りなくしぼんでいた。

第2波の攻撃が来そうになったとき彼女はやってきた。トイレのドアがものすごい勢いで開きほうきを担いだ生徒会長が入ってきた。

ほうき？

雛菊はほうきを剣のように構えると女どもに突っ込むがすぐに後ずさり。。。。おい！さっきの勢いはどこ行った！

トイレの掃除用具たちが雛菊に向けられる。ほうきで抵抗するが

数が多すぎる。

敵が雛菊に掃除道具を向けている間、床にペタンと座り込んだ安曇は隣に座っている美貴に

「なんで、なんで私のせいなのに美貴・・ちゃんとか・・かいちよーさん・・とか巻き込んでるんだろ・・うね・・？私・・なさ・・けない・・ね」

途切れ途切れの言葉に美貴が不安を持ちながら安曇をみると、安曇は床に転がっていた石鹸を持ち上げて女どもの1人にぶつけていた。

えっ？ 美貴も雛菊も硬直した。あ・・安曇？なにやってんの？ みたいな心境のなか

安曇はお構い無しに、落ちているものを投げまくり、しまいには落ちていたカップポカップをつかんで女どもに突進した。

数人の女子が吹っ飛び、トイレの出口が見えると安曇はそのまま出口に突進すると外へ飛び出し、ビチョビチョの服のまま廊下を駆け抜け、階段を飛ぶようにあがっていった。

トイレに残された女子はボーゼんと立ち尽くし、われに帰った雛菊と美貴はいそいで安曇の後を追った。

階段を上がる途中2人は、幾斗と武藤と友一に合流した。安曇がズブ濡れで走っていたのをみて、不審に感じたのだろう。

5人はわかつていた、彼女が行く場所が。屋上。。。たぶん間違いない。

5人は自分の足が速くなっていくの感じながら、屋上にいそいだ。

屋上は安曇以外誰もいない。グチヨグチヨに濡れた制服を北風にさらしながら、自然に頬をつたる涙をこらえながら安曇は屋上の端へと足を勧めた。太陽がまぶしく輝いてるはずが、今は雲に隠れて影になっている。

死のう

安曇は決心していた。迷惑はもうかけたくない。

屋上から下を見ると足が竦みそうになる。しかし、安曇はしっかりと足を屋上につけて立っている。さあ、死のダンスのはじまり

安曇はゆつくりと地獄へ足を踏み出そうとしたそのとき

「安曇！まてえ！」

背後から幾斗の怒鳴り声が聞こえた。5人が屋上までやってきたのだ、幾斗が近づこうとすると

「来ないで！」

安曇が。。あの安曇が、安曇らしからぬ声をあげる。

「幾斗さん、僕に行かせてください。」

武藤が幾斗をみる、幾斗はそうしてくれと合図を送る。

武藤が安曇に数歩近寄った。安曇との距離は約6〜7mぐらい。
「来ないでえ！」と言い続ける安曇に武藤はゆつくり口を開いた。

「安曇さん。何をしようとしてるんですか？」

「死・死のう・・としてる・・の！」

弱弱しく、しかし力の籠った声が聞こえる。

「なんですか？」

武藤が険しい顔で問う

「み、みんなに迷惑かけちゃうからだよ。会長さんや美貴ちゃんたちにも今日、迷惑かけちゃったし。私は消えた方がいいよ！」

安曇がそう言っているときに佐々木らが屋上に上ってきた。しかし、安曇も5人もお構いなしである。

武藤は、雛菊と美貴をちらつと見ると、少し考えてから

「貴方は、自分がなんのために生まれてきたか知ってますか？」

その場にいた全員の頭に　？　マークが浮かんだ。武藤はおかまになしに続ける。

「俺もそうですが、きっと死ぬために生まれてきたんじゃないです

か？」

さらに？ マークが浮かぶ

「そして貴方は、その目的を達成しようとしている。そう、死ぬ事によって。」

もう、わけがわからない。

「じゃあ、貴方は貴方が生きている意味をしっていますか？」

「そんなもの無いから、死のうとしているんだよ。」

安曇が口を開くが、武藤はうるたえず

「無い？違います。見つけてないだけです。」

武藤の目が少しばかりきつくなる。（少しだけね・・・）

「あなたは自分の生きる意味すら見つけて無いくせに死のうとしている。それは、生まれた意味を達成することにはならないんじゃないでしょうか？ Born in dei. それは、生まれた意味で貴方は生きてる意味を見つけてない！それは、無駄死にに等しいんじゃないですか？」

武藤はゴクリとつばを飲み込むと

「あなたにはまだ、生きる意味をみつける義務がある。」

武藤がそこまで言うのと突然友一が

「そうだよ、武藤さんの言うとおりだ！収納品をゲットしても赤い木箱に入れなくちゃクエストクリアにはなりませんよ？最後まで行って、旗に飛びつかなきゃステージクリアになりませんよ？あなたが今しようとしているのは、自分から穴に落ちていこうとしているのと同じですよ！それは、クリアじゃなくてゲームオーバーですよ！」

友一・・・こんなときぐらいゲームから離れろ！

友一がそこまで言うと、女子の集団の中の1人の少女が

「安曇さん。悪いのは私です。安曇さんにあんなことたのんどいて、友美の脅しに乗ったりした私が悪いんです。ゴメンナサイい！」

この少女こそ、安曇に頼みごとをした、あの日彼氏が風邪で休んでた女の子だ！

少女がその一言を言ったあと、女子たちが口々に

「友美さん、どういうことですか？安曇が悪いんじゃないんですか？」

「嘘ついてたんすか？」

「友美さん・・・信頼していたのに・・・私達がやったのは、ただのイジメじゃない」

「！！！！」

「！！！！」

女子の集団が崩れる。そしてみんな口々に安曇に・・・

「安曇、おめーが死んだら俺のパンは誰が買ってくるんだよ！」
自分で買ってきて来い！（ここからは作者のツッコミですw）

「あたしのメイクだれが手伝ってくれるの？」

美貴・・・そこか？

「こんど一緒にモン　ンやろうっていったじゃないですか！ティ
2頭！！」

お前はゲームから離れる！

「私の相談だれが乗ってくるの？」

さすが、まともだ生徒会長

「安曇さんみたいな優しい人にしなれたくないです。わたし、本気で謝りますから死なないでください。」

まあ、同意してやろう。

「！！！」

「！！！」

雲に隠れていた太陽が屋上に光を流し込む。濡れていて、水のしずくが落ちるが、それに太陽が反射してキラキラと輝いていた。

安曇はまぶたに涙をいつぱいためて、みんなをみた。差し込む光よりもまぶしい仲間達がそこにいた。暖かい日差しより熱い謝罪の言葉が安曇にふっていた。地獄は終わった。

武藤はそつと安曇に近づく。安曇はもう、なにも言わなかった。ただ、ぬぐつてもぬぐつても出てくる涙を抑えるのに必死だったのだ。

近づいた武藤に安曇は

「武藤君。わたしはやっぱり死ねないや……わたし、臆病だから。」

安曇が涙をためた目で武藤を見上げると、武藤はいつものスマイルで

「死ねないのはあなたが強いからですよ。死は逃げ道ですから。」

安曇がコクリとうなずく。雛菊も美貴もしぜんと涙がこぼれた。幾斗も友一も胸をなでおろしていた。

終わった

終わったんだ

ビューー

ハッピーエンドを好まないのか、冬の使い魔は安曇めがけて突進した。この秋一番の北風が屋上を襲う。そしてバランスを崩した安曇と、助けようとした武藤が同時に引力によって地上へ引き込まれていった。

みんなが駆け寄る。

空中で安曇を抱き上げた武藤はもうどうしようもなかった。でも、最後に自分がやるべきことは分かっていた。

安曇を抱きかかえたまま、自分の背中を真下にむけて、自分を安曇のクッションにしようとした。安曇は目をつぶっている。

2人の人影は5階建ての校舎の屋上から校庭へ落下した。

人生で一番長いと感じられる、命綱無きバンジージャンプ。

そして2人は校庭の1つのテントを破壊して地上に着いた。

実は2人とも無事だった。テントがいいクッションとなり死にはしなかった。しかし、下側になった武藤は救急車に運ばれていったし、安曇だつて保健室で寝かされてた。保健室の先生はだいたいいないのでその隙に、イジメをした生徒達が変わりばんこに土下座しに来た。安曇はいいと言っているが、どうにも土下座しないと気が治まらないらしい。

そして、最後に彼女がやってきた。女のリーダー。佐々木友美。

友美がやってきて、安曇は多少緊張していた。まあ、当然だろうが。友美と安曇の間に少々沈黙の時間が流れたが・・・

やぶったのは友美だった

「あのさ・・・その・・・金が欲しかったわけじゃなかったんだ。」

安曇が？マークを浮かべる。

「実はさあかし、武藤くんがすきだったんだ。」

「!？」

安曇が驚くが口を押さえて驚いている。しかし、友美はおかまいなしに

「あんた、武藤の彼女だろ？嫉妬してたんだ。あんなことしても武藤くんは振り向いてくれないって分かったのに。なんでかやってしまつて。」

友美の話を黙って聞いている安曇

「最低だろ？わたしってどうかしてる。ゴメン。いやごめんなさい！。すみません。」

だんだん涙声になってくる友美に安曇は

「しょうがないですよ。誰かを好きになるのは女の子の仕事ですから。」

安曇の言葉が以外すぎたのか、友美は顔を上げる。

「友美さんはその愛情表現を間違えちゃっただけですよ。」

「あなた、わたしを憎まないの？」

友美が尋ねると

「憎んでも、わたしは幸せになれませんから。そして、あなたもね。」

頼りない安曇。でも、心の持ちようは実はしっかりしてたり。
。そうでなかったり。

その日の帰り道、幾斗と雛菊はいつもどおり商店街を歩いていた。
もうすぐ訪れるであろう冬に向けて防寒グッズが多数売られていた。
その帰り道、幾斗は不思議なことを聞いてきた。

「なあ、雛菊。」

「ん？」

さっき話したばかりなのに、なぜか久しぶりに話しているよう
な……。そんな気がした。

「力ってなんだろうな？」

幾斗の質問に雛菊は答えられなかった。解らないからだ……

少したつて、幾斗が口を開いた。

「きつと暴力なんかじゃねえーんだろうな。」

北風が二人の背中をそっと押した。

それから1週間もたたないうちに武藤は復活した。どんな生命力も
つてんだか・・・

「武藤くん。大丈夫。あの時は・・・ごめんなさい。」

安曇が少しシヨンボリと武藤にあやまると、武藤はいつもと変わ
らぬ笑顔で

「貴方を護る事が今のところの僕の生きる意味ですから」

安曇の頬が少々、赤く染まった

第24話：Born in dei.（後書き）

安曇のイジメ編完結。 長く苦しい戦いでした。今回は笑い無しだとは思いますがカンベンしてください。次話は笑える話にしていきたいです。なんでイジメについて書いたのか？

詳しくはブログをみてください。

<http://green.ap.teacup.com/kaosan/>

ケータイの方ごめんなさい。近々、トップにURL貼るんで、良かったら見てください。

コメント、感想、心よりお待ちしております。

第25話・なめるなよお？（前書き）

よっす。

第25話：なめるなよあ？

北風もますます冷たくなり、本格的に冬がやってきそうな雰囲気である。

青海高校は、今や少しばかりの静けさに包まれている。先週の週末に行われたビッグな学校行事、学校祭が終わってから今週の月火曜日は休暇となっている。高校生はみな友と遊んだり、恋人と語らったりと束の間の自由を思う存分味わうのであろう。

そんな中、1人高熱にうなされる少女がいた。。。言わなくてもお解かりいただけるでしょうがいちよう言います。

山内雛菊 である。県立青海高等学校生徒会会長である彼女は学校祭時、膨大な量の書類と、多大な重労働、毎日のように開かれたイベント、予算についての会議に奮闘していた。寒い中、夜遅くまで仕事をする^{しばしば}ことも屡あつたし辛い重労働中に怪我をする事だつてあつた。（たいした怪我じゃありません。）

まあ、そんなこんなで学校祭を大成功に終わらせて、その疲れゆえにこの休暇中に高熱を出して倒れた・・・ということなのだ。（簡単にするとねw）

とまあ、学校からさほど遠くない雛菊の家では息苦しそうにゼーハーと息をする雛菊と、39度の高熱を出す娘を看病する雛菊の母がいた。

「雛菊。大丈夫？お昼は、なにか食べる？おかゆ？」

心配そうに美人ママが雛菊に問うが、ヒーヒーと苦しそうに息を上げる雛菊はカラカラの雑巾から水をしぼりだすような声で

「お・母さ・む・り・・ぜええーはあー」

さらに何かを言おうとする愛娘に向かってママさんはやさしく頭をなでると、

「もういいから、ゆっくり休みなさい」

そして、おでこに張ってある熱さまシートを張り替えて薬を飲ませると雛菊の部屋から出て行った。ゆっくりと扉がしまる。暖房のきいた雛菊の部屋はベットと机とパソコンと。。優等生の生活感あふれる場所だ。ベットの横には窓があり外が見える。

外には北風によって落ちゆく色とりどりの落ち葉や、南に向かうツバメ達が見える。

39度だった熱は、昼過ぎには40度を超えていた。寝ているのか起きているのかもわからなくなる。熱いのか寒いのか・それすら解らない。ベットが揺れるような感じがする。天井がグルグルと周っている。吐き気がする。幻覚がたまに見えるようになってきて、鯛が部屋の中を泳ぎまわっている気がしてならない。ママさんが部屋に入ってくると愛娘は目をグルグル回しながら天井を指さし

「おかあ・・さん・・鯛・鯛が泳い・でる！」

と弱弱しく叫ぶのだ。

「!？」

さすがにヤバイと思ったのかママさんは医者に電話して、今日2度目のお医者さんがやってきた。すぐにやってきた髭面にメガネの中年に医者は雛菊にブトイ注射をブスツと打ち苦い薬をあたえて、点

滴をさした。人間は体温が43度を超えると、たんぱく質が分解して死んでしまう。つまり、雛菊は今死の境に居るといっても過言ではないのだ！あと・・・あとたった3度？お医者さんも、たとえばの熱でも死に至る可能性は充分にあることを承知して自分にできる最善のを行うと、「お大事に・・・」の言葉を残して帰っていった。

雛菊はそれから死境

をさ迷い続けた

お医者様が帰ってから1時間くらいたった頃、いまだに雛菊の熱はおとなしくならない。体温計の数字は39度と40度をいつたりきたりしていたし、ベットの揺れも、天井の回転数も増えている。寒いのに熱い、熱いのに寒い。

苦しい　　苦しい　　苦しい　　苦しい　　苦しい　　苦しい
くる・・・くる・・・くる・・・しいく・・・る・・・しい

幻覚こそ少なくなったものの、吐き気と頭に響くシンバルのような音？が全身から力を奪い、何も考えられなくなる。パジャマは汗でびっちょりと濡れ肌に吸い付いている。

苦しい・・・私・・・死ぬのかな？

苦しきのあまり、そんなことが頭に浮かんできた。（大袈裟ではありません。マジです。）

息の苦しき、温感の変感知、幻覚、幻聴、吐き気、頭痛、鼻水、高熱。。。苦しくて、苦しくて・・・しまいには苦しきのあまり軽く気絶してしまった。ピヨピヨと星が浮かんでいそうだ。

p e e c h l e s s .

?

雛菊には聞こえた。そう聞こえた。誰が、言っているのかわからないが。

まるで、頭の中に語るような感覚。これは夢？それとも地獄かなにか？

誰かが言ったその言葉。異国の言葉。

前文は聞き取れなかった。でも最後の文は確実に聞こえた。

?

死ぬのは恐ろしいでしょう？

恐ろしい・・・恐ろしいよ・・・

それから少したつて、雛菊が目をあけると身体がものすごく
楽になっていた。力が入る。熱も・・・ない。

苦しくない！私！苦しくない！

やった！やったよ！苦しくない！苦しくない！

そして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

歡喜の声を上げようとしたら、声が出ない。口はあけてるのに声
がでない。

そして気付く、自分が居る場所がどこなのか・・・。

なんで、私。自分の家の玄関にいるのかしら。

戸の前に座り込んでいる自分。しかも、戸がいつもより大きい。
チャイムに手が届かない。

手？

雛菊は手をみて啞然とした。ふかふかと毛が榮えている？

手の裏には犬や猫のような肉球があり、少し力を入れると鋭い爪がでてくる。？

後ろを振り向くと美しくのびた尻尾が毛をふさふさはやしてゆらゆら揺れてる。

⌈
•
•
•
•
•
•
^
^
;
⌋

顔を触ると長いひげと丸い輪郭、ピンと張った耳がある。鼻は少々湿つてゐる……

ま・まさか と思い。もう一度息を吸ってから声を出してみる

「ニヤアー……」

ええええつええつええええええつええええ！猫？うんえ？

えええ？？

私・猫・猫になつてる。

雛菊のママさんは猫アレルギーなので、きっとママさんが外に出したのだろう。

高熱でついにボケたのかなあ？これ、夢かな？

それでも、こんなところで突っ立てる暇はない。ママさんがきたら　しっしっ　とか言われるだろうし・・・

夢ならさつさと覚めて欲しいところ、もし現実だったらやばいと思う。

とりあえず、家をでて路上を歩く。

夢ならそのうち覚めるだろうし・・・それにしても力ラーな夢なんてはじめてだなあ・・・

雛菊には聞こえないように言うけど、カラーの夢を観る人って相当精神がヤバイらしい。前に、精神医学者が言ってたっけ・・・

家を出た瞬間、外は危険な場所だと気付く。自転車が横を通りすぎる。ゴォーと音を立てて走る自転車に、下手したらひかれて死ぬ。続いて車が走ってきた。まるで巨大重戦車のような轟音と共にやってくる鉄の塊は、恐怖である。おもわず電柱の影に隠れてしまう。車は何事もなく走り去っていったが、怖かった。

また歩き出すと、アリがいつもよりでっかく見える。巨大だ！いつもチリぐらいのクロヤマアリが粉チーズの筒の底の方に固まった塊をむりやり棒でつついて出てくる欠片ぐらいの大きさがある。（解りにくう！！）そんなことを考えながら下を向いていると向こうから犬ずれの近所のおばさんがやってきた。おばさんがつれてくるゴールデンレトリバーは怪獣のように、雛菊ねこを見つめてくる。雛菊からは冷や汗がでてきた。小さくなると世の中の見方が全然変わる。今まで普通に見てきたものが怪獣になったり巨大になったり、重戦車になったり・・・。

ダッシュで走って逃げた。周りにも注意を充分払ってる。いつ鉄の塊が自分をひき殺すかわからない。

走って走って・・・たどり着いたのは家の近くの公園。いつもならすぐつくのに、猫になったために歩幅が小さくて、臆病になってしまっているから慣れるまでスピードはでそうにない。猫も大変なのだ・・・

公園のベンチに座り込んでいると腹が減ってきた。いつもの倍以上の広さがある公園を見渡していると、一匹の猫が近づいてきた。片目がつぶれた黒猫。このあたりのボス猫だろうか？耳や目に傷跡が痛々しく残っている。その黒猫は怖い目を効かして雛菊の方へ近づいてくる。よそ者が俺のテリトリーでなにやっつてんだあ？ああ？って感じに。喧嘩のプロだろうから戦っても勝ち目がない。逃げようと思わずさりしてたら後ろは行き止まり・・・前には黒猫・・・死？それはなくても、顔が傷物になる・・・やだあ！！
右も左もわからない、ソニックとは恐ろしい（間違い！パニック！）

相手の黒猫は喧嘩なれた動きで雛菊に飛びつこうとした

バコ！ ギャウ！

怖くて目をつぶる暇も無かったのだが、そのせいで今の瞬間をみてしまった。黒猫が赤いランドセルに殴られて吹っ飛ぶ様子を・・・

どうやら助かったらしい・・・（こんなところでカワイイ主人公が傷物になるわけが無いよねえ・・・笑）

女の子が一人、ランドセルを片手にもって立っているから、彼女が雛菊を助けたのだろう。

小学生の女の子は黒猫に喧嘩売られてブルブル震えている雛菊^{ねこ}をジツとみつていた。少女の澄んだ瞳は純粹そのもので美しく、髪を後ろで結んでいてクルンとカールしている。肌は白くて、無表情・・しかし、かわいい少女。赤いランドセルをもってるので小学生に間違いない。少女は雛菊^{ねこ}に

「大丈夫」

と語りかけると未だに震えている雛菊に

「食べる？」

と食パンの余りらしきものを差し出してきた。
ぐうー

昼からなにも食べてない雛菊には格好の食料である。今は猫だし、夢だしと思いパンに食らいつく。パンが美味しい。

「にゃー」

とりあえず鳴いとく。それが猫の礼儀だと思ったからだ。

「私の家に来る？」

淡々とした乾いた言い方だが、たぶん彼女にとっての精一杯の気持ちだろうか…

「にゃー」

困ったからとりあえず鳴いてみた。

その声を聞いた少女は無表情なその顔に少しだけの微笑をとし、雛菊を抱きかかえると持っていた布袋^{ナップザック}につめこんだ。

はたからみたら、誘拐に見える。（猫の）

いかん！なんか、展開速いようなあ・・（作者^^;）

「ニャアーにやー ニャーにやあーあーあーあーあーあー!!」
暗くて怖いのでとりあえず鳴く。てか、突然の行動で多少の焦りも入っていた。いや、鳴くしか出来ない。じたばたと暴れる。

少女はナツプザックを背負うと歩き出した。後ろでうるさく鳴きわめく猫なんて全然お構い無しに歩き出す。ボーっとしているのか、無表情なのか・・・

じたばた暴れて、やっと雛菊は頭が出せた。ナツプザック 布袋から猫の生首が・・・こわあ！

そんなこととして約10分後、少女は「ただいま帰りました」と言いながら自宅らしき所に到着した。そこはボロボロマンションの2階だった。布袋から頭だけを出している状態の雛菊。ある意味怖い。

「兄さん。これ飼っていいですか？」

布袋ごと、お兄ちゃんに少女は突き出す。お兄ちゃんは布袋を開けると雛菊を引っ張り出して、目を丸くするが目を丸くしたのは雛菊も同じだった。

「猫？」

「にやーにやーうにやあー」

「はい。猫です。」

少女の兄貴は猫を抱き上げると猫を優しく抱いてみる。雛菊ねこの顔に肩まで伸びた美しい青色に染められた髪があたる。くすぐったい。「うーん。まあ、いいんじゃないの？」

兄貴は雛菊を床に降ろすと雛菊をジロジロと見てくる。雛菊も上を見上げて、兄貴さんをジロジロと見ていた。

まさか、毎朝やってくる家に運ばれるとは・

雛菊は忘れていた。いや、少女の髪型がいつもと違うのがだいた
い悪いのだが・・・彼女は間違いなく雛菊の”愛人”の妹！である。
（なんでこんなに強調！？）つまり、ココは雛菊の”愛人”の家！
（しつけれ！）つまり、好きな人の自宅・・・

回りくどい！赤城幾斗の家だ！（最初から書け！）

あせった！

運がいいのか悪いのか・・・？まあ、知らない叔父さ
んとかよりいいかもしれないけど・・・

そんな雛菊の恋心と自分の身体の変化への心配心など幾斗はまった
く気付かない様子で

「露子！こいつメス？それともオス？」

「知りません。」

幾斗の問いにたいぎそうに妹は答える。ちつと軽く舌打ちしながら
幾斗は

「さあ・・・お前はオス？メス？」

とか言いながら雛菊を捕まえると、ひっくり返して後ろ足の間を
開こうとした

「にやああっああにやななやなやや！……！」

幾斗くんのえつつつつち！バカあ！いやあ！

「おい！暴れんな！つて！いてえ！ひつかくな！」

「にややあなにやあなや」

「クッソ！股開け！おい！お前、玉ついてんのかあ？」

「うにやあああつあ！！！」

たとえ体が猫でも、精神は人間と変わらない。好きな人に突然、股開け！なんて言われても、顔から火が出る思いになるのはしょうがない。みなさんも考えてみてください、雛菊の立場になって。

雛菊が必死に抵抗し暴れてるし、幾斗もなにやらムキになってるしでバカみたいな1人と1匹を冷静な妹は白い目でみていた。見てるだけ、止めない・・・

「股開けよ！死にやあしねえよ！」

「うにやにやにや！！！」

ヤバイ！だんだんだだの変態小説になつてきてないか？（作者）

バカみたいなの争いを続ける兄と猫をみてあきれたのか、妹さんは猫を抱き上げて幾斗の目の前に突き出す。

「どうですか？」

顔の前にはしたなくぶら下がる猫をみて幾斗は

「オスじゃ・・・ねえーみたいだなあ・・・」

「にや・・・あ」

弱弱しく雛菊が鳴く。誰か私を殺してえ！ってほど恥ずかしかったようだ。

猫になりてえーとか思ってるやつは多いだろうが、猫ってのはそんなに楽じゃねえーぞ？

そんなんで、雛菊の猫ライフがはじまってしまふことになる。しかし、雛菊は嫌でも夢と信じたいのか時折起きる起きると身体に念じては頭をポカポカ叩いたり、顔をひっぱたりしている。そんな猫をみて妹様は

「兄さん、どうやら毛づくろいしてるようですよ？」
と勘違いについても妥当な勘違いを行っている。

雛菊の気なんてまったく解っていない兄妹は、猫を抱いたり触ったり、いじめ？たり・・・注）あきらかに最後は幾斗です。

「じゃあ、名前をつけよう！」

当然ペットを飼うとなると、名前が必要になってくるわけで、しかも呼びやすいやつが・・・名前決めとは以外に重要なことなのかもなあ・・・

2人が考察モードに入って、名前をあれこれ言っている。

「にゃああつあにゃあ」

雛菊はチャンスだと思った！ここで自分が雛菊だと気付いてもらえれば、もしこれが現実ならもとの姿に戻る手助けをしてくれるかと思つたのだ。こういう時は思いきりが大切なのだ！やれえ！

雛菊は、自分の名前を必死に考える兄妹の目の前に行くと「にゃ

あにゃあ！」と叫んで注目させて落ちているペンを握って、いらな
いと思われる広告の裏に握るのも困難な手でたどたくペンを走
らせた！字はグニャグニャになるがなんとか「ヒナギク」と書いた！
幾斗も露子も目を丸くしてしまった。（何回丸くするんだ！）そ
んだけ、驚く事の連発なのである。

ぐちゃぐちゃだが、なんとかヒナギクと読めないでもないその文
字をみて・・・幾斗は

「すごいなお前・・・自分の食べたいもの書けるなんてなあ・・・」
「うにゃ？」

食べたいもの？

「それにしても贅沢な猫ですね？」
露子もその雛菊の必死の想いを書きつづった紙を見て、哀れな動物
を見る目で雛菊を見下ろした。

へっ？

「しょうがねえーなあ！今日だけだぞ！露子、買ってきてやれ。一
番安いのでいい・・・その他、必要なものも」

「解りました。では、行ってきます」

幾斗は露子に野口秀雄を数枚渡すと、露子は小走りで家を出てつい
った。

「でも、まさか”ラザニア”が好きな猫がいるとは思わなかったぜ
？」

ラザニア？

ヒナギク!!ラザニア?

どう読んだらラザニアになるのよ!

「にやあ!にやあ!」

勘違いとは恐ろしいものだなあ・・・ついでにみなさんは、ラザニアをご存知でしょうか?

ラザニアは、平たい板状のパスタの一種、またはそれを用いたパスタ料理である。アメリカでは、平らな板ではなく、トタン屋根のように波打っているものが広く使われているそうだ。料理の場合は、イタリア語で「オーブンで焼き上げたラザニア」を意味するラザーニャ・アル・フォルノと呼ぶこともあるそうで、深さのある耐熱容器に、ベシヤメルソース、ミートソース、ラザニア、チーズを何層か重ね、最上段のホワイトソースに焼き色がつくようにバターを乗せて、オーブンで焼いたものなのだ!もともとイタリアの家庭料理で、非常に高カロリーである。

露子が帰ってくるまでの間、幾斗は雛菊ねじきを抱き上げてみた。微妙に雛菊の胸の鼓動が早くなっているのを感じる。

身体は猫、心は雛菊・・・

幾斗は雛菊を膝の上にのっけると、頭をナゼナゼとなでる。

猫になるのも悪くないかも・・・

そんなことを思ってしまった瞬間があった・・・若さゆえの過
ちさあ・・・

幾斗にナゼナゼされて、ギュツと抱かれて16歳の少女の恋心には
充分すぎる幸福感とドキドキ感が胸を襲う。悲しいけど、人間の時
じゃ絶対にそんなことはしてもらえない。猫になるのを悪くないと
思うのも、当然なのである。

「じゃあ、ラザニア好きのお前の名前は”パスタ”だ！決定！」
「にやにや？」

と、言うわけで雛菊なひくの名前は今日からパスタとなった。ややこし
くなるので、ココから雛菊なひくのことはパスタと呼ぶ事にしよう。

それから少したつと、ラザニアを近くのスーパーで買ってから帰っ
てきた露子はラザニアをパスタの前に出してきた。パスタはラザニ
アを前にされ、ここで食べなかつたら失礼なので高カロリーのラザ
ニアを誇りにかけて平らげた。実際、彼女は死ぬかと思つたらしい。

だいたい、腹いっぱい死ぬなんて贅沢な話なのである。

「そうとうラザニア好きなんだなあ・・・」
しかし、パスタの必死の行動は幾斗と露子の誤解を深めるだけであ
った。

勘弁してえゝ

やっぱ猫になりたいなあ！と思う人がいたら必ず次回を見てくれ！

今回は疲れたので

つづく！　おい！

第25話：なめるなよお？（後書き）

今回なんと、非現実的な小説を書いてしまいました。でも！書きたかったんですね。・何故かは知らないけど書きたかったんです。実は家には猫が2匹いましてねえ。・2匹とも野良猫から出世して飼いい猫になったんですけどね。・幼い頃その猫の1匹に猫と俺の人生を変えてくれと神様に願った事がマジメにあるんですよ。バカでしょう？で、願った日の夜に得意な想像力で猫になったらどうしようと考えたんですね。すると、マジでなった気分になって、想像の中でイロイロ苦労した覚えがあったんですよ。その経験から書くうと思っただんですね。・

長々とすみません。感想、コメント、評価。・マジで待ってます。もらったらかなり嬉しいですよw

あと、ブログもヨロシクですよw

第26話：夢は時に現実となる。そんなことあつたら俺は死ぬ。（前書き）

どうもお久です。

第26話：夢は時に現実となる。そんなことあつたら俺は死ぬ。

私は猫である。

夏目漱石先生もこんな感じの出だしをした有名な小説を出版されていた。そして、今もなお親しまれている。

そんなことは、もともとこの物語にはあまり関係をもたない。では、なぜ書いたのか？

人生、意味を持たないことのほうが多いからだ！

そして、今私が猫になっていることもそれほど意味を持っているとは思えない。

前回、山内雛菊は高熱にうなされた後に目を覚ますと外界は巨大に・・・いや身体が縮小し世間一般に猫とよばれる小形動物に身体が変形していたのだ！そのせいで、自転車におびえたり野良猫に襲われたりと苦労してなんとか赤城家のあるボロマンションに流れついた。

そしてそこで、恥ずかしいことをあせられたあげくに、ラザニアを腹いっぱい食わされた。

はあ・・・

幾斗の妹である露子は幾斗が雛菊に”パスタ”と言う名前をつけたと聞くと大反対した。

「兄さん、もつとかわいい名前はつけてあげられないんですか？女の子ですよ？」

幾斗は反対する妹に対して

「悪かったよ、じゃあカワイイやつを考えてやれよ」

と、あっさりと反対意見を聞き入れた。幾斗にとって、名前など、どーでもいいことなのだろう。

妹に対してはまったくもっておだやかな性格を維持しているようだ。

夕刻に近づき、今日も1日の仕事を終えた太陽が西へと沈んでいく。空は真っ赤に染められ、美しい光を撒き散らしていたと思えば、いつのまにか青ざめ、暗い夜へと向かう準備にかかる。幾斗の住むボロ家は現在露子、幾斗、雛菊ねこの2人と1匹だけである。

リビングでグダグダと流れゆく猫との戯れの時間を過ごしたあと、幾斗はなにやら台所へ消えてしまった。その間、雛菊は露子につかまっていた。しかし、捕まっているとは言ってもそんなに悪い気分じゃない。なぜか知らないが、そこまで嫌でもないし頭をナゼナゼされるのや首元を触ってもらうものすごく幸せなのだ…

そうやってだんだん心までも猫になってしまったりして？

ないない ないと信じたい

日はすっかりと落ち、明るい星達がキラキラと瞬きはじめる。青海町は大都市ではない・大都市の近郊にある小規模工業工場群の工業団地が出来た事をきっかけに出来た町であり、人口もいたって普通である。

あちらの家庭、こちらの家庭と蛍光灯の光が付きはじめて終いは空を覆う星よりもキラキラと輝いていた。

「おおーい露子、飯できたぞ！」

そう言いながらエプロンを纏った幾斗が台所から出てきた。

に……。にあわない……

雛菊は心底思った。エプロンにはかわいいひよこが書いてあったし、なにしろ幾斗のイメージとなにかずれてる気がするのである。

だって、幾斗不良だよ？

しかし、これも幾斗が普段雛菊達の前ではけして見せないすがたで、なんだかとても新鮮に思えた。

幾斗はいつもこうやって飯を作っているという新たな発見

秘密というか、なんと言うか　こういうことを知る事で、少しだけ自分と幾斗の距離が縮まった気がする・雛菊であった。

「えーと、お前はラザニア食ったからこれだけな」

と幾斗は雛菊の前にタコの煮付けを少しだけ皿に盛って差し出した。とても良い匂いだ。

「にゃあー」

とお礼を言つと早速食べてみる。手を使えないから食べにくいがラザニアほどではない。鋭い歯でタコを噛み切り、口の中でよく噛む「うにゃあ……」

お……。おいしい……

柔らかくなるまで煮込んであるタコと、よくしみこんだ甘い醤油・。まるで母の味のような懐かしくて香ばしい……。そんな味がした

幾斗くんは料理が上手なんだ……。という発見

ちゃぶ台の上に露子は煮付けやご飯、味噌汁などをならべていた。

どれも大そう良い匂いをあたりに撒き散らしていた・・・全部幾斗の料理だ

はたからみるとビンボー臭そうにみえるが、そのへんにある安物の冷凍食品よりはよっぽど上手そうだ。

露子が晩飯を並べ終わると、幾斗が2人分の箸を持ってやって来た。
・そして手を合わせて食事を開始する。

ガツガツ モグモグ

幾斗も露子もガツガツと飯を食べる。相当お腹が減っていたようだ・・・2人とも食事のスピードは半端無くて、食事開始から5分もたたない内にお皿は空っぽになっていた。ついでに、雛菊^{ねこ}はまだ食い終わってない・・・。

「露子、今日は早く寝ろよ！」

食器を片付けながら幾斗が露子に言った。

「今日、なにかありましたっけ？」

妹は不思議そうに問うと兄貴は

「今日は御袋が帰ってくるらしいから。俺はバイトなんだよ。すぐ帰ってこれると思うけど、もしかしたらお袋のほうが先かもしれないから寝てろよ」

幾斗がそこまで言うと言と露子は納得したようにうなずいて、自分の皿を幾斗に渡すと風呂場へと向かったようだ。

御袋？お母さんのことだよね？帰ってくるから寝てろってどういうこと？

雛菊は不思議がった。実の母が帰ってくるのに寝てろって意味がわからない。もしそれが雛菊のことなら、母が帰ってくるとなると家を片付けて首を長くして待っていることであろう。不思議でしかない。

お母さんのこと嫌いなのかな？

幾斗はしばらくすると、家を出て行った。さっきの話からしてバイトだろう。露子は風呂場でシャワーを浴びているのか、ジャーと水の流れる音がする。

しばらく雛菊はポケットとしていた・

幾斗の家は外から見ても中から見てもやっぱりボロいマンションだった。ところどころヒビが走り、土塗りの壁は永い年月をかけてかとても色褪せている。それでも汚いという感じはしない。たとえば、ボロボロで今にも倒れそうな竜骨をさらす巨船のような感じ……

どこことなく懐かしく、まるでおばあちゃんの家のような感じだ。

おばあちゃんの家。竜骨をさらすボロ巨船かあ？ 気にしたら負けってゲーム？（作者）

数十分後に露子が風呂から上がってくる。いつもクルンとカールした髪は水を吸ってまっすぐになっており、額に髪がべっとりつくっついていていた。

「いけません……もうこんな時間です。」
時計を見ると9時を過ぎていた。幾斗がバイトへ出発してから30分ほどの時間がすぎている。露子はなにやらイソイソと寝間着を着

ると、雛菊に

「一緒に寝ますか？」

と尋ねてくる。ニャアーぐらいしか言えない雛菊はどうしようもなくニャアーと鳴くしかないのであった。

返事をした猫を抱き上げ、露子はリビングの隣にある露子の部屋に連れて行かれた。女の子らしい部屋が、少々ボロイ和室に広がっていた。リビングと露子の部屋をは引き戸で結ばれている。

露子はさつさと毛布を用意して、雛菊を抱いたままベットに転がった。ほのかに香るシャンプーの匂いが雛菊を包む。清潔そうな白いシーツの上に、露子はピンクのふかふかとした毛布を並べると雛菊をベットに下ろしてから自分もベットに横になった。

かなり冬が接近しているので、露子にとって雛菊はいいカイロであった。ふかふかだし、あったかいし……

ベットに転がって数十分とたたない内に露子は寝息を立ててしまった。

寝るのハヤっ！作者じゃ無理だこの速度！

よっぱど眠かったのか、よっぱどお母さんが嫌いなのか……

雛菊は横で寝るまだ小学5年生の少女を少しの間見ていた。自分に引っ付いて寝る幼い小学生を見て、雛菊は妹が出来たような心境になっていた……

なんか可愛いかも……

といっても今雛菊は猫なので露子のほうがでかいけど……

窓からこもれる月明かり。静かな静かな夜……。電車の音や、露子のスースーという寝息、

そんなかなかな音たちが聞こえるが、睡魔という魔王は雛菊を夢の世界へ引きずり下ろそうとする。雛菊は抵抗することもせず、夢という名の深い谷へと落ちていった。

ここはどこだろう？

延々と続く純白の空間……。亜空間とでも言うのか、真っ白な世界は水平線が見えるまで真っ白だ。空も床もすべてが真っ白で、自分の存在が分からなくなる。純粋な白。それは何故かとても不気味に思えた。何も無い。不安と寂しさがこみ上げてくる。

ここはどこ？

人一倍寂しがりやな雛菊がその亜空間にたった1人で突っ立っていた。真っ白な世界に真っ白なロングT・シャツだけを着こんでいる。なにか異様な光景だ、白の空間に白の服、唯一違うといえば真っ茶色の長い髪、真っ黒な瞳だけであろう。

ここはどこ？

ここには自分の場所はない。ここには安曇や美貴や武藤や友一や……そして幾斗もいない。母も父も先生達もいない。まるで孤独の化身

のような場所だ。

ここはどこ？

もしかしたら、あれこそ自分の居場所ではないのかもしれない。こここそが私の居場所なのかもしれない。

そう思ったとたんに天上から、地平線から、大量の真っ赤な液体が流れ出してきた。床を紅に染めながら雛菊に迫って来る。真っ白だった世界はすぐにも真っ赤になり、赤い液体はすぐに雛菊の下へ届いた。形の良い素足が真っ赤に染まっていく……。液体は生温い、そして生臭い。まごうことなくそれは血だった。

人一倍怖がりな雛菊が叫んだ。

ガチャ

ドアが開いた音がした。その音で現実世界へ雛菊は引きずり戻されていた。怖い夢を観たためか、心臓はいつもの倍以上の速度で脈をうっている。もし自分が今人間なら体中が汗でビショリと濡れていたに違いない。しかし現在は猫なので体は濡れない…代わりに鼻がビショビショであった。

ドアの音がしたのだから、誰かがやってきたのだ。幾斗が帰ってきたのか…または幾斗の母か…

少しドキツとした。幾斗の母。幾斗が妹である露子に早く寝ろといった元凶。すこし体が恐怖し、露子のベットから降りるとリビングに通じる引き戸へ向かい、そこで隙間から様子をうかがう…誰が帰ってきたのか？注意深くあたりを覗くが良く見えない…しかたなく爪を出してから引き戸に引っ掛け、少しだけ引き戸を開けようとした。

ガラァー

引き戸を開かれた。無論、雛菊の力で開かれたのではなかった。あきらかに外部から強力な力で（猫にとっては）開けられたのだ。突然すぎる出来事に、高鳴っていた心臓は爆発しそうになる。

「なんだ、寝たんだと思ってた…」

聞き覚えのある声が頭上で響いた。まごうことない赤城幾斗であった。

まん丸に目を見開き、今にも壊れそうなくらい高速で心臓を鳴らす雌猫を幾斗は抱き上げるとリビングに連れて行った。

壊れそうなソファァーに腰掛けると、雛菊ねこの体にノミ取りグシを入れる。なんだか心地がいい…

ダメだ！心まで猫になりかけてる？

残念ながら？ノミは一匹も出てこなかった。幾斗はノミのいない元野良猫を珍しそうになでることになった。

さつきとは全然違う意味でドキドキしていた。雛菊だって健全な乙女である（多少ズレてるが）。好きな男に体を撫でられ飯をもらい・・・抱きつかれと、ドキドキの連続なのは当然である。読者諸君だって、猫になって好きな男だか女だかに拾われあれやこれやされるのを想像すればドキドキするんじゃないですか？今夜のベットでの妄想材料になったろ？（気にしないで）

つかのまのひと時：つかの間は永続きしないのが法則である。

ガチャ

また音が鳴った。古いドアが開く音が部屋中に響き渡る。幾斗の顔が一瞬硬直した。

赤と黒の混ざった色の髪の毛を揺らしながら、その女性は入ってきた。赤黒い髪は腰まで伸びており、つややかであった。前髪は長く伸びてすっぽりと右目を隠している。美しい肩を大胆に露出させ、谷間が見えるような黒いドレス。手にはドレスと同じ生地で作られた長い手袋をしていた。綺麗な人だ：雛菊はそう思った。どこことなく幾斗に似ている目、背丈は確実に雛菊より高く幾斗と同じくらいある。甘い香りのするタバコを吹かしながらリビングに入ると彼女はこう言った。

「ただいま」

どこことなく澄んだ声：それでも強大な威圧がある声だった。つまり怖い。幾斗は気に入らなさそうに彼女を見ると一言、言い放った。

「お袋…」

まぎれもない赤城ママであつた。

「雛菊？大丈夫？」

夜中、雛菊のママさんは雛菊の額に手をのせる。まだ熱い。熱を測つてもかろうじて下がっているもののやはりまだ熱がある。まだ汗をだらだら流しながら寝ている愛娘にもう一度声をかけると、雛菊は苦しそうに一言言つたのであつた。

「ニャー」

まるで本物の猫のような鳴き声だつた……

第26話：夢は時に現実となる。そんなことあったら俺は死ぬ。（後書き）

どうも、またまた続く！の形で終わってしまうことに深くお詫びいたします。もとより、猫になっちゃう非現実的なお話でしたが（コラ！まだ終わってないだろ）猫の視点で人を見るとは大変です。実際に経験したわけでもないですので、なぜだかベタに…いやもうベタベタになってしまします。赤城ママの登場、次回はもっと怖い人が出てきたりします。前々回の予告で幾&mp;雛の急展開なんていつときながら、こんなんでスミマセン「泣 もう、それしか言えません。やっぱ非現実的は難しい…もうメチャクチャ非現実的な簡単なもの…現実には非現実が混ざったなんて難しいです。

泣き言言ってるわけには行かないので、よければ次回にご期待ください。読んでくれた方には深く感謝します。コメント、感想、評価してくれた人、本当にありがとうございました。これからも、評価とかしてくれたらメツチャ嬉しいです。ヨロシクです。

では、長くなりましたがこれで…

あっ！キャラ人気投票やってます。よかったら投票してみてください。では…

第27話：学校には2つ穴のベルトをつけて行きますがなにか？

冬の色が濃くなってきた。まだまだ冬ではないものの、すぐそこまで迫ってきている気配があつた。

今年は冬が来るのが早い。大人たちは日常会話でこんなことを口走り、子供達もそれを肌身で感じていた。

10時12分16秒。北風があたりを吹きぬけ、一軒のボロマンションへとぶつかる。今にも壊れそうな姿をさらすそのマンションは、たぶん耐震強度もそれほどないだろう。地震でも来れば、すぐに壊れそうである。

そのマンションの前に、1台の高級車が止まっていた。周りの風景からはまったく合わない黒い車体が妙な威圧を持っている。ドイツ生まれの高級車は、メーターも日本車とは比べ物にならないぐらい数字が高い。そんな真っ黒な車体に寄りかかって、1人の男が煙草をくゆらせていた。

黒いスーツを纏い、長い髪をセットしているのにまるで自然になったかのように整えている。目は細く閉じていて、まるで寝ているかようであつた。手に持った煙草ケースには日本ではあまり見かけない名前のアルファベットが黒い色でケースに並んでいた。

「ここが彼の家？」

男はもう一度煙草を口に咥え主流煙を深く吸い込むと、口からため息のように静かに吐き出した。

吐き出された煙は、フワフワとあたりを回ると星が輝く空へと登っていく。

まるで、はやくその男から逃げたいかのように煙は空へと消えた。

「お袋・・・」

幾斗の言葉に赤黒い髪をした女性は少しばかり唇を吊り上げて、リビングの真ん中より少し東側にある大きなソファ―にどっかりと腰を落ち着ける。まるで我が家にも帰ってきたように。

「あのさあーお袋。なにげない顔してけどさあーココは俺の家なんだけど？」

幾斗が抗議の声を上げるが、彼女はまったく気にしていない様子だ。細長い煙草シガリロを咥えると、ライターで火をつける。

「幾斗。お母さんが帰ってきたんだよ？お酒ぐらいだしなさいよねえ？」

フーと甘い香りの副流煙があたりを漂う。その匂いとまったく正反対の念が雛菊ねこには2人から出てるように見えた。まるで龍と虎の戦いのようなのである。強大な威圧とただならぬ空気があたりを濁す。

2人の睨み合い。

あの怖い目つきの幾斗と互角・・・または互角以上の怖さを彼女は目から、身体から、放出していた。雛菊はもし、今人間だったら冷や汗をかいているだろうと自覚した。とにかく怖かった。

「はあ？」

「はあ？じゃない！あたしは客だよ？」

「ああ？招かざる客だろ？」

「なにが招かざるよ！」

数分間・・・雛菊には無限に感じたその数分間。幾斗と幾斗の母の口喧嘩は続いたが、結局幾斗が負ける？ような形で終わりお酒を取りに台所にいったん消えた。幾斗ママは勝ち誇ったように鼻を鳴らすと、深くソファ―に座りなおした。煙草シガリロから甘い香が立ち込め

る。

何故だろうか？どうしてさっきまで怖いと思っていた人に私は近づいているのだろうか？

「にゃあー」

不思議に身体が前に進み、彼女の足下に雛菊は歩み出ていた。雛菊の茶色い長めの毛は幾斗ママの美脚にフワリとあたり、まん丸に見開かれた瞳は彼女をしっかりと見つめていた。猫に気付いて、猫の首根っこをつかむと、そのまま引き上げ宙吊りにしてから幾斗ママは雛菊をまじまじと凝視し、台所からなにやらワインとグラスを運んでくる幾斗に対して幾斗ママは声を出した。

「幾斗！あんた猫なんて飼いだめたの？」

「ああ？・・・ああ・・・その猫さあー露子が連れてきてよあー頭のいい猫だぜ？」

「頭のいい猫？露子が拾ったの？」

「ああ・・・」

コポコポと幾斗がグラスにワインを注ぐ。お客用のワインであったが、たいしたお金の無い幾斗の家なのでごく普通に手にはいる素朴なワインだった。幾斗ママは幾斗の生温い返事を聞いてから注がれた紅色の赤ワインをゴクリと一口飲むと満足そうにニヤリと笑みを浮かべてグラスに残ったすべてのワインをいっきに流し込む。プハアーと息をもらしてから緩んだ唇をキリッと結び、唇についたかすかなワインを赤い舌をチロツと覗かせて舐めとる。

「そんなワインで満足げな表情見せるなんて、お袋も貧乏癖なおつてねえーなあー」

幾斗の皮肉めいた言葉に一瞬目を強張らせたが、1つ小さなため息をつく

「私は、今でも貧乏だよ。」

と小さく囁いた。その囁きに「ほお」と生返事を返すと幾斗は

「つーわけだからさあ、キャットフード代もかかるからもう少し仕送り増やしてくんないかなあ？」

と、とんでもないことを呟く。

「はあ？あんたねえ！バイト行つてんでしょ？」

「はあ…俺のバイトなんてなんの足しにもならねんだよ！」

「悠治さんとおさんの貯金があつたじゃない？」

「あれは学費、露子の未来のな」

そう言うとかエルの絵が描いてある貯金通帳を彼女に渡す。幾斗ママは貯金通帳にするどい目つきを通すと、小さな溜息をこぼすして机の上に通帳を置いた。

「ふう、贅沢はいけないよ！」

「俺のじゃねえー露子のだ！年頃なのに兄貴のお下がりの鉛筆とかさあー可哀想だろ！」

実際家計が厳しいときは鉛筆もペンも幾斗が使ってたけど使わなくなつたものが多い。

「・・・わかつた・・・1000円アップね！」

「んん？いやいや5000円だろ？」

「はあ？よし、1500円！」

「4500」

「2000！」

「4200！！！！！」

「2150！！！！！！！」

「！！」「！！」「！！」

壮絶な言い合い。最初こそ冷静だった2人は今は龍と虎の如く激し

い喧嘩をはじめた。が、雛菊ねじきにしてみれば、幾斗と同等に喧嘩できる人をはじめて見たので、どちらかというと新鮮な光景だった。しかし言い争いがますます過激になってきた瞬間に

「俺の家に来れば毎週1万はあげるよ」

そう誰かから声が上がった。今まで言い争っていた幾斗もお母さんもいつきに静まった。その男はリビングのドアに立っていた。ひどく細い目に長い髪が自然にセットされている。ピシッときまったスーツを着て口にはにきつい臭いの煙草がくわえられていた。その様子を見ていた雛菊はどこか怖いその男を見てゆつくりとソファの後ろに隠れる。あたりがいつきに静まり返った。雛菊にはその男の目がひどく冷淡にみえた。

「山下さん……」

「やあ幾斗くん」

煙草を啜えた口がニヤリとゆがむ。まるで火のように留まることを知らぬ幾斗がこの男の前ではやけにおとなしい。

「幾斗、実はそれを今日は言いに来たの、ねえ龍夫さんたつお」

やましたたつお 山下龍尾これが彼の本名なのだろう。山下は幾斗ママに相づちをうつ。

「は？あんたらが結婚すんのになんの文句もねえーけど俺は赤城の姓を捨てる気はないって何回も言ってるだろ？」

「でもねえ幾斗、あんたらもお金がなけりゃ」「うぜえ！」

幾斗ママの猫なで声を幾斗は一喝する。そして、困った顔を作る幾斗ママをみて山下は

「でも、お金に困ってるってさっきいったよね？」

「……」

押し黙る幾斗。山下は細い目の片方を少しだけ開いてかすかに苦笑した。

「じゃあ、決まりだな」

と山下が口を開いた。黙って動かない幾斗を少し見る、山下は部屋

を出て行こうとした。しかし、幾斗の声がそれを許さなかった。

「俺は…俺は…ヤクザになる気はねえ！」

山下は立ち止まる。ものすごい空気があたりを支配した。雛菊のひげはその空気に敏感に反応し、ピンと伸びていた。

幾斗ママも空気を感知取ったのかごくつと唾を飲んだ。山下の機嫌が悪いならば、良くて半殺しはありえる。

「……」

しかし、意外なことに山下はまたしても苦笑していた。

「そうか、残念だ。気が変わったらいつでもおいで」

と呟く。それだけだった。そして、幾斗に今週分の仕送りの封筒（仕送りはだいたい、この人が出してる）を胸ポケットからだすと幾斗の足元に軽く落とした。淡い微笑みを顔にてえながら山下は背中を向けた。幾斗ママも続いて立ち上がる。幾斗は足元に落ちている封筒をただひたすら見つめていた。まるで、死の宣告が書いてある封筒のように。

山下は帰ろうとした。そして、その瞬間雛菊は見てしまった。机の上に置かれた貯金通帳を山下がスリとったのを！

息を飲んだ、幾斗はまったく気付いていない。幾斗ママも何も言わない。今、何かを出来るのは自分だけだ！しかし、雛菊には自分がどうすればいいのかわからなかった。怖いという概念だけが自分の心を飲み込む。でも、でも…体は動いていた。後ろと前の足を上手に使い、放心した幾斗の横を通り過ぎ、今にも閉まりそうなドアを潜り抜け、2人の後をつけるように、いやつけて階段を降りた。追いかけるとも言う。2人はボロマンションを出ると、止めてあった黒々と闇に溶ける漆黒の車（ベンツ）に乗り込む。雛菊も車にすべりこもうとしたが、ドアを閉められてしまった。ごついエンジン音、闇が創り保ってきた静寂をその音によって乱し、最初こそゆっくりと走っていたが、少しづつスピードを上げて追いかける小動物をあざ笑うかのごとくエンジン音を響かせた。闇を引き裂く闇のように車は悠々と走り抜けた。

「あれ？起きた？」それが幾斗と私の初めての会話だった。中学のころから人付き合いが苦手で、あまり友達も居なかった私。寂しかった。羨ましかった。家に帰っても誰も居なかったし、学校へ行っても話す友達は少なかった。いやいなかったが正しい。会話は両親との電話か、必要最低限の生活会話だけだった。孤独だけが私の心を蝕んでた。でも、

彼は万人が創った私の孤独を、たった1人で壊してくれた。そう暗い暗い孤独という牢獄からたった1人で救ってくれたのだ。だからだろうか？恩返しでもするつもりなのだろうか？それともたんに彼を愛しているからだろうか？だからまるで、敵を狩る矢の如く、物を壊す砲弾のごとく私はかけているのだろうか？

漆黒の闇夜を真黒な車体を通り抜ける。時刻はかなりまわっているだろう、国道を走る車は少なかった。そして、珍しく通る車はやけに闇に映えた車だった。おなじ漆黒の色なのにだ！いや、だからこそだろうか？闇の中に溶け込む漆黒は強大な威圧と怪訝である。その車のやや後方を追いかける一匹の猫がいた。説明しなくとも、幾斗ママと山下の乗る車を追いかける雛菊ねこであった。

本来猫は、短距離タイプの動物だ。最高速度は実に60キロとも言われるが、出せるのはほんの数秒。長くても10秒だろうか？一方、車となればエンジンが健全で、燃料となるガソリンが入っていれば60キロなどというスピードは余剰以外のなにものでもない。

出そうと思えば100キロ以上だつて常時出せる。そんな人類の優秀ともいえる発明に、ついさっき猫になった雛菊がこの後、追いつけたのは奇跡に等しい。いや…ただ運がよかったのだろう。

「……………」

雛菊は少しビビッていた。そりゃ、車が止まった先が青海組とか書かれた暴力を生活手段とする人々の巣窟だったりしたら、だれでもビビルだろう。正直、ダッシュで帰りたいが正しい本音に違いない。ドアの前には妙に怖そうな男の人が2人ほど立っていた。正門から入るのは不可能だろう。もっとも、裏にまわったら誰も居なかった。ので、かすかに開いた窓に飛び乗り中に侵入する。その後、建物の中をグルグル回る。この建物は2階のようだが、上に上る手段は非常階段か、エレベーターしかないらしい。つまり、どうにかしてエレベーターに乗らなくてはならない。そう思い、この建物をグルグル回っているといかにも中年男性が重そうなダンボール箱を抱えてやってきた。チャンスだと思い、その男性の死角に入ると、雛菊の予想どおり男性はエレベーターに乗りこむ。死角に入ったまま雛菊も乗り込むと2階へエレベーターは動き始め、ほんの数秒で2階についた。

階段を作ってくれたらいいのに…

2階は4つの部屋に分かれているようだった。ダンボールを抱えた男性は手前の部屋に入っていた。でも、雛菊のお目当ての部屋はその男性とは別ほうこうだったらしくこっそりと男を離れると奥の部屋に向かった。雛菊のいつもより発達した耳は山下の声を奥の開け放たれたドアの内側に聞いたからだ。男性が手前の部屋に消えるのを確認してから奥の部屋に進む。隠れるものが少ない廊下を小走りで進み、声の聞こえるドアをそっと覗く。「山下さん、美穂さんとはいつ一緒になるんですか？」

部屋の奥には大きな机と高級そうな椅子があり、部屋の中央にガラス張りの小机、その机を挟むように向かい合った2つのソファーが

並べられていた。そのソファ―に座った男が奥の高級椅子に座った山下に話しかけているようだ。

「ああ…彼女の家には子供がいるんだが、息子さんがなかなか同意してくれなくてね」

「結婚に？ですか？」

「いやいや、俺の息子になることだよ」

「ああ・・・」

男は少し微妙な顔になると少し間をおいてから苦笑混じりで口を開くと

「さすがにね、お父さんがあなたじゃ」

「ああ…さすがに抵抗あるだろうな」

こちらも苦笑まじりで答える。

「マジメそうな子なんですか？」

そう聞かれて山下はポケットから煙草を取り出すと火をつけて、口の中で煙を楽しむと

「この辺のワルガキの蛇って知ってるか？」

「はい、たしかこの辺のワルガキをまとめてた…そいつが？」

山下は細い目をさらに不気味に細めると、煙草を啜えた口を吊り上げた。

「いや、その蛇を単身で倒したガキがいたろ？」

男の掻き揚げていた髪が額に少しだけハラリと落ちた。笑っている山下をみて男は口をすこしひくつかせるとポケットから煙草を取り出し啜えた。

「幾斗？幾斗なんですね？」

「ああ・・・」

山下も男もあとは何も言わなかった。妙な沈黙の中、煙草の煙を吹く音だけが部屋の中を駆け巡っていた。しばらくその時間が続き、雛菊は妙な思考を巡らしていた。不良に関わったことは少なくないが、自分が不良になったことはないし、興味もない雛菊に蛇が誰か

どんな奴かは知るよしも無かったが、幾斗が過去にやったことの大
きさは場の空気理解できる。山下の微笑や男の硬直をみても同じ
ことだ。

「そ…それでは私はそろそろ失礼します。」

そう言う男は立ち上がり部屋を出ようとして、山下も立ち上がり
見送ろうと外へ出ようとする。雛菊は慌てて廊下にあつた消火器の
影に身を潜める。出来る限り小さく小さく身体を丸めて動きを止め
る。山下たちの靴が接近するたびに心臓が爆破されそうになるがな
んとか耐え抜く。そのこうしている間に、山下たちはエレベーター
に乗っていつてしまった。

セーフ かなり危なかった！

少し安堵の溜息をつく、山下たちがいた部屋に駆け込む。検討は
つく、山下の座っていた椅子の前にある机！いつきにジャンプして
机によじ登ると机の上においてあるカエルの絵が描いてある貯金通
帳を啜えて机を降りる。しっかりと貯金通帳を噛み締めると、部屋
を出ようと走った。中央の小机を飛びこえて、ドアまで到達すると
エレベーターを目指す。腹に手がまわった。走っていた前足、後ろ
足が宙に浮く。その瞬間、雛菊の頭は真っ白になった……

きい

深い夜、雛菊のママさんは愛娘の眠る部屋に入ると雛菊の熱を測
った。まだ熱はあるが、昼間より引いている。もうほとんど能力を
失った熱冷シートを雛菊のおでこから剥がすと、新しいものに張り
替える。息もさほど荒くないし、明日には熱が完全に引いてしま
うかもしれない。そう思うと少し安心できたようで、かすかな微笑を

顔にたたえながら雛菊の上質なブラウン髪をそつと撫でた。

愛。愛だろう。子供を想う愛なのだろう。熱でうなされ、苦しむ愛娘が心配で心配でたまらなったのだろう。普段、仕事で家にいることが出来なく、寂しい思いをさせてしまっている。そんな思いにママさんは包まれているのだろう。ただ、娘が愛しいのだろう。どんな状況であれ、人は人を愛す。

「主人が死んで幾斗や露子の生活費、学費、に困ってから、私は死にもの狂いで働いた。夜も昼も、身体が動く限り働いてお金をした。そんなことしてたから、家には帰らない日が多くなつてね。とくに露子はまだ小さかったから悪い事したと思うよ。幾斗だって、優しいから何も言わなかったけど辛い思いをさせた。それでも、それでも働かないとあの子達に食べさせていけなかった。主人の死に、犯人を今でも深く恨んでいるんだよ。だって、それまでの生活が幸せすぎたから。でも、そんなの永くは続かなくてね。いつしか身体はボロボロになつてたよ。すぐに身体は倒れるし、めまいと頭痛が常時鳴り響くし。苦しかった、辛かった、死んでしまいたかった。なにより犯人が。犯人が憎かった。憎かった。憎かった。でも、どうすることも出来なかった。ボロボロになつた身体をどうすることも出来なかった。その時ね、彼はね・・・山下龍尾はね、たった1人で私を救ってくれた。お金とか、服とかも与えてもらった一部だけど、惜しみも無い愛を彼は私に与えてくれた」。前の主人には悪いと思うけど、今は彼が何よりも愛しいの。彼は不器用だし、あんな仕事してるから幾斗もああ言っただろうけど、優しいところもいっぱいあるの

走っていた。国道を走っていた。雛菊^{ななこ}は走っていた。夜道には車は少なく、人もいない。青海組の事務所から一度も止まることなく走っていた。あの、ボロマンションを目指して。

あんたは頭のいい猫だつて幾斗が言つてたけど、これほどとは思わなかったよ。本当にすごい。貯金通帳を取り返しに来るなんてね。でも、勘違いしないで、山下はあんたの主人^{いくと}を苦しめるためにこんなことやつてるんじゃないのよ。それは、幾斗はいやかかもしれないが龍尾さんだつて一生懸命なんだから。だから…

走っていた。冷たい冷たい夜道を雛菊は走っていた。

いい？猫ちゃん。愛つてのはイロイロあるのよ。私は子供達を愛してる、主人も愛してるし、龍尾さんも愛してる。深く、強く。わかってくれないのは残念だけど、やっぱり幾斗にも露子にも龍尾さんのことをちゃんと分かってもらいたい。そして、納得してもらつてから結婚したい。今はまだ無理でもいいか…いつか…。あなたも、いつぱい幾斗や露子に愛してもらい。

何故か涙が浮かんだ。猫なのに、涙が浮かぶのか？悲しいような、嬉しいような

貯金通帳、おとさないようにね。」

あの時、幾斗ママに捕まってイロイロ話をした（一方的にしゃべっただけです）。あの山下って人のことや、幾斗のこと、そして逃がしてもらった。だから私は落とさないように、自然に力が顎に入るのを感じてる。ただ、冷たかった。

幾斗の家のチャイムをならし、幾斗がピンポンダッシュと勘違いしている間に入る。そして、幾斗に貯金通帳をみせる。部屋はぐちゃぐちゃできつと探していたのだろう。幾斗は雛菊ねこが貯金通帳を持っているのをみて大喜びし、ひたすら猫を握ったまま万歳を繰り返した（アホだ！ 作者談）そして、雛菊ねこに喜びのキスをしてからソファーに寝転び雛菊を抱いたまま寝てしまった。雛菊の心境的には、抱きつかれキスされ、死ぬほど脈をはやくしなくてはいけなくなっていたとだけ書いておこう。そして、ソファーで寝転んでいる2人は今度こそ深い眠りに落とされた。

時間切れ

目をあける。手を見ると5本の指がちゃんとあり、足をみるとちゃんと人間の足だった。2足歩行もできる。髪もちゃんとあるし、顔に髭はない。

ひたすら爽やかな太陽の籠れ日や小鳥達のさえずりを聞きながら、雛菊は自分の部屋を出てリビングに向かった。いつもならないはずに雛菊ママが朝ごはんをつくってくれていた。ママさんは愛娘に気付くと「おはよう」と優しい微笑みをたたえて言ってくれた。

「おはよう、お母さん」

今自分にできる、精一杯の母への感謝と愛を雛菊はその言葉に込めた。

第27話：学校には2つ穴のベルトをつけて行きますがなにか？（後書き）

いやあ、みなさま大変おまたせしました。雛菊、猫になる　がやつと終われました。死ぬかと思った。

みなさま、コメント、感想、どうぞヨロシクです。

あと、応援してくださった人々、本当にありがとう。そしてこれからもヨロシクお願いします。

では、28話で会いましょう！ノシ

第28話：おい！馬鹿犬！頼むから静かにしろ！（前書き）

生きてる間に

もし、天国を垣間見れるなら

きっとあの瞬間ではないだろうか？

T・K・ねこたん 著

第28話：おい！馬鹿犬！頼むから静かにしてろ！

夕刻も近い、下校時間。

それは突然のことだった。

「おめーらどこのシャバ高？いつちよ前に学ラン着崩してんじやねーよ」

ブレザーを身にまとった数十人の不良に囲まれた青海高校の不良、数人は圧倒的な人数に睨みを入れられた。不良の世界ではよくあることだ。だが、少しもビビルことなく相手に言い返す。ビビッた奴は不良廃業である、と信じている奴等だからだ。

「てめーらどこに喧嘩売ってんのわかってんのか？」

「青海なめんなヨなあ」

青海高校不良達は睨み返した。その睨みはヤンキー独特のもので、相手を威圧しようとしてか、顎をあげ眼球を下に向けるものだった。自分たちより圧倒的に人数の多い相手に、ビビルことなく挑む姿はどこか自信をただよわせていた。そりゃー幾斗や武藤に喧嘩売ったことあるこのメンバーは、こんなブレザー不良数十人なんかより怖いものを知っているからこんなことできるのかもしれないし、たんなる馬鹿なのかもしれない。ただ、人数が人数である。肝が据わってるとかそんな次元ではない。

普通、高校生の喧嘩の勝率とはほとんど決まっている。それは、人数が深くかわり、1対1なら5割。1対2なら7割、1対3以上になると8割9割の確率で少ないほう負ける。現在の青海の不良たちの状況は5対15くらい。つまり1対3に等しくなる。勝率は1割2割そこら…

注 幾斗、武藤は論外で…普通の高校生とは呼べないからね

ブレザーの1人が殴りかかった。一瞬で間合いをつめ、ダボダボのコシパンスボンで動いたとは思えないほど素早い動きだった。ガードも避けることもできないまま、鈍い音と共に青海の1人が宙を舞い、後ろの仲間を吹き飛ばして転がっていく。転がった先にも敵はいて、顔面や足、手や腹に蹴りを食らう。仲間を助けようとした1人も羽交い絞めにされ、身動きできないまま殴られ、蹴り倒された。学ランのボタンは見事にひしゃげる。ほかのメンバーも鼻血を噴出し、無数のかすり傷を体に刻まれて、整えていた髪はぐちゃぐちゃになっていた。もともと、この青海のメンバーは青海不良の本隊ではない。以前、雛菊や美貴を殴った青海不良グループのリーダーが統べている本隊とは違い、その下っ端の分隊なのだ。もちろん、戦力もたいしたことないし、ずば抜けたリーダー格がいるわけではないので、敵さんの数に圧倒されてたちまち全滅することになる。

ブレザー集団は青海不良数名を真ん中に集めて囲う。それでもヨロヨロと立ち上がり、必死に抵抗を試みようとする青海。青海不良も殴りかかった、しかし、あと一步のところまでパンチを避けられ、その勢いで地面に転びそうになった青海の不良をブレザーは蹴り上げた。その一撃は腹へと突き刺さり、激痛を全身に伝えながら、転びそうになったのとはまったく逆のほうへと体の運動エネルギーを変更する。青海の不良は馬鹿ばかりだが、それでも徐々にわかりはじめていた。

こいつらは、人数もいるし、喧嘩の実力もあるんだと。

ヨロヨロと力の入らない足で震えながら立つ不良にブレザーの少年たちは軽い蹴りを入れて、再度、青海不良を真ん中に集める。そして、圧倒的人数で囲む。息を荒げながら、痛む体を仲間に残けあいながら倒れることを防ぐ青海不良達は最後のあがきをみせた。

「おめーら……んなことして覚えてるよ、てめーらカス高校と全面戦争じゃああ、本隊に20人は兵隊いるぞこらア！」

すると、ブレザーの不良達はニヤニヤしながら

「言ったな、なら青海と全面だな。決まりだ」

「こつちにはなー１００人はいるんだよ。」

「なんもしらず、全面とか言ってるじゃねーぞ」

ブレザーの不良達は笑う。青海を罵るように笑う。そして、なにか面白いことを思いついたように顔をゆがめると。

「てめーら兵隊だけがやられると思うなよ、青海皆殺しじゃ。もう２度とそんなかつこうも生意気な口もきけなくなるからなあ」

そして、蹴りを入れた。何発も何十発も…

「青海高校か…今度遊びに行くから、せいぜい２０人で頑張って高校守ってくれよあ」

そう言って、最後の一発をくらわした。

「さむ」

冬だ、もう冬に近い。

「有理数。無理数の用語を定義にあてはめて……
数学教師の柳原先生がいつものように数学の授業を行っている。そして、いつもと違うのは幾斗、武藤、安曇が真面目に授業をしていることぐらいである。は？あの3人が？」

「では、今日の授業はここまで、宿題は先ほど言ったとおりだぞ」
授業が終わり、休憩に入ると、氷漬けにされていたところを、解凍してもらったような声を3人は出した。

「死ぬかと思ったよー。授業があんなに大変だったとは……」

「たしかに……リアル死ぬところだった」

「まあー学園祭のためですから、頑張りましょう。」

そう、3日後にある学園祭（通称：青海祭）を補習で潰さないように頑張っているこの3人。高校になつてはじめて訪れる文化祭に心を弾ませる3人なのである。

「俺、中学のとき、出たことないからなー」

と幾斗

「私もー」

と安曇

「僕の中学は、学園祭というより歌を歌う発表会でしたから」

と武藤

いろいろわけあって、中学でのまともな思い出がない3人。高校こそはと思っているのだ。

そんな彼らを補習の心配が100パーセント無い雛菊と、何故か余裕な美貴が現金な奴らという目でみる。

ついでに、雛菊達のクラスがやる出し物は焼きそば屋と平凡で、仕組みもローションで店当番という、普通のものだった。このク

ラスは”やる”より”観る”の願望のほうが強かったようだ。ほかのクラスでは、お化け屋敷やメイドカフェ、迷路などがあり、その他、生徒会の出し物や各クラブ活動の展示や出し物がある。ついでに6人はクラブに所属していないため、雛菊を除く5人は焼きそばだけである。（雛菊は生徒会長だよ！）

「いやーマチで楽しみだわー」

と幾斗がほざき、武藤、安曇がそれに続く。

そんなどこか、ほのぼのとした1日。平和な1日。そんな1日で終わればよかったのに…

安曇、雛菊、美貴の3人の下校途中のことである。いつもなら不良2人とオタク1名がいるのだが、今日はいろいろあっていない。

（生徒指導室）

しょうがなく、3人で下校し高校の近くにある青海商店街を歩いているのだった。

「ね、会長さん。文化祭に赤城くん誘わないの？」

安曇の唐突な質問。

「へ？なにに？」

「だあーかあーらあー、文化祭で赤城と一緒に回らないのか？ってことだよ。」

美貴が説明する。

「へ？あつ…でも…その…迷惑じゃないかな？」

生徒総会の朝礼挨拶はあんなに堂々としやべるくせに、こういうことになるチキンと小心者になるとはどういうこと？

多少、安曇と美貴をイライラさせながら会話は進む。

「だいじょぶだって、赤城だってあんたと回りたいよ」

「そーだよー会長さん」

どこか、イライラを抑えてやさしい笑顔で接する美貴と安曇。

「そうかな？」

少し乗つて来る雛菊

「そうだよ!!! たぶん」

「そうそう、絶対そうだって！たぶん」

美貴と、安曇が最後の止めを刺す。しかし

「た……たぶん？」

しまった！つと雷撃に打たれる２人：たぶんという言葉に深く違和感を感じる雛菊。

「！！！！！！」

! ! !

ぎゃーぎゃーわーわー
 なんとらんたら宝船

そこに、大乱闘を繰り広げる3人に不意に近づいた4人の男女グループがいた。そして

「おお？お前ら、青海の生徒お？」

急な呼び止めに驚いて振り向く3人。そこには、ダボダボのズボンに、ゆるゆるのネクタイをしたブレザーの不良男子が2人、かなりのミニスカ、ゆるゆるネクタイをした不良女子2人が立っていた。

「どなたですかあ？」

不良慣れっこの安曇が臆することなくたずねる。

「どなたって？オメーらが喧嘩売った相手だよW」

不良は3人に飛び掛った…

「なー頼むよ赤城さーん」

いつか雛菊や美貴を殴った青海の不良グループの頭は幾斗と武藤にたかっていた。

「はあ？全面戦争？隣の不良高校と？勝手にやってればいいーじゃんか」

生徒指導室から出てきたばかりの幾斗は心底たいぎそうに押しつける。

「いやー人数が足りないんだよ」

「しらねーよ」

「そう言わないでさあー頼むよ。」

武藤も、幾斗も学校の事情なんか気にも留めない性格で、隣の高校が攻めてくるって言われてもいまいち「えっ！マジ？やったらーなー」という気は起きないらしい。そもそも、味方になってくれと言ってきた連中は昔、美貴や雛菊に対して暴力を振るった輩で、

先輩の癖に幾斗や武藤に対して下手に出るといふ情けないやつ（しようがない）なので…幾斗も武藤もあまり乗り気にも、やる気にもなれない。

だが、青海高校のメンツを奪われるわけもいかないので、不良グループのリーダーはしつこく協力を要請する。

「頼む。この通りだ。」

頭を深々と下げる不良。しかし、幾斗も武藤もまったくもって興味をしめさない。最終的には帰ろうとまでするので。

「まってくれ、絶対に負けられないんだよ！」

と、叫ぶ。そこで、一瞬2人は止まるが、振り向かず廊下を歩く。「おい！お前らの女になにがあってもしらねーぞ？」

その言葉に2人は歩みを止める。その言葉こそ、不良グループのリーダーの最後の一手だった。

「どーゆーことだ？」

幾斗が訪ねる。武藤も不機嫌そうな顔でリーダーを見る。その顔は、鬼の顔であった。鬼面。比喻にして、こんなにもあてはまる言葉があるだろうか？つてぐらい威圧と狂気に満ち溢れた顔。そんな顔を、リーダーに向ける。そこへ

「幾斗さん、武藤さん。大変ですよー！」

と我らがヲタク、佐山友一が駆け込んできた。携帯電話を握り締め、どことなく焦っている。

「あのさあー友一い、今、話中なんだよ。空気読めよ！」

幾斗が不機嫌な声を上げるが、友一は顔色ひとつ変えずに、

「それどころじゃねいんだから！美貴、糸河さん、会長さんの3人が、隣の高校の不良4人に襲われたそうですよ！」

えらくタイミングが良すぎると思った。しかし、あの不良グループの頭が言おうとしたことが少しずつわかってきた。

「それで？3人は無事なんですか？」

武藤も少し冷静さを失いかけているのか、どこか焦った声になる。

「はい。青海不良の数人が戦闘に乱入して救出されたそうです。」

友一の言葉に2人は肩をなでおろした。

「そういうことですよ、赤城さん、武藤さん。」

リーダーは言った。

「なるほど、それはそれはまたなんともいえねーぐらい、めんどうだな？おい」

幾斗が不機嫌に言ったあと

「でも、あの3人をお前の手下が助けてくれたみたいじゃねえーか？」

と付け足す

「俺らにも、青海のメンツがかかってっからさ」

リーダーは言う。

「よし、今日の礼に手伝ってやろっじゃなか。」

幾斗がそう言った。

「では、私もお手伝いしますよ」

武藤も続く。

「2人とも、怪我しないようにね」

友一が心配そうに言う

と・・・

「なに言ってたんだ？ユーチ？お前も行くんだぞ？」

「つて？ええええっええええええええええ？？」

「えええ！じゃねえーだろ？仲間だろ？連帯責任じゃねえーか」

「そんな、バカな話があるかよ！」

「友一君、がんばりましょうね」

「武藤さんまで・・・」

「そうと決まれば（ry

「そんなーそれこそ（ry

ゴホン

リーダーが咳払いを1つする。

「で、攻めてくるのがなんだけどさあー、文化祭の前夜祭真っ最中
つてとこだな」

リーダーの言葉に3人が哑然とする。

「てく、メーワクな野郎どもだ」

「せっかく、美貴と楽しい前夜祭がおくれると思ったのに・・・」

「本当に無粋なやつらですね」

3人は怒った。攻撃力が上がった。タラララッタラ

「でも、文化祭となるとこのことは安曇さん達には言えませんね。」

「そーだな、心配するだろうし、何よりまきこみたくないし」

「・・・なら僕も巻き込まないで・・・」

最後の、友一の発言に、怖い視線を向ける武藤と幾斗

「とにかく、あの3人にはバレるなよ」

今、大戦が始まろうとしていた！！

「本当に、びっくりしたよ」

安曇が声をあげる。美貴も雛菊も続く。

「てか、なんで青海北高校となりの高校やつらが喧嘩売ってくるわけ？」

美貴が不機嫌に言う

「とにかく、みんな無事でよかったね。」

雛菊が安堵の息を漏らす。

商店街を抜けて、それぞれ自分の家の方向に曲がらなくてはいけない場所にさしかかった。

「で？文化祭どうする？」

美貴が話題を戻す。

「私は、前夜祭を武藤君と2人きりで過ごそうと思う。」

安曇は言った

「私は、友一と過ごすから。」

美貴も言った。

「だから、会長さんも赤城くんをさそってみたら？きっと良いって言ってくれるよ。」

「そうだよ！赤城、誘わなかったらあんた、ポイジル（ひとり）よ？」

2人は、雛菊に詰め寄る

「そ・・・うだよね・・・」

「そうそう」

「そうそう」

2人はうなづく。

「わかった・・・勇気を出して誘ってみるよ！」

「おおおおおお！！」

2人から歓声が上がる。さっき、不良にからまれたことなんてこれぼっちも気にしていない様子のこの3人。肌寒くなってきた冬の空気に、3人のどこか幸せな笑い声が反響する。そこにあるけど、なにもない、気づけそうだが気づけない、重要なことがあるのにわからない。そういう状況に陥っている。それは、幸せである。知らず知らずのうちに、誰かに守られている。

冬は寒く、彼らの心は熱く、彼女らの想いは切なく甘い。

そんな、そんな文化祭がはじまろうとしている。

おまけ

「龍尾さん。幾斗の文化祭があるけどいく？」

「そうだな、好感度を上げるために行こうかな・・・」

青海興行の事務室で幾斗ママと山下の会話が行われていた。どこか威圧を感じる部屋だが、今の会話を聞いていたものがあるとしたら、その威圧もすこしだけ薄らいでしまっただろう。そのくらい、どこかほのぼのとしていた。

「でも、幾斗くんが文化祭ね・・・中学の頃の彼からは、想像もできなよ」

山下が、ため息のようなタバコの煙を口から吐き出す。煙はどこか寂しげで、ふらふらと浮遊すると、各地に霧散した。

そんな山下をみて、幾斗ママもタバコを咥えると、マッチで火をつけ、ゆっくりと口に吸引し、その味を楽しむ。

「きつといるのよ、幾斗にも・・・一緒にいて楽しいと思えるような人達がね・・・」

幾斗ママも山下に続いて、吐息のような煙を口から吐いた。

そして、彼女もまた、ただよう煙が霧散していくのを見送った。ただ、その目はどこか寂しげで、そしてどこかうれしげにも見て取れる・・・とても不思議な表情だった。

まるで、息子を想う母のように

第28話：おい！馬鹿犬！頼むから静かにしてろ！（後書き）

どうも、お久しぶりです。今回は不良小説っぽく喧嘩の話です。おとなりの青海北高校という不良高校が攻めてくる話ですね。前半ですが。次回は幾斗と武藤も動きます！そして、文化祭の前夜祭はいつたいどうなる！？雛菊、美貴、安曇の運命は？

そしてなにより、友一君が生きて帰ってこれるかどうか・・・w

作者へのコメント、感想、評価をできればお願いします。もらうとすごくよろこびます。

第29話：不良のくせになまいきだor2 注：破壊神は出ません（前書き）

いましめ

君はどこまでもさすらう気か。

見よ、よきものは足下にある。

ただ幸福をしつかりと？むことを学びたまえ、
幸福はいたるところにあるのだから。

作：ゲーテ

第29話：不良のくせになまいきだor2 注：破壊神は出ません

戦力とは数である場合が非常に多い。

無敵と言われたスペイン艦隊は、英国のエリザベス艦隊に数の差で圧倒され、無敵の名を奪われた。

青海高校の戦力とはたかがしれていた。戦力は2年生の不良グループとその分隊約30名、3年の先輩ヤンキー約6名と元安曇をいじめていたイジメグループの佐々木友美とその仲間のギャル12名、1年の武藤や幾斗、友一の3名。

数を合わせても約51名ほどである。対する敵高校、青海北高校は一学年に50人上、少なくとも150人以上の兵隊がいることになる…

戦闘は学園祭終了までの1週間に青海高校学区内での戦闘が行われ、防衛線が崩れ次第、敵は青海高校に雪崩れのごとく押し寄せ、青海を全滅へと追い込むだろう。平凡な高校である青海は大した兵力も集められずにいる。対する青海北は大兵力をそろえている。

負け戦

そんなこと、誰でもわかっていた。不良グループも、幾斗も武藤も佐々木や3年だって…

だが、抗うしかない。無罪の青海生徒や先生、校舎を巻き込むわけにはいかない。

戦うしかない。恋人や仲間を守るために。

学園祭4日前の出来事であった。すでに、青海北高と青海の中間地点にある、ゲームセンターでの戦い（人呼んで、ゲーセンの変）に大敗した不良グループは、生徒達にゲーセンに近寄らないことを伝える。もともと、あまり頻繁には出入りされていないゲーセンだったので、なんとかあった。が、もしもゲーセンから南下され、青海中央運動場ぐらいいまで制圧されれば、近辺で青海に通う生徒の数は通学が不可能になる。ゲーセン撤退以来、青海の士気はいつきに下がり、巻き返しが図れる確率は下がっていた。

作戦指令本部（校舎3階の空き部屋）の長は戦略ゲーム好きの友一が担当している。

「ユーチ、ゲーセンがやられたけどこのままじゃ、すぐに飲まれるぞ？」

幾斗がイライラと足を揺らす

「たしかに、そうですね」

武藤も若干不機嫌である。

「でもねえー戦力的に無理があるよ。戦略がどーとか言う前にね」

友一は友一で冷静に戦局を理解しているようだ。友一が何も思いつかないのも無理は無い。実際、ゲーセンの変の時にだって武藤と幾斗は参加していないものの不良グループ屈指の喧嘩名人たちが次々に倒されたとの報告が上がっており、青海は何の戦果も上げることなく撤退したそうだ。人数と実力を兼ね備えた集団が相手なのだ！

「とにかく、今は相手の出方を見るしかありませんね。」

戦略ゲームとはまったく違って違うリアルな戦い。こちらが動けばあちらも動く。単純な行動は厄介で邪魔になる。

友一は考え込んだ。たとへ無謀だとわかっていても、彼にも守るべ

き存在がいるからである。

当初は他人事だったが、實際話を聞いているうちに身の危険を感じ取ってきた。自分ならまだマシで、美貴に火の粉が飛ぶかもしれないと考えるとどこことなく憤怒が湧き上がる。美貴だけではない、安曇や雛菊などの親友兼恩人たちがそう易々と傷ついていい気分なわけがないのだ。

それなら、自分にできる最大限のことをしたい。

そんな気持ちで作戦指令本部長をやっているわけである。

だが、そううまくことにはいかない。

持っている脳みそのすべてをフルに活用し、策を巡らせ、効率的に高確率で戦争を勝利させなくては意味がない。

無力承知で全員、玉碎したとしても、それは形だけで、美貴たちを守るという目的を達成することはできない。

形などはいらない、確実に勝たなくてはいけない戦い。

そして、本来の玉碎の存在意義である時間稼ぎは、稼げども後方には味方兵力零といった絶望が広がっている。これでは、51名で玉碎して150人にことごとく敗れ去り、あとは野をかける狼のように、青海高校を蹂躪されるだけである。

友一は考えた。頭をフルに活用して。1TBのHDDをかき回すPCのように、持てる知識をすべて使い、策を練ろうとする。

そこへ

「青海運動場にて戦闘が勃発！」

不良グループの1人が駆け込んできた。そしてよからぬ報告を口走る「敵の数は80人上です」

敵兵力の半分以上。たしかに運動場まで南下すれば攻撃もたやすくなる。だが80は圧倒的だった。

報告によれば現在戦闘が始まっているそうだ。

不良グループの頭を先頭に計10人の仲間が死闘を繰り広げているとのことだった。

無謀だ、あまりにも無謀すぎる。

10対80？リンチの次元を軽く通り過ぎた圧倒的な人海戦術だった。

しかも、不良グループの頭が引き連れていたのは彼のグループの本隊ではなく、分隊の下っ端達であった。

たいした戦力ではない。頭がそれなりに強いとしても、いつものグループの力よりは劣るだろう。劣勢である。

絶望、そんな心境の中、もう1つの連絡が入った。

「大変です、青海小学校付近の稲妻神社に敵が集結中です。数はおよそ60上」

その他の兵力のようだ。しかも稲妻神社とは青海運動場より南にあり青海の学区内に余裕で入る。

これは、すでにその他と言うより、敵のメインはそこにあるようだ。稲妻付近で勝利すれば、孤立した運動場部隊を挟み撃ちできる。

あとは、守りに入った青海に攻め込む。

徹底している。

数もそれゆえの策も、徹底している。

「くっそ！武藤、お前は運動場へ、オレは稲妻に行く。」

幾斗はたえかねた。その声に武藤も軽くうなずくと

「わかりました。御武運を……」

「お前もな」

2人の不良はたがいに見つめあい、少々うなずきあうと、少々緩んでいた口元を閉め、完全なる戦闘体制に体を入れ替える。

言えば、これは2人の初陣なのだ。

空き部屋を出た2人はそれぞれ12人の不良をつれて自転車置き場へ行き、12台の改造自転車に2人ずつで乗り込みそれぞれ戦場へ向かう。幾斗を筆頭にした自転車連隊（6台、12人）は稲妻神社へ、武藤隊（6台、12人）は運動場へ向けて出発していく。

青海北から大切なものを守るためか？

校門を出る12台の自転車と24人の少年たち。彼らはどんな思いでこの門を出るのだろう。

そして、笑顔で帰還することができるだろうか？

作戦指令本部部長の友一は直接は戦地には赴かない。

指令長は、部屋で携帯電話を握り締め、結果を待つしかないのだ。

そんな友一は、少しずつ遠くなっていく自転車連隊をどこか切なげな目で見送った。

決してあつてはならぬ未来を脳裏に浮かべながら…

不良グループの頭である、山木戸直也やまきとなおやは仲間の不良たちと運動場の中央にある公衆トイレの障害者用トイレに籠城ようごうしていた。敵は約80人の大軍、味方は傷だらけで疲れ果てている。こんなスライド式のドアなど、今にも壊れそうである。鍵は閉めているがそれでも心配で、仲間は恐怖ゆえに力の入る手を必死にドアに当てて敵の侵入を防ごうごうとしていた。

「本部には連絡したのか？」

「はい、もうすぐ武藤さんが援軍にくるそうですが…」

はたして武藤達は80人相手に戦果を上げれるだろうか？

山木戸は不安であった。いかに武藤でも数に勝てるだろうか？

かの世界最大最強の戦艦も多くの雷撃機の爆弾の雨をくらい、撃沈されている。

山木戸の頭にはそんなことが浮かんた。今でも、スライドドアはゴンゴンと敵の蹴りか何かを受けているし、時折換気扇の隙間から水などを入れられるという精神攻撃をされたが、こちらが健全であることを示すかのように落ちていたホースを水道につなぎ逆のことをしてやったりしていた。

敵に包囲されている。

この籠城はいつまで続くか。

つらそうに息を荒げる仲間や、ぐったりと動かない仲間たちをみて、この状況のヤバさが伝わってくる。

なぜにこんな戦いを始めたのか。

ああ…分隊の奴らが肩に当たったからだっとな。

本当にくだらない。

そんなことで、こんなにも圧倒的な戦力を見せ付けられるのか？

「か…かしらあ…」

ドアを必死で守ってきた少年が呻くような声を発する。

その手はガクガクと震え、今にも手を離しそうだった。

「ああああ」

少年は精一杯力を入れる。

仲間の数人が立ち上がり、少年を手伝う。

ガコンガコンと蹴られるドア。借金取りに怯える人のようにガクガクと震える仲間。

本当にくだらない。なんで、肩に少しばかりあたったぐらいで…こんなことに。

くだらない。

本当にくだらない。

くだらない理由に漬け込んで、結局は内を配下に置きたかっただけだろう。

こつちが少数で、人員も不足していることに漬け込んだゆえの。やつらが欲しかっただけだろう。

くだらない。本当にくだらない。

ちよつと戦争の口実を作つて、戦いを正当化しただけだろう・・・
くだら・・・ない・・・い

だが、彼は気づいた。

それは、少し前、まだ、学校に不慣れな少女に肩をぶつけられ、気弱そうなところに漬け込み、カツアゲのネタにした自分も同じだった。

あの時、助けに入った生徒会長のあの少女はなんとかつこいいことだろう。

殴られても、殴られて目頭にいつぱいの涙をたたえても、自分に反抗してきた。暴力には屈しなかったあの少女はなんとかつこよかった。

くだらない正当化などには見向きもせず、現実を、実際に誰かが悲しんでいるといった現実をしつかりと見据えたその瞳は、いくら殴つても、脅しても、自分の意見をのんではくれないだろう。

そして、そんな少女を助けたあの不良。幾斗はなんとかつこいい存在なのだろう。（勘違い）

こんな状況になって、ようやく気がついた。雑魚で何もできない自分は、雑魚にしか相手にできない自分はなんともかつこ悪いのだろうか。

調子に乗っていたとかそういう次元ではない。

こんな状況で・・・いいや、こんな状況だからこそ気がついたのだろう。自分のやってきたことがどれほど恥ずかしい行いだっただかをくだらない理由で、いきがってたのは自分も同じだった。

肩をぶつけられたら、大丈夫かと尋ねる。これは普通のことだろうに。

なんとも恥ずかしい。山木戸は赤面を隠せずにいる。

周りでその状況を見ていた仲間たちはものすごく不思議な気持ちになった。

頭である山木戸は少しだけ大きく息を吸う。トイレ独特の臭いが肺を駆け巡るが、まったく気にした様子はない。

ドアの前で必死に力をこめて抵抗している少年たちの前に言って、
退くように支持する。

山木戸はドアの鍵に手をかけた。

「か・頭？何するんですか？敵が、津波のように敵が雪崩れ込んで
きますぜ。」

失敗すれば、敵はこの狭い部屋になだれ込むだろう。狭い部屋なの
で下手をすれば圧死だろうか？

だが、山木戸はその手を止めなかった。さっきまでの恐怖はその顔
にはひとかけらも残っておらず、ただどこか爽やかな笑顔だけがそ
の面に張り付いている。状況だけをみれば最悪だが、なぜかこの男
は恐怖をたたえていない。

なぜだ？

仲間たちは不思議だった。この数十分の籠城が、この男に何をもた
らしたかは仲間たちはわからなかった。

「ココは俺たちの青海だ、恐れることーなんもねえーだろーがあ？」

山木戸は仲間たちに言った。力強く。力強く。

もう逃げない。その男の瞳にはあふれんばかりの闘争心と、みたこ
ともないような誇りが漂っていた。

ゴツイ、プレスレットが巻いてあるその腕はなんの躊躇も無く鍵の
ロックを解除する。

ガチャリ

死の音。希望の音。戦いの音。

感じ方は人それぞれだったが、たしかに鳴ったのだ。ロック解除音
は外にも中にも響いたのだ。

そして、山木戸は開けた。パンドラの箱を。くだらない、憎しみや
嫉妬や、恨みが詰まったパンドラの箱をスライド式のドアであけた。

だが、忘れてはならぬ。パンドラの箱に詰まっているのは、なに
も憎悪だけではない。

最後に入っているのは希望だということ
は忘れてはならない。

幾斗隊が到着したのは、報告を受けた10分後ぐらいであった。6
台の自転車は、この神社へ続く長い階段の前に止められる。木刀、
バット、鎖で武装した不良たちの中心に、とくに武装した様子も無
い幾斗が先頭で歩いていく。

かなり急な階段ではあるが、さほど歩くのに支障は無いようだ。
幾斗の後ろを歩く不良達はどこか緊張していた。

不良が全員、喧嘩が強いわけではない。もちろん、本当に強い奴も
いるが、形だけの奴も少なくは無い。

不良のようなかつこうをするのは一種の威嚇である。

カマキリが敵に出くわしたら、釜を広げ、羽を鳴らし、敵を威圧し
ようとするあれと同じなのである。

幾斗との後ろの少年たちはそれに近いのかもしれない。

喧嘩はそこそこでも、自分の喧嘩力に自信を持っていないものは多
い。

ましては、相手が大兵力、圧倒的な力を有しているとしたらなおさ
らであろう。

階段に積もった石がコロリと落ちる。

もうすぐ頂上だ、広場があるがそこは60人の大軍で埋め尽くされているだろう。

不安だが、いつものヤンキー歩きの手取りは変わらない。

仲間の1人が緊張をほぐそうとポケットから煙草の箱を出した。口に咥えて火をつけようとする。

「やめとけや、喧嘩する前に煙草はよくないぞ？」

幾斗が顔も向けずに言う。その背中を見上げてから、口に咥えた煙草を震える手でケースに収める。

コツコツ……

階段を上っていく。

コツコツ……

戦場へ上がっていく。

そして、やっと頂上が見える位置まで上った。

そこには想像通りの光景が広がっている。

広い神社の広場に数十人のブレザーヤンキー達が群がっている。そして、そのまっすぐ奥には階段に座り込んだ、周りの奴とはまったく違う空気を醸し出している男がいる。

奴がこの稲妻神社進行軍の隊長だろう。

幾斗は仲間に耳打ちした

「あの中央の男を倒せば、くずれるぞ」

仲間たちは軽くうなずく。そして再度、幾斗の顔を見ると軽くうなずいた。

ブレザー達も立ち上がる。舞台は戦場になっていた。

風は冷たく、が不良たちの魂は熱く。

くだらないことで引き上げられたハンマーが装填された幾斗という超絶弾を撃つ。

この瞬間こそが、青海最強の不良の力がもろに出た瞬間だった。

かつて、青海周辺でおこった2つの暴走族の抗争。その抗争を見事に粉碎せしめた、青き稲妻。

幾斗が飛び出す。一瞬で間合いをつめると、手始めに目の前の男を

ぶち殴る。胴体ごと飛んでいく相手を最後まで見ることなく、幾斗は次の相手にかかった。

ほかの不良たちも攻撃を開始する。なにやら叫びながら、バットや木刀を振り回して攻撃する。

幾斗の突然の襲撃にうろたえるブレザー達は、そのままやや後ろに引きながらも、攻撃態勢を崩そうとはしなかった。

そんな敵を、眼下に捕らえたら無事では帰さないのが幾斗であった。目の前の敵を片っ端から殴り倒し、後方に回った敵に殴った遠心力でさらに殴る。幾斗に近寄った不良達は強制的に半径3メートル外に吹き飛ばされる。

そんな幾斗の蒙闘っぷりに空気の流れを乗せて、青海の不良達は徐々に徐々に戦いを有利に進めていく。とどまることを知らない蒼髪そうはつ蒼炎の幾斗を戦闘に、青海高校は前進を続けた。目指すは敵将。壇上の偉そうな奴！

幾斗が神社の砂利だらけの地を蹴ったかと思うと、軽々と数メートル前まで前進し、そこで構えていたブレザー野郎を2人まとめて吹き飛ばす。崩れた隙について残り5人の青海も適当な奴にたたみ込みをかける。

また一步、敵は退いた。ジリジリと。

「群れててもこの程度か？カスが！」

幾斗の後ろにいた不良が一言そう言う。幾斗はすこしだけ怪訝そうな顔をその少年に送ったが、すぐに前方に顔を戻す。

そこで、たえかねた敵の1人が鉄バットを持って幾斗に飛び掛った。喧嘩に強いといっても幾斗は人間だ。まともに食らえば死ぬ。

うおーと雄たけびを上げながら、幾斗へ狙いを定め、バットを振り下ろす。

残念ながら、幾斗にはバットはあたらなかった。幾斗が相手の利き手を蹴り上げ、手首をひねった相手はバットを放してしまった。カランカランというむなしい音だけが神社を支配する。

「いい加減たいぎいだろおーが。そこで偉そうに座ってる野郎。下

りてきて俺とタイマンはれ！」

幾斗が壇上の男にそう呼びかける。ブレザー達は一瞬、男を見た。男は少しばかりニヤニヤと笑みを浮かべて。

「俺はたいぎくないねえ。自分でやるより、見てるほうが好きかもねえ。」

そう返答してきた。幾斗はたいそう不服そうに男を見上げる。本当にたいぎそうな目つき。

めんどくせえ……

幾斗は心の中で、そう呟くとまた戦闘体勢に入る。幾斗が入ったと同時に敵も一斉に突っ込んできた。

またもや神社は少年たちの雄たけびと、殴りあう音と、何かがあらぬ方向に曲がったような鈍い音が混ざり合う。さきほどとなんら変化もなく幾斗は眼下に入った敵を容赦なく吹き飛ばす。木の棒で殴りかかった奴は幾斗の蹴りで棒を粉碎され、バット、木刀ならば手からもぎ落とされて、素手でかかったならば、拳が幾斗にかする間もなく変な方向に投げ飛ばされる。

止まらない幾斗を見ながら壇上の男はクスクス笑っていた。その行為がさらに幾斗の機嫌を悪くしていた。

ブレザー不良達は、だんだん幾斗に飛び掛っていくことが無意味に思えてきたのか、飛び掛るのをやめてジリジリジリと後ろに下がりはじめた。壇上の男はそんな光景を見てもニヤニヤと汚らしい笑みを浮かべ、なにもせずただ青海と青海北の戦いを見ていた。

だが、戦意を喪失しかけた仲間を見て、少々焦りを覚えたのか、男は仲間に関心を耳打ちした。

男の言葉に頷き、ブレザー達は急に幾斗から半径7メートルほどまで離れて下がり、距離を取った。

「死ね、青海の薄汚いドブ猫め！」

男が放った言葉と同時に、こぶしほどの大きさの石を幾斗に向かって1つ、男が投げつけた。

軽々と身をひねり、その石を回避すると、得意げに壇上の男に向か

って幾斗は笑った。

「そんなんじゃ死ねないよ。」

男は黙ってる。幾斗はさらにかまってやろうとした。口をまた開く。
「そもそも俺を倒そうなんて……?!」「ゴン」!!!???

ただ、頭がヒリヒリと痛む。どうやら石が頭に直撃したようだ。誰だ？幾斗があたりを見回そうと顔を上げた瞬間、一斉に敵から石の雨が降ってきた。さすがの幾斗もよれない。打ち所が悪かったら軽く死ねる。とっさに頭を手で覆って、ガードするが、手や足、腹にはもろに石が直撃する。

動けないのは他の奴も同じで青海はみな頭をガードしてるか、もう直撃して伸びてるかであった。

幾斗は初めてそこで動きを止めた。攻めが得意な幾斗が防戦に回っている。というより、防戦以外は無謀という状況。

ガスガスと直撃する石たちは無残にも幾斗の腕の皮を剥ぎ、足や腹に痣を残そうと強打を加えてくる。雨はやまない。

そこでチラリと壇上の男が目に入った。男は石を持って大きく振りかぶると、石を投げた。ビューンと風を切る音がしたと思うと、幾斗の腹部に正確に打ち込まれた。

その石は他の雑魚とは違った。速度も正確さも、そして強さもまたく別格である。防戦で動けない幾斗に正確に打ち込まれた石は、幾斗に激痛を腹から広がるように走らせ、あの幾斗を後方にのけぞらしたのだ。思わず、床に伏せてしまふ。こみ上げてくる吐き気。だが容赦なく石の雨が伏せた幾斗の背中にゴンゴンとヒットする。苦しみながら幾斗はもう一度、あの男をみる。そこには想像した通り、下品な笑みを惜しげもなく披露した男が気持ちの悪い視線を送ってきていた。

頭に血が上る。あの顔をみたら、もう殴らずにはおれないといったように、幾斗はそっと立ち上がった。ガードもせず、石の雨も気にしなくなっていた。走り出す。目指すは壇上のあの男。目的は壇

上のあの男を殴ること。それ以外、何にも考えれなくなった。どんなに石が幾斗を叩こうと、まったく気にせず、前進した。

とどまることを知らぬ蒼髪蒼炎の名が帰ってきたような気がした。石石石石・・・ぜんぶ受け止める。そして進む。今なら足をもがれても進み続ける気さえする。

そして地面を蹴り上げた。壇上まで飛び上がる。敵は、男は目の前。拳に力を入れ始め、敵の顔面を正確に狙う。あと2センチでこの男は殴られる。宙に浮いた幾斗は全体重を拳にかけてついに相手に殴りかかった。

突然、目の前に大きな黒い塊が見えた。直後、腹部を何かに押されたようになり、その押す力が前に落ちようとする幾斗の力を上回り、幾斗を後ろに吹き飛ばす。吐き気がする。目の前が真っ白になる。さっきまでとはまったく別の。言うならば幾斗は地面を蹴った場所に回歸していくような形になった。しかし、体勢が悪く、背中を地面で強く打ってしまった。せきが自然とこぼれる。肺が圧迫されたのだろう。またひどく腹部が痛む。一般に言う溝に入ったのであろう。幾斗はそこで戦闘能力を失った。

汚らしい笑みを浮かべながら男は幾斗を壇上から見下ろした。さげすむような目線、優越感に浸る唇。

最後にトドメをと思ったのか、男は落ちていたやや大きめの石を持ち上げた。

武藤のチャリ連隊が青海運動場についた時、そこには驚くべき光景が広がっていた。報告によると、山木戸をあわせた不良達はトイレで籠城していたはずだ。なのになぜ、今、彼らはこんなにも勇敢に戦っているのか。

山木戸は顔から鼻血をダラダラと流しながら数人の相手に蹴りを加えていたし、正規のグループメンバーでもない雑魚な不良達までもが山木戸に同調したのかかくも勇敢に戦っていた。無謀という言葉が良く似合うはずのその光景だが、なぜか見ている武藤や仲間達にまで闘争心が強くなるのを感じる戦いだっただ。

「たった1人に何やってる！」

敵の1人が山木戸にひるむ仲間にかんだ。奴らには戦力としてみなされているのが山木戸だけなのだろう。だから1人なのだろう。だが、

「はあ？こつちには10人いんだよ！ナメんなあ！」

鼻からドロドロと流れた血は山木戸の唇に触れて唾とまざり、山木戸の声とともにあたりへ飛び散った。滴り落ちた血は山木戸の学ランを染め始めるが、本人はまったく気にしていない様子だ。

彼の言葉に、仲間達が静かに頷く。

団結。彼らは団結した。願わくばもつと平和的な団結を望んでいたに違いないだろうが、とにかく彼らはここで団結したのだ。

「俺らの地元でワヤすんのやめてくんねえーかなあ？さもねえーと俺ら10人で全員シメてやんぜえ」

山木戸がとどめの言葉を吐き捨てる。その気迫に押されて、敵の人数がのけぞる。

「ふざけやがって。調子にのんなよ？ たかだか10人で」

数で物を言わせてくる青海北は、なんの気迷いもなく10人を見やる。

たった10人。しかも戦力は山木戸1人。負けるわけには行かない。人海戦術を使えば、こんな奴らどーってことない。

「10人？ 数え間違えないでくださいね。16人です。」

どこからか口が挟まれた。援軍に駆けつけた金髪ピアスの丁寧な不良は、さわやかな微笑を浮かべながら青海北の連中に言ったのである。

だがそのさわやかな微笑一転し、鋭い目つきになると青海北に向かって行く。切り替わったのだ。

やわらかで優しい一般的な彼の顔からは想像もできない強面。さわやかなはずの金髪が金獅子のような威圧に化ける

「安曇さんに何かしようとしたらどうなるか、教えてあげますよ。」

その言葉を合図に武藤が敵に突っ込んだ。武藤の後ろに、味方の不良少年5人が続く。

まるで戦国時代の合戦のように両者が正面から衝突する。

木刀、バットを持つ敵に対し、武藤は素手でかかる。最初とはび蹴りを放つ。前方の1人がやられ、吹き飛び、それによって後ろの数人も倒れる。

「お話にならない方はひっこんでくださいね。」

武藤が少しだけ微笑を取り戻してから言った。

「ちょーしこいてんじゃねえぞ、コラああああ！」

武藤に対して手持ちのバットを振り下ろす少年。だが、武藤にはあたらなない。まるでダンスでも踊るかのように軽やかにステップを踏んで、バットをかわし、その勢いで背後に回り込む。焦って振り向いた相手は顔を殴られて倒れた。

「耳が遠いんですね。もう一度いいますよ？ カスは引っ込んでてく

ださいね。」

武藤の言葉に青海北の不良が頭に血を上らせるが、今やられ、地面でのびている奴の姿が一瞬目に入り、少したじろぐ。

武藤の仲間の不良、数人も武藤の作った勢いにのって、それなりに奮闘していた。

たった1人の強大な存在感が、自信となり、勇氣となる。

俺達にはあの人がついてるんだ！

武藤に向けられる信頼。そしてその信頼に答えるほどの圧倒的な力。両者は均衡を保ち、青海の喧嘩の流れをつくりあげていた。

「武藤、来てくれて助かったぜ。」

山木戸が武藤に言う。鼻血をダラダラとたらした顔は痛そうだったが、その顔には笑みが覆っていた。

「なに言ってるんですか。なかまでしょ」

武藤が言う。山木戸も照れくさそうに笑う。青海北の不良は、青海を囲んではいるもののうかつに手を出せなくなった。

金髪ピアスの敬語野郎

武藤勇氣の存在と、山木戸の思い切った行動に北は若干戸惑い、焦り、戦闘への集中力が極度に低下し始めている。

青海中央公園の何も無いグラウンド。2つの高校に通う不良達。

「さて、山木戸さん。そろそろ片付けませんか？」

武藤がニヤリと笑みを浮かべる。山木戸も血をぬぐうと首を縦に振って了解の合図をする。

他の14人の不良たちも、それぞれ頷いたり、拳を握ったりする。

「おっしやあああ、行くぜええええ！」

武藤の掛け声と共に、青海高校はいっせに飛び掛った。

目の前では敵の大將的存在の男が伸びている。こんなチャンスのがすわけにはいかない。

壇上の下で延びている、幾斗を見下げて男はとどめの一発を放とうと決心した。

「悪く思ふなよな」

少々、下品な笑みを浮かべ男は足元に置いてある大きな石を持ち上げた。

投げる必要は無い。これほどの重量を持つ石をわざわざ力を入れて投げれば、逆に的是はずしてしまうのである。

かるく力を入れて、ほとんど落とすだけでいい。あとは重力が石を幾斗まで届けてくれる。

壇上からあたりを見回したら、仲間達も石を投げ、青海高校の不良は大半が全滅していた。

これで終わりだ。

稲妻神社陥落を完遂すれば、中央公園に進撃してる奴らと合流できる。あとは、青海を挟み撃ち。

そこで転がってる蒼髪の少年も、喧嘩は強いみたいだが、これで終わりだ。

男はズシッした重さを感じながら石を持ち上げる。石についたコケが彼のブレザーにハラハラと落ちるが気にしない。

「青海北に喧嘩を売ったこと、後悔させてやるぜ。」

石を持ち上げた。ああ、重い。さっさと落としたいに違いない。

周りを針葉樹林で囲まれたこの神社。神主もここ数年みつかからないらしい。

だからわざわざ戦場を選んだ。

地元不良との戦いで怖いところは地の利を生かされることである。だが、今回は関係ない。ここは人数も、戦法も、北が勝っている。そして手を離す。ゆるんだ笑み、汚らしい目。幾斗が倒れたままこ

ちらを見ているのが見えた。

ああ、かわいそうに

そうは思っもの、男は躊躇^{ちゅうちゅう}しなかった。

終わりだ。

そして……

激痛。体が反応できない。男は笑みをこぼしたままだったが、顔の右側。耳の少し前あたりにひどい激痛を感じた。

あまりにも唐突なことに、体が反応することができない。

自分の体がどうなったかもわからない。

手に持っていた石は、手から滑り落ち。幾斗とはまったく違った場所に落ちた

よろめく体をなんとかささえ、何が起こったのか頭の中で整理を始める。

いったい、何が？

だが、考える暇もなく2発目が来た。次は首の根元やや上。

また3発目。今度は額。

どうやら壇上から見て右側から何かを飛ばしているらしい。しかし、次の1発で男は地面に倒れてしまった。

仲間達も気がついた。右側からなにかを投げられてる。いや、撃たれてると。

全員が右側を向いた。必死に敵を探す。

しかし、事態はそう単純ではなかった。

右側をみた北の不良達の後頭部に激痛が次々に走った。その射撃の正確さは、驚くべきことであつた。

ほとんど全員、同じ場所にあたるのだ。

1人の少年が気がついた。

さつきから痛みをさそっているものは、なんとただのBB弾である。と、今度は左側に集中しはじめると、右から小石が正確無慈悲に飛んでくる。小石やBB弾がここまで強力な武器になるとは不良達は信じられなかっただろう。

そのうち、あまりの痛さに耐えられなくなった奴が逃げ出していく。逃げるといふ空気の流れが出来てしまい、不良達はあるための階段に殺到する。

逃げる間も、神社の敷地を出るまでは容赦なく発砲が続けられた。北の数人は、小さな痛みが延々と広がるBB弾とくゆうの痛みに涙し、泣きながら走り去っていく。

情けない下っ端をなんとか起き上がった男は壇上からみていたが、やがて仲間がほとんど出て行ってしまったところになって我に返る。血だらけの幾斗がおぼつかない足取りで立ち上がるのとそれは同時だった。

幾斗は驚いた・・・

幾斗が目をさますと、そこには不思議な世界が広がっているでわな
いか。

俺が眠ってる間に、幾千年も過ぎていたようだ・・・というオチ
はありません

幾斗が目覚ますとそこには不思議な光景が広がっていた。

壇上の男は倒れ、周囲の敵は拡散、すでに逃げ始めたものまでいる。
仲間のだれかがうまくやってくれたのか？

と思って後ろを振り向いてみたが、仲間は全員そのへんでのびてい
る。

何かに怯えて逃げまとう敵

味方は全滅しているのに・・・

だが、迷うことはない。体はそこらじゅう痛むが、なんとか立ち上
がれる。

丁度、壇上の男も幾斗が復活していることに気がついたようだ。

男は幾斗を見て、その目を驚愕に染めたが、すぐに目をそらし逃げ

る仲間を追うように自分も逃げようとした。

「させつかよお！」

今度は幾斗が落ちていた小石を逃げる男の足へと投げる。多少狙っていた位置とはズレたものの、当たった。

足に石を食らって無様にこけた男は少々そのままの体勢だったが、意を決したのか落ちていた鉄パイプを拾って幾斗へと向く。

その目は殺気を帯びていたが、幾斗はそんな男をみても動じない。むしろ呆れているような顔つきだ。

「てめえ、ぶっ殺してやる」

幾斗の顔を見て、男はすこしすごんだ。

そして、落ちていた釘バットを幾斗に向かって投げつける。グルングルンと上下に回転しながら幾斗へと近づく

風かすり抜ける透き通ったような音とともに飛来したバットを幾斗は軽く身をひねってかわす。

が、これが狙いだった。かわしている、この一瞬の時間に男はいつきに幾斗との間合いを詰める。

当初、お互いの距離は5メートルはあったが、一瞬にして2メートルまで迫った。

鉄パイプの長さが約1.5メートル。幾斗は射程圏内に入った。

男は軽くパイプを振りかぶると力を手首に入れて、パイプを幾斗に向かって押し出す。透通った風鳴りがパイプの速度を表す。

「しねクソがきやあ！！！」

だが、パイプが幾斗に致命的ダメージを与えることは無かった。振り下ろしたパイプは幾斗の片手でつかまれ、静止していた。

射程圏内とは決して自分だけのものではない。自分が射程に入ったということは、相手からみても自分は射程に入っているのだ。

おぼつかなかったはずの足を力強く踏み出し、幾斗は拳を男の腹にぶつけた。

くの字に折れ曲がって飛んでいく男。その長めの髪は乱れ、汚らわしかったあの笑みはすでにどこにもなかった。

数メートル先で地面に落ちて、そのまま気絶してしまった。
終わった。

青海戦争稲妻神社の変　ここに終結せん

「ずいぶんとかっこいいことで」

声がした。聞き覚えのある声がしたと思うと、神社を囲う林から1人の女の子が出てきた。

後ろで結んでクルンとカールした髪、白い肌、少々無表情な顔……

「露子？」

赤城露子。幾斗は妹の名前を口にした。

「おにいちやんがここで喧嘩していると、友達に馬鹿にされました。」

と少しむつとしながら幾斗に告げる。

「なので、やめるように言いに来たらこのありさです。なので仕方ないですから周りの三下は私達が片付けました。」

そう言うとき露子は手に持っていたバチンコを見せる。どうやら敵はこれに怯えていたようだ。

「そうかそうか………私達？」

幾斗が露子の発言の文脈で納得できないところをもう一度尋ね返した

「私もいるんだけど？^{いくあに}幾兄。」

声とともに今度は露子が出てきた場所と反対方向の林から女の子が出てきた

長い天然パーマのかかった髪、どこか得意げな顔、小柄な体

「龍子？おめえーもバチンコ？」

糸河龍子。露子の幼馴染にして親友である……安曇の妹。

「ちがうしー。龍子はあーコレ」

そう言つて、手にしていた恐ろしい物を幾斗に見せる。

「？……！！ちよっ……おまww」

それは龍子の身長のお分の2はあるだろう、ライフルであった。コッキング式、銃身以外は木で出来た第一次世界大戦に出てきそうな

見栄えは旧式の銃。

だが、銃身の上に乗ったスコープや、それにさっきの戦闘で逃げま
とつていた敵の顔を思い出せば強力な銃なのは間違いない

「エアガンか？」

「NO。ガスガンだよ。」

ヘリウムガスを圧縮して力にし、その力を使ってBB弾を撃ち出す
銃。たとへおもちやといえど、危ない代物であろう。

注： ガスガンは年齢制限があります。ガスガン、エア
ガンなどは決して人に向けて撃たないでください。

露子のバチンコ、龍子のライフル。2人の小さな狙撃手^{スナイパー}によって青
海はなんとか勝った。

60人の不良をたつた6人（龍・露子コンビをあわせれば8人）で
倒したのだから大勝利といっても言い過ぎではないだろう。

「それにしても、オメーらの射的能力はすげえーなあ」

幾斗が本心から感心したように言う

「半分以上気絶しててみてないくせに・・・何を言っているんです
か？」

と冷やかな言葉と目線を妹から送られていた。

「本当に・・・私達がいなかったらどうなっていたことか」

と、少しだけ心配の色に目を染める。

「ああ、今回ばかりは助かったよ。オメーらには感謝してるよ」

幾斗は頭をかきながら無造作に言う。

「ならさあー今度、ステーキおこれよ！」

龍子が口を挟む。

「むちゃ言うな！家には、んな金ねえー！」

貧乏な幾斗の家にそんなお金はないです。はい

とにかく、幾斗とその仲間達は稲妻神社を死守に成功した。これで
敵の進撃は遅れるだろう。

武藤から何の連絡もないので、あっちもあっちで援軍無しでもやっていけるのかもしれない。

少し前向きな考えを頭で構想し、ひとつ安堵のため息をつくとき、幾斗は立ち上がった。

絶望なんて、切り抜ければこんなにもすすりしているものか。数だあー戦力だあー関係ないのかもしれない。

とにかく今日は勝った。明日、明後日、どうなるかわからないが、今日は無事に帰れそうだ。

体を動かして火照った幾斗の体は外気に触れて温度を弱め始めた。もう冬だ。

戦闘終了後学校に戻ると武藤、山木戸達が少々傷だらけだったが、笑顔で幾斗達を迎えた。

やはり、武藤、山木戸もあっちで一暴れしてきたみたいだった。

今日は勝った。80人、60人、そんな数字で怖気づいてはいけないのかもしれない。

無謀？いや、怖いもの知らずなんだよ。

だが、喧嘩を目撃していた近所のおばちゃんが高校生が喧嘩していると学校に通報したこともあって、幾斗、武藤、その他諸々は後日生徒指導室に

送られることとなった。それに加え、わりとおしゃべりな性格の龍子（安曇の妹）によって安曇に喧嘩についてもれてしまった。

当然、そのことは雛菊、美貴の耳にも入ることになったわけだが・
・・。

「はあ？おめえーらはアホかあ？」

青海北高校の裏庭で、この学校を仕切る幹部達が頭をそろえていた。

「何十人も頭そろえて、何返り討ちにあつてんだよ！」

その中でも、ダントツ偉そうな男が色落ちした古いドラム缶に腰を下ろしている。

「てめえーらにはがっかりだ。負けそうだったら逃げんのか？玉碎しろ！何、平気なツラでノコノコ帰ってきてんだ！」

男はそう怒鳴り終えると、煙草を啜えた。隣の男がライターを出し偉そうな男の煙草に火をつける。

濃い臭いを撒き散らしながら、男はゆっくりとため息をつく。

「どんな奴にやられた？」

「はい。青い髪の男です」

「俺らは金髪の男です」

青い髪？男は少々いぶかしげに眉をゆがめると

「はあん、幾斗かあ。それなら、お前らが返り討ちにあつたのもわかる……か」

「蛇さん、知ってるんすか？」

蛇と呼ばれた男は、ドラム缶から立ち上がった。

「ああ、知り合いさ」

蛇はそういい捨てると、もう一度タバコを深々と吸い込む。有毒な

ガスが肺を黒く汚す感じがする。

「よおし、白龍爆走連合に連絡しろ。青海一掃に付き合え、青海はオメーらにくれてやるってな」

はい。と1人が返事すると校舎に去っていった。この男は隣町、宝美町の暴走族を従えている。そして高校どうしの喧嘩に、族を利用しようとしている。だが、文句を言う奴はいない。それだけの力がこの男にはあった。

「幾斗かぁ、今度こそぶつ殺してやるぜえ」

呟きと共にいつきに主流煙を吸い込み、吸殻をポイっとなげやる。

戦いが動き始めた。

第29話：不良のくせになまいきだor2 注：破壊神は出ません（後書き）

気がつけば5ヶ月以上も更新しておらず・・・なんという放置プレイ・・・

ですが！ついに今日！更新されました。それで勘弁してくださいまし

今回は前回の続きです。武藤くんなり、幾斗くんなりが一生懸命喧嘩しました。

不良グループの頭も、自分の男を磨きましたね？（ハア？

彼らの活躍？見てくださってありがとノノ

そして、おそろしいスケツトも2名出てきましたね。結構、このコンビ好きなんで今後もたまにちよくちよく出てくるかも？

今回も女性陣は出番なしでしたね・・・

みなさまのコメント、評価、お待ちしています。もらったら喜びます！ ココ重要

次回予告的な何か

今回はついに青海北の本隊が動きます。もちろん女性陣も出ます！幾斗、武藤、山木戸の3人もさらなる活躍をみせてくれると思います。

複雑な過去、縄張りにつるさい暴走族、イロイロからんで大爆走でしゅ

では

第30話：我が逃走（前書き）

おひさしぶりです^^

第30話：我が逃走

校舎は次々と派手な飾りで満たされていく。

青海高校文化祭、通称青海祭が着々と近づいているからである。

生徒達は忙しそうに、だが楽しそうに準備をすすめていた。

幾斗、武藤、山木戸も例外ではない。

彼らの場合は一般人よりも重い仕事をさせられていた。いわば生徒指導による喧嘩した罰である。

軽音部のライブ会場となる体育館のパイプ椅子1300席を出す仕事をたった3人でやらされることとなっていたというわけである。

「ダ・・・ダルすぎる・・・」

頭に鉄十時を浮かべた幾斗が怒りで震える手で椅子を持ち上げる。

幾斗や山木戸にくらべればぜんぜんたいした傷のない武藤はいつもの軽い微笑を顔に浮かべ、椅子を悠々と運んでいた

「ですがよかったですじゃないですか、怪我けがも生徒指導もたいしたことなくて。椅子出で許されたことに感謝しましょうよ」

と、かなりポジティブな発言を鼻頭やら足やら手やらに包帯やらガーゼやらバンドエードをつけた2人に言う。

「ったく」

幾斗はそんな前向きな説得を聞いて、胸糞悪い思いを吐き捨てる。

「で？ 奴らの動きはどうなんだよ？」

「ああ、あれ以来派手には動いてねえ」

山木戸が幾斗に言葉を返す。敵はまだ動いてない。だが、いつ動いてもおかしくない。向こうも、この前の戦闘で随分腹が立っているだろう。

「今は様子を見ましょう」

武藤が微笑を崩さぬまま言った。山木戸も幾斗もきびすを返す。

賑わう校舎、文化祭が近づいている。3人だけしかない体育館はまるで別の空間のように静まりかえっていた。

それから椅子も半分ほど並べた頃合のことであつた

「山木戸さん、大変つす!!」

そう言つて体育館に駆け込んだ、山木戸の下っ端は荒い息を落ち着かせる間もなく話し始める。

「こつもんに・・・校門に族が来てます。で、頭を出せつて言つてます。」

下っ端はそこまで伝えると息を静めるのに専念しはじめた。

「ああ？族？」

「武藤、元ゾッキーだろ？なんか聞いてねえーのかあ？」

「私は別になにも」

「とにかく言つてみようぜ」

山木戸の言葉と共に3人は体育館を飛び出した。あれやこれやで賑わう校舎を抜けて、校門へ急ぎ向かう。

校門には青海の不良達が集まっていた。山木戸の下っ端、分隊の連中や3年の先輩ヤンキー等である。校門を半円で囲むようにして密集した仲間を掻き分けて、校門に出る

「ういつす、武藤さん。お久しぶりつす」

ひとりの少年が武藤に言った。黒い色の服。俗に言う特攻服を少年同様、その族の仲間は全員着ていた。それぞれ刺繍がどこされてお、爆走天使、鬼魔愚零、喧嘩上等など統一性はない。ただ唯一の同じ刺繍は背中に大きな文字で3文字「爆鬼天^{はくきてん}」という文字が書かれていたことだろう。

つまり彼らのチーム名である

「近藤さん。立派に総長を務めているようですね。」

武藤が少年、近藤に最初はOBとしての言葉をかける

「はい、武藤さんのおかげつす。」

近藤は少しばかりハニカミながら武藤に答えた。まわりの奴らにそ

れに続いた・・・

「ところで、今日はなんの用ですか？」

武藤が主題に話を向ける。これが武藤、幾斗、山木戸の一番の問いである

「はい。実はつすね、隣の宝美町の族の白龍ってあったじゃないっすか？」

「はい、私が現役だったころ激しい対立と抗争をしていましたね」
武藤のすこし懐かしそうな目を幾斗は見た。

「まあ、あの抗争は武藤さん、湯水さんが”蒼鬼”の力借りて終わらせましたよね」

「はい」

武藤は近藤が蒼鬼という言葉を出したとき、チラリと幾斗を見た。
幾斗は何も気にせず近藤の話を聞いている。

「実は最近、爆鬼天と白龍の対立が激しくなっているんですけど、武藤さん達、青海北高校と抗争やってるそうじゃないっすか？」

武藤、山木戸は首を縦に振る。

「青海北に蛇が入学してます。北は蛇が指揮ってるっす。どうやら蛇は宝美の白龍を使って青海に侵攻するみたいなんすよ」
それを聞いて山木戸がツバを吐いた。

「やれやれ、また敵が増えんのかよ。クソウゼエなあ」

「蛇は白龍に青海を渡すみたいっす。そーなったら俺らはすげえ歯痒いわけっすよ」

近藤が続ける

「それなんで、青海北対抗勢力に俺ら爆鬼天も加わりたいんすけど？」

と最終的な目的を伝える。武藤、山木戸はそれを聞いて歓迎した。
「そりゃありがたいね。こちらら戦力不足ですんげえ困ってたわけよ。そりゃあ助かるわ」

山木戸が近藤に右手を出す。近藤も握り返す。

ここに青海連合が結成された。いかなる外敵をも跳ね返す連合とな

りえるために

「あと、敵には蛇がいます。武藤さん、蒼鬼は仲間に引き入れられませんかね？」

近藤はかつて、この地で起こった戦闘で唯一、蛇に対抗できた男のあだ名を出した。それを聞いて武藤はまたチラリと幾斗を見る。

「大丈夫です。蒼鬼はすでにこちら側にいます」

その言葉に近藤は「マジス力？」と驚いて、その後「さすがっす」と言っていた。

当の蒼鬼本人は、自分が蒼鬼と呼ばれてることも知らないの、違う世界の話のようにその話をきいていたが・・・

「今日のところはこれで引き上げます。作戦会議なり、集会なり、流しなりの時は呼んで下さい。」

近藤はそれだけ言い終わると仲間を引き連れ校門を出た。校門の外に止めてあったバイクにまたがり、爆鬼天のメンバーは走り出した。時折、爆音をバイクから発しながら、その後姿を学校前的大通りへと溶かしていった。

「なんか大変なことになってきましたねえ。まさか蛇がからんでいるとは」

武藤も、山木戸も蛇の名前ぐらい知っている。本名は中川裕也。なかがわゆうや喧嘩の腕っ節は、本当に強い。最強の称号が良く似合う男である。

以前の抗争時、爆鬼天を壊滅まで追い込んだが、爆鬼天に味方した通称”蒼鬼”にやられ、結果的に白龍と爆鬼天は停戦した

「せっかくの文化祭。僕達に椅子並べをやらせたこと蛇に後悔させてやりましょう」

武藤、幾斗、山木戸がニヤリと笑った。

「1年B組、赤城幾斗くん。至急、生徒会室までお越しください」
校内のあちらこちらに設置されたスピーカーから、生徒会長の声がした。幾斗を呼び出しているようだ。

体育館で椅子並べの続きをしていた幾斗は急な呼び出しに、心底面倒くさそうに歩き出した

「ったく、何の話だっの」

文句をブツブツ言いながら体育館を出て、本館3階の生徒会室へと向かう。

5分歩いてたどりつき、ノックもしないでドアを開ける

「なんか用？」

幾斗は、雛菊に加え、大量の先生が待っているものだとしてつきり思ったが、実際は資料の山に埋もれた机に座る雛菊だけであった。

「い・・・幾斗くん。ごめん、呼び出したりして。」

「別に、で？なんか用？」

幾斗の質問を聞いてから雛菊は立ち上がり、立てかけてあった折りたたみパイプ椅子を幾斗の前に出す。

「うん。とりあえず座って。」

いつもそれなりに明るい女の子だが、今日は少し緊張しているのか言葉がたどたどしい。

幾斗はとりあえずパイプ椅子にどかと座ると雛菊に顔を向ける。

雛菊も椅子を出し、幾斗と向き合う形で座る。

「ねえ、幾斗くん。もしかして、何か重大な事件に巻き込まれてたりしない？」

「はあ？」

雛菊の突然の問いに幾斗は戸惑った

「例えば、隣の高校と高校同士で喧嘩してるとか・・・そんな感じの事件」

雛菊は幾斗に問うたが幾斗は真正面からは受け止めない

「なんでそう思うんだ？」

「このまえ稲妻神社で喧嘩した件と、最近、青海北高校の生徒に青

海高校の生徒が襲われる事件が増えてるから・・・」

雛菊は目線を自分のつまさきに送った。とても幾斗の目をみて話せる内容じゃないと思ったのだろう

「もし、俺がその事件とやらの巻き込まれてたら、雛菊はどうするつもりなんだ？」

幾斗も自分が一番気になる質問を雛菊に持ちかけた。

だが、雛菊がとても自信なく言葉をつむいでいた原因はここにあった。もし、幾斗が事件に巻き込まれていても、自分はどうしたらいいかわからないのだ。だから、もしも本当だった場合の具体的対策なんてあるわけもない。

「雛菊。俺らは、あんたの予想通りの事件に巻き込まれてるよ。だがなあ、もうこうなっちまった以上、やるしかねえんだよ」

幾斗は雛菊にすっぱり言った。

「やるって・・・喧嘩？」

「そうにきまつてるだろ？」

またまたスッパリと言い切られ、雛菊は少し絶句するが

「でも、私、安曇から聞いたけど青海北って人数多いんでしょ？」

「人数なんて問題じゃねえよ」

「でも、ほら、喧嘩なんかしなくても話し合いでなんとかするはずだよ」

必死で幾斗を説得しようとするが、それでも幾斗は聞き入れてくれない

「あのなあ、話し合いでなんとかするなら、こんなことにはなつてねえーっの」

「じゃあ、他に手があるはずだよ。だって、相手は不良だけど人間だよ？きつと何とか・・・」

雛菊の言葉は幾斗には届かなかった。雛菊が必死で搜した言葉は、残念ながら幾斗には響かない

「わりいけど、今回ばかりはなあ会長の言うことだとしても聞けねえ」

幾斗は鋭い目つきで雛菊を見る。

「話し合いで和解といきたいのはやまやまだがなあ。そんなに甘い世界じゃないもんでね」

そこまで言い終わると幾斗は何気なく席を立った。雛菊はどうしたらいいかわからない

雛菊には不良の世界がわからない。今まで人生で、一度も不良をやったことがないのだ・・・当然だろう

だから、雛菊は幾斗にどうアドバイスすればいいのかわからない。

彼女は、困惑し、それでも彼をどうにか引きとめるための言葉を探す。

この前も稲妻神社で喧嘩したという幾斗。体には無数のシップ。顔には絆創膏。ばんしゅうこう

その程度で今度もすめばいいが、そうもいかないのではないかとという考えが雛菊の頭に根を下ろしていた。

だが、困惑する雛菊に幾斗は言った。

「それによ、武藤も俺も、お前らになんか被害がでることだけは絶対避けたいんだよ。俺らにとってお前らは大切な存在だからよ。」

幾斗は少しばかりの微笑を雛菊に向けた。武藤のようにさわやかではなかったが、その笑顔はいたずらっぽく、優しかった。

胸がドキつとした

幾斗の言葉が明らかに、自分を守ると言ってくれていることにも、ひなぎく

自分では彼を止めることが到底できないほど彼の決心が固かったことにも、どこか嫌な予感がすることにも雛菊はドキつとしてしまった。複雑な気持ちであろう。

学ランのすべてのボタンを開けていた幾斗は、寒くなったのか？ 3個ボタンをしめて未だに不安な顔を向ける雛菊に背中を向けた。

幾斗は生徒会室から出ようとする。

生徒会室の外はガヤガヤと騒がしい。文化祭の準備で賑わう生徒達、指示を出す役員、先生達の声・・・

そんな中、どこか薄暗く、静寂が支配する生徒会室

「まあ。話はここまでな。またあとで・・・」

幾斗は雛菊に背中を向けたままそう言うと、スライド式の生徒会室のドアを開けようとした。

「まって！」

突然立ち上がった雛菊は幾斗に弾みで飛びついてしまった。だが、そんなことを気にしている余裕など無い

「だからよ俺は・・・」

力を込めて握られた、幾斗の制服。幾斗は雛菊を振り返らない。雛菊も握ってはいるが、幾斗を見上げない。

「おい・・・」

幾斗が呼んでも雛菊は少しばかり黙っていた。

「私だって・・・私だって・・・幾斗くんが傷つくところ見たくないよ・・・」

雛菊は本音を幾斗に告げた。幾斗や武藤にとって、雛菊や安曇を守るために自分が犠牲になることは別にたいしたことではないし、どうでもよいことなのかもしれない。自分達がボロボロになっても、守るべきものを守れば、それでいいと考えている。それが、彼女らにとつての誇りであり、目的であり、命運だと信じている。

だが、守られる側としては心配極まりない。

男と女だとか、彼女だ彼女だとか、そんなのを通り越して雛菊にとつて・・・もちろん安曇や美貴にとつても幾斗や武藤・・・友一はかけがえの無い存在なのだ。自分を守るといつてくれたことは嬉しい。だが、それで傷ついて・・・痛い思いをして・・・そんなことになって欲しいはずがあるわけがない。

彼は大切な存在なのだから。

2人はしばらくの間、無言でたたずんでいた。

幾斗を握る小さな手のひら。細い指を精一杯学ランに食い込ませて・・・

がやがやと賑わう外と、静寂の支配する生徒会室。たった一枚の薄いスライド式ドアに遮断された、沈黙の世界。

「なあ、さっき話してた蒼鬼って誰のことだ？」

幾斗が生徒会室に呼び出されてから、山木戸は武藤に尋ねた。

「昔、宝美町と青海町の族・・・白龍と爆鬼天が抗争していたのは地元不良の世界では有名な話ですよ？」

武藤が出し終わった椅子の1つに腰掛けて話し始める。山木戸は踵きびすをかえず。

「その時、敵・・・白龍といったほうがいいですね・・・白龍は蛇と呼ばれる最強の不良を仲間に取り入れることに成功したようで、当然、蛇を味方にした白龍が抗争で優位を獲得したわけです。」

「ほお・・・」

「蛇の力は予想以上で、爆鬼天はほぼ壊滅。抗争は白龍の勝利間違いないと言われるまで追い詰められました。」

「ですが、いたんですよ。蛇に対抗しうる少年が・・・私の通ってた青海中学の隣の中学・・・青海西中に・・・。という経緯で彼が爆鬼天に加担することになったかは知りません。しかし、彼は最後の戦いの時に先陣を切って攻撃にかかっていました。そして・・・」

「蛇を倒したってわけか。」

山木戸が武藤の最後のセリフを取る。武藤は気にした様子も無く

「蒼鬼。本名、赤城幾斗・・・」

武藤は親友の名を言った。族時代は恩人であり、まったく別の世界の格の違う人物だと思ってきた幾斗・・・。今では良き友であり、

信頼に足る仲間である。

「幾斗が・・・蒼鬼か。まあ、納得は出来るな。」

山木戸は不思議には思わないそぶりと言った。

「蛇か・・・ちっさいゴタゴタがこうも発展してしまうとはね。予想外だなあ」

山木戸の言葉を聞いて武藤は軽く否定した

「いえ、蛇はもともと青海を傘下に入れることを強く望んでいたの
で、今回の口実をきっかけに乗り込んでくるのは必然だったのかも
しれませんね」

蛇。最強の男。だが、青海の不良2人はひとつも動じない。

「まあ、何にせよ楽な戦いにはならないだろうな」

山木戸の発言を最後に、2人の会話は途切れた。椅子を並べ終わつた体育館は静かさという霧につつまれたように、ひどく静寂であった。

体育館の窓から差し込む優しい光や、外の賑やかな雰囲気から離れた、どこか寂しげな、それでいてどこか懐かしいような気がする。

静寂を打ち破ったのは山木戸だった

「なあ、武藤。俺達、不良ってなんなんだろうな？」

「はい？」

突然の問いに多少戸惑う武藤だったが、山木戸は構わず続ける。

「俺は中学の頃、気が弱え・・・いわば、いじめられる存在だった。
あだ名なんて、パシリだったからな」

自分の過去を振り返りながら、苦笑をする。

「だから、俺をまったく知らないこの学校に来て、不良になった。
今までいじめられてきた分人を見下し、今まで舐められてた分人を見下げるためにな」

話の内容が始めが酷く滑稽だが、武藤は真剣な表情で山木戸の話を聞いていた。

「お前も知ってるだろう。俺は弱い奴をいじめるし、平気で暴力を

振るう。俺はそれを平気で続けてきた。おかげで仲間も出来たし、人に舐められなくもなった。すべては中学時代の暗黒の思い出への復讐だとずっと自分の心に言い聞かせてきた。」

山木戸はそこまで言い終わると、武藤の隣の椅子へドカッと座る。足を広げ、ふんぞり返る不良式の座り方。

「だがよお、実際は復讐なんて攻撃的なことじゃなかったんだ。俺はたんに怖かったただけなんだよと気がついたわけ。強い自分を・・・人を容赦なく殴ったり、イジメたりできる地位を示していないと、またイジメを受けるんじゃないかってな。嘘やでまかせや、派手なことやって・・・人を見下して俺は今の地位を身につけた。でも、それってやっぱ結局は臆病な弱虫のやることだったんだよな。」

山木戸は自分のやってきたことを鼻でわらった。惨めだった。

「おめえーも聞いたかもしれねえーが、俺は一度、まったく関係ない女を絡んだことがある。そこで、幾斗の女に止められた。自分を止められたことで自分が間違っていると否定されたようで、いや・・・実際は俺が間違っていたし、それもわかっていたがあからさまに批判されたようで、俺は幾斗の女を殴った。そこに幾斗がやってきてな、俺を瞬殺して、女を保健室へ運んでいった。そこで気がついてた・・・もしそれをヒーローショーに例えれば、俺が怪人なんたらで、幾斗は仮面ライダーなんたらなんだろうってな。」

体育館の中で山木戸は不良後輩に自分の心をおおっていた何かを取り払うように話しかけた。

後輩不良は少し考えてから言葉を返した

「山木戸さんはオビラプトルをご存知ですか？」

「は？なんだそりゃ？タイ料理か何かか？」

武藤の質問に山木戸は多少なりと困惑する。が、当の武藤は気にせず続ける

「白亜紀後期に生息していたという、恐竜の名前ですよ。」

「・・・・・・」

まったく話の読めない山木戸

「オビラプトル。意味は卵どろぼう。なんでそんな名前がついたかと言うと、発見された化石の近くに卵があり、その卵はプロトケラトプスという他の恐竜のものだと考えられ、つまるところこのオビラプトルは卵を盗んでそれを食べて生活していたと考えられたためなんですよ」

両親が2人とも生物学者。幼少期から家に山とつまった生物、地質、古生物の本を読み成長してきた武藤勇気の膨大な知識のかけらを山木戸は聞かされていた。

「ですが、最近の研究で、実は卵を泥棒したわけではなく、その卵は自分の産んだ卵で、オビラプトルは食べていたのではなく卵をあたためていたんじゃないかといわれているみたいでして。むしろ、そっちのほうが有力な説と言われているわけですよ」

よくわからないというような顔をしている山木戸

「卵泥棒・・・オビラプトルに言わせれば、なんと不名誉な名前なんだと言っていそうですよね」

武藤は軽く笑って言った。

「山木戸さん、人というのは相手をまず第一印象で固定し、その印象を軸にして相手との接し方を決めます。そして相手と接して、ある程度親しくなったらどこまでなら自分わがまま・・・言い方悪いですね。自分の考えが通じるか、自分の考えを行動してくれるか大まかに測りなおします。そうですね、自分より下だと考えれば悪ければパシリにしてみたり好意をもったならばおせっかいをやいてみたり、対等だと思えば友人や仲間に、上だと思う場合は従うか・・・または関わろうとしなくなるものです。第一印象では怖かった人も話してみるとなかなか気が合い、今では仲良しなんてことはいくらかでもあるものです。」

山木戸の不良脳は武藤の言葉をひつつしに理解しようとしていた。「そこで人というのは自分のキャラをつくり出そうとするわけです。オビラプトルは卵がそばにあっただけで卵泥棒の名前がつけました。つまり、人と人のコミュニケーションをする中で、第一印象がとても

大切というわけです。第一印象というのは、主に容姿や行動でついてくるものです。例えるなら・・・そうですね。ボントン、長ラン、リーゼントの少年がいたら？あなたはどんな印象を受けます？」説明が質問に変わった。

「ああ？うーん。昔ながらの不良だなあ・・・と思うかな・・・」と返事しておく。

「では、路上にツバを吐いたり、肩を怒らせて歩いていたりしたら？おまけに怖い目つきでジロジロと周りをみていたら？」

「・・・そいつは不良なんだなあ・・・と思う」

「そうでしょう。というように最初は行動や容姿で印象を操作できるんです。あなただって最初に不良になったと思った時・・・格好から入ったんじゃないかと思いますが？」

そう聞かれると山木戸も心当たりがある。

「ああ・・・そうだ。」

「でも、第一印象は親しくなるうちにだんだんと崩れていくものです。だから人というのは一生懸命、維持しようとするんですよ。自分が考える人から見た自分の理想像を。だから、あなたは喧嘩したり、弱いものをいじめたりした。自分が喧嘩に強い、逆らったらただじゃ済まされない不良だとみんなから思われるために。そうやって自分の姿や存在をつくっていく。印象操作。だが、印象操作によって塗り重ねられて創り上げられた自分があまりにも相手の印象に根をはってしまうと、本来の自分が出せなくなっていく。そして嘘の自分に逆らえなくなってしまうたりする。」

そこまで言い終わると武藤は少しばかりだまった。また体育館に静寂が戻ってくる。

だが、それもほんの数秒のことだった。

「・・・お前も自分を創って来たのか？」

山木戸が武藤に尋ねた。武藤はすこしばかり黙っていたが、

「そう・・・ですね。私も演じて来たのかも知れません。不良、武藤

勇気を。」

武藤はそこで一息置いてから、また口を開いた

「でも、最近は演じなくなりました。私を・・・武藤勇気を武藤勇気と見てくれる仲間ができたからでしょうか。」

武藤勇気はそこでいつものさわやか微笑スマイルへと変わっていた。その、誰もを優しく包むかのような柔軟な笑み。温かい笑顔。

「そうかよお・・・なら、俺はどうすりゃいい。」

「幾斗さんがなぜカツコイイかわかりますか？」

質問をしたのに質問が返ってきた・・・

「わからんなあ」

とりあえず言っとく。

「彼は自分に素直なんですよ。自分が不愉快だと思えばそう言うし、悪いことだと感じれば悪いという。例えるなら・・・すみませんね・・・例えが多くて・・・」

「いや、例えがなきゃ、おめーの話、一個もわからんし」

「・・・そうですか・・・例えば、ある教室でイジメがおこったとすれば自分がいじめられるのが怖いからとかいう理由で周りの人もいじめたり、関わらないようにしたりします。つまりその教室ではその子をいじめる空気の流れが作られたわけです。ですが、もしそのクラスに幾斗さんがいたら、彼はその流れを一切無視するでしょう。彼はイジメを容認するような人ではないし、イジメがカツコイイと思っているわけではありませんからね。」

武藤は親友を自慢するような口調で話していた。まあ・・・実際そうだったか

「つまり・・・？」

「あなたも素直になればよいんですよ。自分が正しいと思うことを精一杯やればいいじゃないですか？」

武藤勇気はまたもや優しくなスマイルを山木戸に向けた。

「簡単に言ってるなや。大変なんだぞ・・・それ。」

山木戸は苦笑交じりで武藤に返した

「大変なことをやってるからこそ幾斗さんはかつこいいんじゃないですか？」

ああ・・・

ああ・・・

やっと気がついた。

山木戸という不良は自分では制御しているつもりでも、いつのまにか制御しきれなくなっていた偽の自分を

必死に必死に守り続けてきたんだ・・・と

そうやっていっているうちに、勝手に自分の心にあきらめをつつてしまった・・・

情けない。

結局は、相手の目線が怖くて逃げてたんじゃなくて、そんな自分から逃げていただけ。

「なあ、武藤。よく小学校のセンコーがこう言うじゃねえーか。自分から逃げるな　ってな。ばかばかしいと思ってたが、今の自分にこんなにも当てはまるなんて夢にも思っちゃいなかったさ。」

体育館には自分と武藤と・・・半分までは幾斗と並べた椅子が綺麗に並んでいる。当日は軽音部やなんやの演奏会場になるだろう場所。今は2人しかない。

「ありがとよ、武藤。」

「はい？」

「話聞いてくれたのがおめーでよかったよ。」

山木戸はその強面の口を二力つとさせると、武藤にそういった。

「ああ、私が言ったのはたくさん存在する人の一つのパターンですよ。人が誰しも演技をしているわけではないですから。」

武藤はニツコリと言った

「そうだな・・・幾斗や幾斗の女、お前の女やあのオタク野郎やギヤルがお前に向かって何かを演じているようにはとても見えないな」
山木戸はもう一度ありがとと言うと、ポケットから安っぽい煙草

の箱を出しながら体育館のボロトイレに向かって歩き出した。

武藤はその、どこか重い荷をおろしたような先輩不良の背中を少しばかり見ていた。

ありがとう・・・か

武藤は自分に言われたその言葉をもう一度心の中で呟いてみた。りした。

それから数時間後。学校内はほとんど抜けの空となった。なにやらハデな飾りや、よくわからない看板が立ち並んでいるわけではあるが、人はさほどいない。校庭に出て部活してるか、帰ってるか・・・または部室で活動中か・・・。

「ユーチ、爆鬼天のことは？聞いたか？」

幾斗が尋ねると、ユーチは軽く頷いた。どうやら武藤がメールを送ったらしい。

爆鬼天が戦力に加わったことでそれなりに勝率は上がるのだろう。「それにしても、なにやら事が大きくなりましたね・・・」

まだ前線には立ったことがない友一は、戦場の厳しさを知る由もない。後方で・・・安全地帯で作戦を立てるだけの役職。

「まあ、なににせよ・・・俺は俺がやるべきことをやるまでだわなあ」

山木戸が壁に寄りかかりながら言った。

「いつ攻めてきますかね？」

「たぶん。文化祭の日だ。」

なにぶんめんどくさそうに幾斗が言う。実際、めんどくさいのだから。

幾斗はなぜか、雛菊からの呼出し後、どこか不機嫌である。武藤や友一や山木戸が聞いても何も答えない以上、なぜ幾斗が不機嫌になったのかわかるわけがない。雛菊に聞くというのも手だが、彼女の場合、すぐ自分を責めてしまうという癖があることを友一と武藤は知っていたため、下手すれば話をさらにややこしくしてしまう可能性があるということを考えて雛菊には聞かないことにしておいた。「いつ攻めてくるか定かではないというのは作戦立案上とても不利です。何かいい案はありませんか？」

指令本部長佐山友一が聞くが

「うーん。スパイでも送れってのか？」

「いえ、盗聴器をしかけましょう」

「つか、適当に北を捕まえて聞き出せばよくね？」

不良の脳みそなんてこんなもん。スパイが見つかったときこちらから援護ができないので危険。盗聴器なんて高校生が持つてるわけないし、捕まえて聞き出すのも難しい。もし聞き出した情報が嘘だったり、または下っ端は知らなかったり・・・

しかし、不良で編成された指令本部。友一が何を思おうが関係なく話はすすめられた。

「スパイを送るか？盗聴器は無理だろ。」

「北を捕まえるのもそれなりに大変ですからね。スパイを送るしかないでしょう。」

「だな」

「・・・・・・」

となると、問題は誰が北に忍び込んでスパイ行為を行うかである。各々、誰が適しているか慎重に考える。

「あ・・・あのさあ・・・なんというか、その作戦はちょっと・・・」

「

友一が言いかけるが見向きもしてくれない不良諸君・・・

「つか、俺や武藤、山木戸は相手に顔をわられてるよな・・・」

「ああ・・・ごによいによ

「でもさあーごによぎよによ

「はあ？そこはあえてのごによごによ

3人がなにやら話している。友一にはいまいち聞こえない。
しかたがないので椅子にすわってボヘーしていると・・・

「で？いいよな？友一？」

突然、幾斗に話しかけられて、反射的に

「あつうん・・・」

と言ってしまった。

「よし、作戦はできた。あとは成功させるまで！頼むぞ友一君！」
山木戸がニコニコしながら友一の肩をたたく。

「ちよつと・・・まって・・・何が？」

「友一君を特殊諜報員。別名スパイに任命するということですよ」
なんともさわやかな笑み。武藤は友一の肩をつかむと、頼りにして
ますよ〜とでも言いたげな目を向ける。

ここで気がついた。

なにかとんでもなく理不尽な出来事が自分がボケーっとしているあ
の数秒に起こっていたということに。

破滅だ！

幾斗も武藤も山木戸もどこか楽しげに笑っていた。

寒い風が吹きすさぶ今日、この頃。

爆鬼天と白龍はその時、ついに開戦した。

白龍への攻撃通知。つまるところ宣戦布告なしに完璧なる奇襲攻撃を爆鬼天はかけた。場所は青海と宝美の境にある小さな空き地であった。

青海高校への進撃予備軍として駐留していた白龍20人、単車10台に対し爆鬼天は30人、単車15台の圧倒的人数差で攻撃。

突然の奇襲に驚いた白龍は総崩れとなり、本部へ撤退を要求。しかし、あの場所から国道をのぼられれば急所をつかれかねないと判断した白龍本部は死守を命じた。援軍が到着したのは約10分後であったが、その時すでに白龍は70%も戦力を失っていた。戦闘から約30分後、白龍は援軍とともに全滅。あるものは逃げ出し、あるものは降伏した。

この出来事を境に、爆鬼天と白龍は完璧なる交戦状態に陥り、町境では攻め込もうとする爆鬼天と攻め込まずとする白龍の激戦が繰り返された。

このことは数時間も隔てず、青海高校司令部へと伝わる。

爆鬼天3代目総長、近藤は前総長が成し得なかった、白龍の制圧と全滅を狙っていた。ずっとずっと。

今回のことで、武藤、蒼鬼が味方につき、その夢も確信へ変わろうとしていた。

少年たちは走った。

己の信じる道を……

第30話：我が逃走（後書き）

今回も完結はできませんでしたね…^^；

今回、久しぶりに雛菊が登場。新キャラも数人登場・・・

呼んでくれた方、コメント、評価してくれた方、お気に入り小説に登録してくれた方…心から感謝いたします。

あなたがたがいるから、私も楽しんで小説がかけるといふものです
^^

コメント、感想、評価、お時間あればお願いしますね ココ重要w

PS

今回のサブタイトルの元ネタがわかった方。いれば、教えてくだ
さいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4235d/>

～ 生徒会長が愛死天流 ～

2010年10月10日18時51分発行